

木古内町
きこないちょう

幸連 4 遺跡

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

第2分冊

本文編2 (VI章)

VI C地区の遺構・遺物

令和4年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

記号等の説明

1. 遺構の表記は以下に示す記号を使用し、原則として確認順に番号を付した。

H : 壁穴住居跡

HP : 住居に関連する土坑・柱穴 HF : 住居内の焼土 HFC : 住居内の剥片集中

HSC : 住居内の礫集中 HCC : 住居内の炭化物集中

P : 土坑

PP : 土坑内の小土坑 PF : 土坑内の焼土

F : 焼土 PC : 土器集中 FC : 剥片集中 SC : 磕集中 BP : 埋設土器

2. 遺構図の縮尺は、基本は1/40としたが、大型の住居は大きさに応じて1/60・1/80、一部の遺物出土状況については1/20とした。いずれの場合もスケールを示した。

3. 遺構図には方位記号を付した。方位は真北を示す。発掘区の南北方向ライン（数字ライン）は公共座標の南北方向に対して8° 45' 01" 東に傾いている。遺構平面図の+はグリッドラインの交点で、傍らの名称番号は右下のグリッドを示している。レベルは標高（単位：m）である。

4. 遺構出土遺物で床面出土には「床」、坑底出土には「坑底」を掲載番号の隣に付した。

5. 遺構図に掲載している実測図等の数字は掲図中の掲載番号と同一である。

6. 土層の表記については、基本土層はローマ数字、遺構の層位はアラビア数字で示した。

7. 土層の色調は『新版 標準土色帖 2002年版』（小山・竹原2002）に従った。

8. 火山灰は『北海道の火山灰』（北海道火山灰命名委員会1982）に順じ、以下の略称を用いた。

Ko-d : 駒ヶ岳 d 降下火山灰 B-Tm : 白頭山 - 苦小牧火山灰

9. 土層の肉眼的な混合比率を表現するために以下のようないくつかの表現を用いた場合がある。

A = B : A と B がほぼ等量。 A>B : A が主体。 A ≫ B : B が微量。

10. 主な包含層であるⅢ（上・下）層とM・RM層にはそれらの関係を視覚的に理解しやすいように断面図にそれぞれトーンをかけた。

11. 遺物の実測図の縮尺は以下のとおりで、いずれもスケールを示した。

復元土器・土器拓影 : 1/3 土偶 : 1/2 剥片石器・石斧・石のみ・石製品など : 1/2

石器接合資料、石斧など・台石・石皿以外の礫石器 : 1/3 台石・石皿 : 1/4

12. 土器図には正面図では表現できない箇所の図を追加して補助的に掲載しているものがある。この補助図は「⊕」印によってその実測位置を示している。「⊕」印は土器の上面観を模式化したもので、十字の垂直線は下端が正面側、上端が裏面側を、十字の水平線は左端が左面側、右端が右面側を示す。「⊕」に太線がある場所が補助図の位置で、太線が円の内側にある場合「⊕」は内側、外側にある場合「⊕」は外側を示している。

13. 土器に粘土の積み上げ痕である接合面が確認できる場合、断面図に接合面を記入した。正面図の上に「↖」や「↑」の印を付けてその位置を示し、「↖」は正面側、「↑」は裏面側である。数字は断面図と対応し、下部から順に付けた。但し、記入された接合面のみが製作工程上の「継ぎ目」を示すものではない。

14. 石鏃は基部のアスファルトの付着範囲を黒塗りで示した。

15. スクレイパー・Rフレイク・Uフレイク・剥片は肉眼で観察可能な光沢面の範囲を灰色で示した。

16. 尖頭器関連の接合資料の実測図においては、全体の状況を示すと同時に腹面側（内側）の状況の

実測図を示したものもある。

17. 実測図を掲載した石器・接合資料はすべて写真図版に掲載し、さらに接合資料に含まれる石器については、接合資料の縮尺に合わせて再度掲載した。また、写真図版にのみ掲載した接合資料もある。
18. 接合資料は、視覚的に図を理解し易くするために、尖頭器調整剥片接合資料の内面図を除く接合剥片の腹面や両極剥離による分割面を以下の3種類のトーンで示した。

一次調整剥片の腹面		素材の分割面	
二次調整剥片（分割礫や剥片素材の調整剥片）の腹面			
19. 接合資料の中で、剥片石器や石核の素材である剥片もしくは原石を分割したものについては「個体A」「個体B」・・、さらにそれらから剥離された剥片を素材にするものは「個体a」「個体b」・・と呼称した。
20. 接合資料と共に掲載した個々の石器（接合する単体石器）は工程ごとに剥離順で並べている。
21. 接合資料は、剥離工程を理解し易くするために模式図を作成し、実測図と共に掲載した。模式図は同一段階の剥離群毎にトーンを変え、剥離の流れを番号で示した。ただし、切り合い関係がなく、前後関係が明らかでないものにおいても便宜上番号を付けたので、詳細は個々の説明を参照願いたい。
22. 剥離模式図の縮尺は任意である。模式図中の矢印（→）は接合剥片の剥離方向を示すが、接合剥片の打点側が欠損している場合は切れた矢印（-→）、重なって見えない部分は破線の矢印（-·····→）で示した。
23. 磕石器に関して敲打痕はV——V、すり痕（機能部平坦面）は←——で範囲を示した。
24. 掲載一覧表の計測値は現存値を（ ）で、復元値を〔 〕で括って表し、計測不能は「-」と表記した。
25. 石質は凝灰岩を泥岩に含めている。

第2分冊（本文VI章）目次

記号等の説明

目次・挿図目次・表目次

VI C 地区の遺構・遺物

1	概要	1
2	遺構	1
(1)	竪穴住居跡	1
(2)	土坑	214
(3)	焼土	264
(4)	土器集中	269
(5)	剥片集中	269
(6)	礫集中	276
(7)	埋設土器	276
(8)	盛土	276
3	包含層出土遺物	323
(1)	概要	323
(2)	C1 地区（斜面部・低位部）の遺物	323
(3)	C2 地区（廃棄域除く高位部）の遺物	369
(4)	C3 地区（高位部廃棄域）の遺物	384

第2分冊（VI章）挿図目次

VI C 地区の遺構・遺物

図VI-1	C 地区遺構位置図および包含層地区細分	2	図VI-25	竪穴住居跡 (24) H-3(3)	30
図VI-2	竪穴住居跡 (1) H-1(1)	4	図VI-26	竪穴住居跡 (25) H-4(1)	32
図VI-3	竪穴住居跡 (2) H-1(2)	5	図VI-27	竪穴住居跡 (26) H-4(2)	33
図VI-4	竪穴住居跡 (3) H-1(3)	6	図VI-28	竪穴住居跡 (27) H-4(3)	34
図VI-5	竪穴住居跡 (4) H-1(4)	7	図VI-29	竪穴住居跡 (28) H-4(4)	35
図VI-6	竪穴住居跡 (5) H-1(5)	8	図VI-30	竪穴住居跡 (29) H-4(5)	37
図VI-7	竪穴住居跡 (6) H-1(6)	10	図VI-31	竪穴住居跡 (30) H-4(6)	38
図VI-8	竪穴住居跡 (7) H-1(7)	11	図VI-32	竪穴住居跡 (31) H-4(7)	39
図VI-9	竪穴住居跡 (8) H-1(8)	13	図VI-33	竪穴住居跡 (32) H-4(8)	41
図VI-10	竪穴住居跡 (9) H-1(9)	14	図VI-34	竪穴住居跡 (33) H-4(9)	42
図VI-11	竪穴住居跡 (10) H-1(10)	15	図VI-35	竪穴住居跡 (34) H-4(10)	43
図VI-12	竪穴住居跡 (11) H-1(11)	16	図VI-36	竪穴住居跡 (35) H-4(11)	44
図VI-13	竪穴住居跡 (12) H-1(12)	17	図VI-37	竪穴住居跡 (36) H-4(12)	45
図VI-14	竪穴住居跡 (13) H-1(13)	18	図VI-38	竪穴住居跡 (37) H-4(13)	46
図VI-15	竪穴住居跡 (14) H-1(14)	19	図VI-39	竪穴住居跡 (38) H-4(14)	47
図VI-16	竪穴住居跡 (15) H-1(15)	20	図VI-40	竪穴住居跡 (39) H-5(1)	49
図VI-17	竪穴住居跡 (16) H-2(1)	22	図VI-41	竪穴住居跡 (40) H-5(2)	50
図VI-18	竪穴住居跡 (17) H-2(2)	23	図VI-42	竪穴住居跡 (41) H-5(3)	51
図VI-19	竪穴住居跡 (18) H-2(3)	24	図VI-43	竪穴住居跡 (42) H-5(4)	52
図VI-20	竪穴住居跡 (19) H-2(4)	25	図VI-44	竪穴住居跡 (43) H-5(5)	54
図VI-21	竪穴住居跡 (20) H-2(5)	26	図VI-45	竪穴住居跡 (44) H-5(6)	55
図VI-22	竪穴住居跡 (21) H-2(6)	27	図VI-46	竪穴住居跡 (45) H-5(7)	56
図VI-23	竪穴住居跡 (22) H-3(1)	28	図VI-47	竪穴住居跡 (46) H-5(8)	57
図VI-24	竪穴住居跡 (23) H-3(2)	29	図VI-48	竪穴住居跡 (47) H-5(9)	58
			図VI-49	竪穴住居跡 (48) H-5(10)	59

図VI-50	竪穴住居跡 (49) H-5(11)	60
図VI-51	竪穴住居跡 (50) H-5(12)	61
図VI-52	竪穴住居跡 (51) H-6(1)	63
図VI-53	竪穴住居跡 (52) H-6(2)	64
図VI-54	竪穴住居跡 (53) H-6(3)	65
図VI-55	竪穴住居跡 (54) H-6(4)	66
図VI-56	竪穴住居跡 (55) H-6(5)	68
図VI-57	竪穴住居跡 (56) H-6(6)	69
図VI-58	竪穴住居跡 (57) H-7(1)	70
図VI-59	竪穴住居跡 (58) H-7(2)	71
図VI-60	竪穴住居跡 (59) H-7(3)	72
図VI-61	竪穴住居跡 (60) H-7(4)	73
図VI-62	竪穴住居跡 (61) H-7(5)	75
図VI-63	竪穴住居跡 (62) H-7(6)	76
図VI-64	竪穴住居跡 (63) H-7(7)	77
図VI-65	竪穴住居跡 (64) H-8a・b(1)	79
図VI-66	竪穴住居跡 (65) H-8a・b(2)	80
図VI-67	竪穴住居跡 (66) H-8a・b(3)	81
図VI-68	竪穴住居跡 (67) H-8a・b(4)	82
図VI-69	竪穴住居跡 (68) H-8a・b(5)	83
図VI-70	竪穴住居跡 (69) H-8a・b(6)	84
図VI-71	竪穴住居跡 (70) H-8a・b(7)	85
図VI-72	竪穴住居跡 (71) H-8a・b(8)	86
図VI-73	竪穴住居跡 (72) H-8a・b(9)	87
図VI-74	竪穴住居跡 (73) H-8a・b(10)	88
図VI-75	竪穴住居跡 (74) H-8a・b(11)	89
図VI-76	竪穴住居跡 (75) H-9(1)	91
図VI-77	竪穴住居跡 (76) H-9(2)	92
図VI-78	竪穴住居跡 (77) H-9(3)	93
図VI-79	竪穴住居跡 (78) H-9(4)	94
図VI-80	竪穴住居跡 (79) H-9(5)	96
図VI-81	竪穴住居跡 (80) H-9(6)	97
図VI-82	竪穴住居跡 (81) H-9(7)	98
図VI-83	竪穴住居跡 (82) H-9(8)	99
図VI-84	竪穴住居跡 (83) H-9(9)	100
図VI-85	竪穴住居跡 (84) H-9(10)	101
図VI-86	竪穴住居跡 (85) H-9(11)	102
図VI-87	竪穴住居跡 (86) H-10(1)	103
図VI-88	竪穴住居跡 (87) H-10(2)	104
図VI-89	竪穴住居跡 (88) H-10(3)	105
図VI-90	竪穴住居跡 (89) H-11	107
図VI-91	竪穴住居跡 (90) H-12	109
図VI-92	竪穴住居跡 (91) H-13(1)	111
図VI-93	竪穴住居跡 (92) H-13(2)	112
図VI-94	竪穴住居跡 (93) H-13(3)	113
図VI-95	竪穴住居跡 (94) H-13(4)	114
図VI-96	竪穴住居跡 (95) H-13(5)	115
図VI-97	竪穴住居跡 (96) H-13(6)	116
図VI-98	竪穴住居跡 (97) H-13(7)	117
図VI-99	竪穴住居跡 (98) H-13(8)	118
図VI-100	竪穴住居跡 (99) H-13(9)	119
図VI-101	竪穴住居跡 (100) H-13(10)	120
図VI-102	竪穴住居跡 (101) H-13(11)	121
図VI-103	竪穴住居跡 (102) H-13(12)	122
図VI-104	竪穴住居跡 (103) H-13(13)	123
図VI-105	竪穴住居跡 (104) H-13(14)	124
図VI-106	竪穴住居跡 (105) H-13(15)	125
図VI-107	竪穴住居跡 (106) H-14(1)	127
図VI-108	竪穴住居跡 (107) H-14(2)	128
図VI-109	竪穴住居跡 (108) H-14(3)	129
図VI-110	竪穴住居跡 (109) H-15(1)	130
図VI-111	竪穴住居跡 (110) H-15(2)	131
図VI-112	竪穴住居跡 (111) H-15(3)	132
図VI-113	竪穴住居跡 (112) H-15(4)	133
図VI-114	竪穴住居跡 (113) H-16(1)	135
図VI-115	竪穴住居跡 (114) H-16(2)	136
図VI-116	竪穴住居跡 (115) H-16(3)	137
図VI-117	竪穴住居跡 (116) H-16(4)	138
図VI-118	竪穴住居跡 (117) H-17(1)	140
図VI-119	竪穴住居跡 (118) H-17(2)	141
図VI-120	竪穴住居跡 (119) H-18(1)	142
図VI-121	竪穴住居跡 (120) H-18(2)	143
図VI-122	竪穴住居跡 (121) H-19(1)	145
図VI-123	竪穴住居跡 (122) H-19(2)	146
図VI-124	竪穴住居跡 (123) H-20(1)	148
図VI-125	竪穴住居跡 (124) H-20(2)	149
図VI-126	竪穴住居跡 (125) H-20(3)	151
図VI-127	竪穴住居跡 (126) H-20(4)	152
図VI-128	竪穴住居跡 (127) H-21	153
図VI-129	竪穴住居跡 (128) H-23・24(1)	154
図VI-130	竪穴住居跡 (129) H-23・24(2)	155
図VI-131	竪穴住居跡 (130) H-23・24(3)	156
図VI-132	竪穴住居跡 (131) H-23・24(4)	157
図VI-133	竪穴住居跡 (132) H-25(1)	159
図VI-134	竪穴住居跡 (133) H-25(2)	160
図VI-135	竪穴住居跡 (134) H-25(3)	161
図VI-136	竪穴住居跡 (135) H-25(4)	162
図VI-137	竪穴住居跡 (136) H-25(5)	163
図VI-138	竪穴住居跡 (137) H-26(1)	164
図VI-139	竪穴住居跡 (138) H-26(2)	165
図VI-140	竪穴住居跡 (139) H-26(3)	166
図VI-141	竪穴住居跡 (140) H-26(4)	167
図VI-142	竪穴住居跡 (141) H-26(5)	168
図VI-143	竪穴住居跡 (142) H-26(6)	169
図VI-144	竪穴住居跡 (143) H-27(1)	171
図VI-145	竪穴住居跡 (144) H-27(2)	172
図VI-146	竪穴住居跡 (145) H-27(3)	173
図VI-147	竪穴住居跡 (146) H-27(4)	174

図VI-148	竪穴住居跡 (147) H-27(5)	175	図VI-197	土坑 (16) P-76 ~ 81	248
図VI-149	竪穴住居跡 (148) H-27(6)	177	図VI-198	土坑 (17) P-82 ~ 84・86 ~ 89	250
図VI-150	竪穴住居跡 (149) H-27(7)	178	図VI-199	土坑 (18) P-91 ~ 96・99	252
図VI-151	竪穴住居跡 (150) H-27(8)	179	図VI-200	土坑 (19) P-97・98	253
図VI-152	竪穴住居跡 (151) H-27(9)	180	図VI-201	土坑の遺物 (1) P-2 ~ 6	254
図VI-153	竪穴住居跡 (152) H-27(10)	181	図VI-202	土坑の遺物 (2) P-10 ~ 13	255
図VI-154	竪穴住居跡 (153) H-27(11)	182	図VI-203	土坑の遺物 (3) P-14	256
図VI-155	竪穴住居跡 (154) H-27(12)	183	図VI-204	土坑の遺物 (4) P-17・18	257
図VI-156	竪穴住居跡 (155) H-27(13)	184	図VI-205	土坑の遺物 (5) P-19 ~ 27	258
図VI-157	竪穴住居跡 (156) H-27(14)	185	図VI-206	土坑の遺物 (6) P-27 ~ 29	259
図VI-158	竪穴住居跡 (157) H-28(1)	187	図VI-207	土坑の遺物 (7) P-31 ~ 43	260
図VI-159	竪穴住居跡 (158) H-28(2)	188	図VI-208	土坑の遺物 (8) P-43 ~ 58	261
図VI-160	竪穴住居跡 (159) H-28(3)	189	図VI-209	土坑の遺物 (9) P-67 ~ 74(1)	262
図VI-161	竪穴住居跡 (160) H-28(4)	190	図VI-210	土坑の遺物 (10) P-74(2)	263
図VI-162	竪穴住居跡 (161) H-28(5)	191	図VI-211	土坑の遺物 (11) P-79 ~ 94	264
図VI-163	竪穴住居跡 (162) H-29(1)	192	図VI-212	焼土 (1) F-1 ~ 5・7・13	266
図VI-164	竪穴住居跡 (163) H-29(2)	193	図VI-213	焼土 (2) F-14 ~ 20・23・24	268
図VI-165	竪穴住居跡 (164) H-29(3)	194	図VI-214	土器集中 PC-1、剥片集中 (1) FC-2 ~ 7	270
図VI-166	竪穴住居跡 (165) H-30(1)	196	図VI-215	剥片集中 (2) FC-8 ~ 13	273
図VI-167	竪穴住居跡 (166) H-30(2)	197	図VI-216	剥片集中 (3) FC-14 ~ 18、礫集中 SC-3、 埋設土器 BP-1	275
図VI-168	竪穴住居跡 (167) H-30(3)	198	図VI-217	土器集中・剥片集中 (1) の遺物 PC-1、 FC-3・5	277
図VI-169	竪穴住居跡 (168) H-30(4)	199	図VI-218	剥片集中の遺物 (2) FC-6(1)	278
図VI-170	竪穴住居跡 (169) H-30(5)	201	図VI-219	剥片集中の遺物 (3) FC-6(2)	279
図VI-171	竪穴住居跡 (170) H-30(6)	202	図VI-220	剥片集中の遺物 (4) FC-9(1)	280
図VI-172	竪穴住居跡 (171) H-30(7)	203	図VI-221	剥片集中の遺物 (5) FC-9(2)	281
図VI-173	竪穴住居跡 (172) H-31	204	図VI-222	剥片集中 (6)・礫集中・埋設土器の遺物 FC-9(3)・11・15・17、SC-3、BP-1	282
図VI-174	竪穴住居跡 (173) H-32(1)	205	図VI-223	C 地区包含層出土遺物分布 (1)	324
図VI-175	竪穴住居跡 (174) H-32(2)	206	図VI-224	C 地区包含層出土遺物分布 (2)	325
図VI-176	竪穴住居跡 (175) H-33	207	図VI-225	C 地区包含層出土遺物分布 (3)	326
図VI-177	竪穴住居跡 (176) H-34	209	図VI-226	C 地区包含層出土遺物分布 (4)	327
図VI-178	竪穴住居跡 (177) H-37(1)	210	図VI-227	C 地区包含層出土遺物分布 (5)	328
図VI-179	竪穴住居跡 (178) H-37(2)	211	図VI-228	C1 地区包含層出土土器 (1)	329
図VI-180	竪穴住居跡 (179) H-38(1)	212	図VI-229	C1 地区包含層出土土器 (2)	330
図VI-181	竪穴住居跡 (180) H-38(2)	213	図VI-230	C1 地区包含層出土土器 (3)	331
図VI-182	土坑 (1) P-1 ~ 5	215	図VI-231	C1 地区包含層出土土器 (4)	333
図VI-183	土坑 (2) P-6 ~ 9	217	図VI-232	C1 地区包含層出土土器 (5)	334
図VI-184	土坑 (3) P-10 ~ 12	219	図VI-233	C1 地区包含層出土土器 (6)	335
図VI-185	土坑 (4) P-13・14	221	図VI-234	C1 地区包含層出土土器 (7)	336
図VI-186	土坑 (5) P-17 ~ 19	223	図VI-235	C1 地区包含層出土土器 (8)	338
図VI-187	土坑 (6) P-20 ~ 26	225	図VI-236	C1 地区包含層出土土器 (9)	339
図VI-188	土坑 (7) P-27 ~ 30	228	図VI-237	C1 地区包含層出土土器 (10)	340
図VI-189	土坑 (8) P-31 ~ 34	230	図VI-238	C1 地区包含層出土土器 (11)	341
図VI-190	土坑 (9) P-35 ~ 42	233	図VI-239	C1 地区包含層出土石器 (1)	343
図VI-191	土坑 (10) P-43 ~ 46	235	図VI-240	C1 地区包含層出土石器 (2)	344
図VI-192	土坑 (11) P-47 ~ 50	237	図VI-241	C1 地区包含層出土石器 (3)	345
図VI-193	土坑 (12) P-51 ~ 57	239	図VI-242	C1 地区包含層出土石器 (4)	346
図VI-194	土坑 (13) P-58 ~ 66	241	図VI-243	C1 地区包含層出土石器 (5)	347
図VI-195	土坑 (14) P-67 ~ 70・72	244			
図VI-196	土坑 (15) P-71・73 ~ 75・85	246			

図VI-244	C1 地区包含層出土石器 (6)	348
図VI-245	C1 地区包含層出土石器 (7)	349
図VI-246	C1 地区包含層出土石器 (8)	351
図VI-247	C1 地区包含層出土石器 (9)	352
図VI-248	C1 地区包含層出土石器 (10)	353
図VI-249	C1 地区包含層出土石器 (11)	354
図VI-250	C1 地区包含層出土石器 (12)	355
図VI-251	C1 地区包含層出土石器 (13)	357
図VI-252	C1 地区包含層出土石器 (14)	358
図VI-253	C1 地区包含層出土石器 (15)	359
図VI-254	C1 地区包含層出土石器 (16)	360
図VI-255	C1 地区包含層出土石器 (17)	361
図VI-256	C2 地区包含層出土土器	370
図VI-257	C2 地区包含層出土石器 (1)	372
図VI-258	C2 地区包含層出土石器 (2)	373
図VI-259	C2 地区包含層出土石器 (3)	374
図VI-260	C2 地区包含層出土石器 (4)	375
図VI-261	C2 地区包含層出土石器 (5)	376
図VI-262	C2 地区包含層出土石器 (6)	377
図VI-263	C2 地区包含層出土石器 (7)	379
図VI-264	C2 地区包含層出土石器 (8)	380
図VI-265	C3 地区廃棄域 RM 層下部・III下層上部遺物出土狀況 (1)	385
図VI-266	C3 地区廃棄域 RM 層下部・III下層上部遺物出土狀況 (2)	386
図VI-267	C3 地区廃棄域 RM 層下部遺物出土狀況 (1)	387
図VI-268	C3 地区廃棄域 RM 層下部遺物出土狀況 (2)	388
図VI-269	C3 地区廃棄域 RM 層下部遺物出土狀況 (3)	389
図VI-270	C3 地区廃棄域 III下層上部遺物出土狀況 (1)	390
図VI-271	C3 地区廃棄域 III下層上部遺物出土狀況 (2)	391
図VI-272	C3 地区廃棄域 III下層上部遺物出土狀況 (3)	392
図VI-273	C3 地区包含層出土土器 (1)	393
図VI-274	C3 地区包含層出土土器 (2)	394
図VI-275	C3 地区包含層出土土器 (3)	395
図VI-276	C3 地区包含層出土土器 (4)	396
図VI-277	C3 地区包含層出土土器 (5)	397
図VI-278	C3 地区包含層出土土器 (6)	398
図VI-279	C3 地区包含層出土土器 (7)	399
図VI-280	C3 地区包含層出土土器 (8)	400
図VI-281	C3 地区包含層出土土器 (9)	401
図VI-282	C3 地区包含層出土土器 (10)	402
図VI-283	C3 地区包含層出土土器 (11)	404
図VI-284	C3 地区包含層出土土器 (12)	405
図VI-285	C3 地区包含層出土土器 (13)	406
図VI-286	C3 地区包含層出土土器 (14)	407
図VI-287	C3 地区包含層出土土器 (15)	408
図VI-288	C3 地区包含層出土土器 (16)	409
図VI-289	C3 地区包含層出土土器 (17)	410
図VI-290	C3 地区包含層出土土器 (18)	411
図VI-291	C3 地区包含層出土土器 (19)	412
図VI-292	C3 地区包含層出土土器 (20)	413
図VI-293	C3 地区包含層出土土器 (21)	414
図VI-294	C3 地区包含層出土石器 (1)	416
図VI-295	C3 地区包含層出土石器 (2)	417
図VI-296	C3 地区包含層出土石器 (3)	419
図VI-297	C3 地区包含層出土石器 (4)	420
図VI-298	C3 地区包含層出土石器 (5)	421
図VI-299	C3 地区包含層出土石器 (6)	422
図VI-300	C3 地区包含層出土石器 (7)	423
図VI-301	C3 地区包含層出土石器 (8)	425
図VI-302	C3 地区包含層出土石器 (9)	426
図VI-303	C3 地区包含層出土石器 (10)	427
図VI-304	C3 地区包含層出土石器 (11)	428
図VI-305	C3 地区包含層出土石器 (12)	429
図VI-306	C3 地区包含層出土石器 (13)	431
図VI-307	C3 地区包含層出土石器 (14)	432
図VI-308	C3 地区包含層出土石器 (15)	433
図VI-309	C3 地区包含層出土石器 (16)	434
図VI-310	C3 地区包含層出土石器 (17)	435

第2分冊（VI章）表目次

VI C 地区の遺構・遺物

表VI-1	C 地区遺構一覧	284
表VI-2	C 地区遺構出土遺物一覧	287
表VI-3	C 地区遺構出土掲載土器一覧	299
表VI-4	C 地区遺構出土掲載石器一覧	304
表VI-5	C 地区遺構出土掲載石器接合資料一覧	314
表VI-6	C1 地区包含層出土遺物一覧	363
表VI-7	C1 地区包含層出土掲載土器一覧	364
表VI-8	C1 地区包含層出土掲載石器一覧	366

表VI-9	C2 地区包含層出土遺物一覧	381
表VI-10	C2 地区包含層出土掲載土器一覧	382
表VI-11	C2 地区包含層出土掲載石器一覧	382
表VI-12	C2 地区包含層出土掲載石器接合資料一覧	383
表VI-13	C3 地区包含層出土遺物一覧	437
表VI-14	C3 地区包含層出土掲載土器一覧	438
表VI-15	C3 地区包含層出土掲載石器一覧	440
表VI-16	C3 地区包含層出土掲載石器接合資料一覧	442

VI C 地区の遺構・遺物

1 概要

南東側が沢に区切られ、地形的に西側の平坦面（高位部）、南東側の緩斜面（低位部）、両者をつなぐすり鉢状の斜面（斜面部）に分けられる（図II-8）。遺構は竪穴住居跡35軒（H-1～21・23～34・37・38）、土坑96基（P-1～14・17～89・91～99）、焼土16か所（F-1～5・7・13～20・23・24）、土器集中1か所（PC-1）、剥片集中17か所（FC-2～18）、礫集中1か所（SC-3）、埋設土器1か所（BP-1）が検出された（図VI-1）。高位部には直径4m程の住居と直径6mを超える周堤を伴う大型住居が密に、低位部には大小の住居が散漫に分布し、斜面部には直径4～6mの住居がやや密に、その東部には直径50cm程の小型土坑が濃密に分布している。

(鈴木)

2 遺構

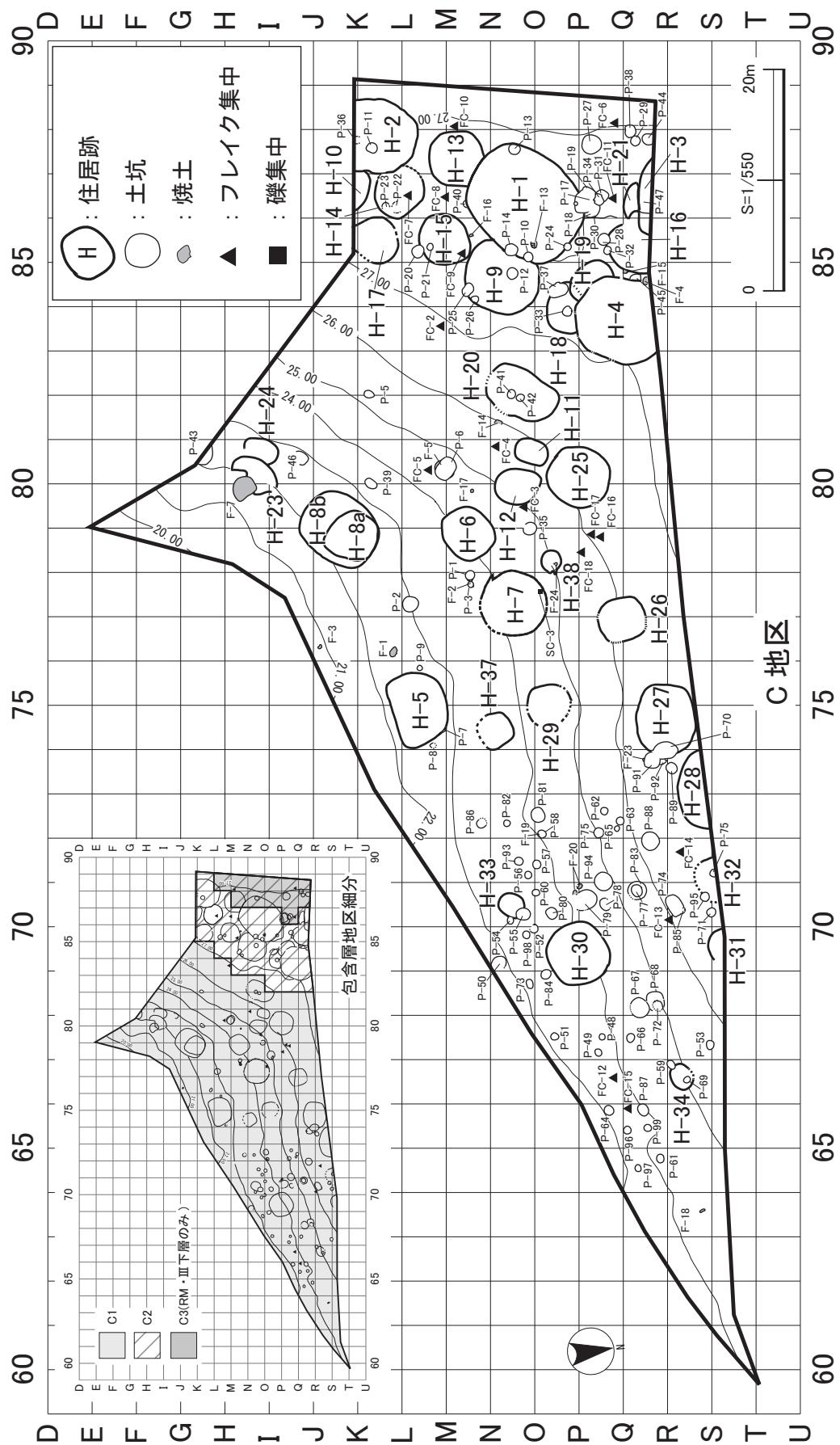
（1）竪穴住居跡

竪穴住居跡1（H-1）（図VI-2～16、表VI-2、図版20～26）

確認・調査：調査区西側の標高27.5m付近の高位部に位置する。調査前より大型の窪みとして認識できたため、表土除去後、同様の窪みのH-2・4との関係性を把握するため、3軒の住居をまたがるトレーナーを設定し、土層の確認を行った（図III-10）。その結果、周堤を伴う大型住居と判断したが、この段階では遺構長軸の認定が困難であったため、86ライン（C-D）と直交する任意のライン（A-B）に十字ベルトを設定し、さらにグリッドラインから45度傾き十字ベルト交点を通るラインに3本目のベルトを設け（E-F）、土層断面観察と並行しながら竪穴住居覆土の掘削を行った。掘削過程で住居の壁付近からH-1覆土を掘り込んで構築されたP-10・13・14・17を検出した。各土坑の構築面は後述の覆土上部に堆積するⅡ下～Ⅲ層で主に認められた。また覆土では、主に北西部に黄褐色土（V層）を主体とする厚い堆積を8mほどの範囲に検出し、近隣遺構からの掘り上げ土と理解した。さらに床面上位には、床面を全体的に覆い、特に壁際に厚く堆積する黄褐色土を認め、屋根土と理解した。床面と壁を検出し、ベルトの土層断面を記録した後、ベルト除去を行って遺構の全体形状を確認・記録した。床面調査では精査により柱穴、周溝、貼り床などの付属遺構を検出し、遺構毎に掘削調査を行い堆積状況や平面・断面形などを記録した。平面形態は隅丸方形もしくは橢円形、長軸は南西～北東方向、大きさは長軸10.6×短軸8.9mで、調査した遺構の中で最大である。

土層：覆土は大きく上下に分けられ、上部は自然堆積層のⅡ上1層、Ko-d、Ⅱ上2層、B-Tm、Ⅲ層、下部は流入土とみられる1・3・4・5・7・9～11層、近接遺構からの掘り上げ土の投げ込みとみられる2・8層（図版22-5参照）、屋根土の崩落とみられる6・6'層で構成される。また、遺構の周囲には竪穴掘り上げ土を周堤状に盛土したRM層が堆積する。

流入土のうち3・7・9層は、にぶい黄褐色の色調、壁付近に堆積が限られたことから、周堤盛土（RM層）が流入したものと考えられる。また2・8層は黄褐色ローム主体で中央部付近まで厚く堆積する状況から、近隣遺構からの掘り上げ土の投げ込みと理解した。2・8層の堆積は北側に偏在する様子がみられる。屋根土の6・6'層は壁際から中央にかけて床面のほぼ全面を覆っており、上屋構造の全体に褐色土が葺かれていたことが推測できる。また6・6'層は壁際に厚く認められ、特に周堤盛土から屋根の裾部に厚く盛られたと考えられる。遺構周囲にはV層に類似したRM層が巡り、東側に位置するH-9を50cm以上の厚さで埋めている（図III-8）。



図VI-1 C地区遺構位置図および包含層地区細分

全体の堆積過程を復元すると、①竪穴を構築し掘り上げ土を周堤盛土や屋根土に利用する、②住居廃絶後に屋根土が床面直上に崩落する、③周堤盛土などからの流入土が一定期間堆積する、④北側の隣接遺構から竪穴の窪みに多量の掘り上げ土が投げ込まれる、⑤上部にⅢ層の黒色土の堆積が発達する過程で周堤から壁際に複数の土坑が構築される、の推移が考えられる。

床面・壁：床面は概ね水平に構築されるが、中央部で僅かに低く、壁付近 1.5 ~ 2m でせり上がる様子がみられる。床面中央部には貼り床が 3.6 × 3.3m の不整形な範囲に、その周囲を取り囲むように褐色～黒褐色の汚れた範囲が 5.2 × 4.6m の広さで検出された。壁は急角度に立ち上がり、長辺ではほぼ直角、短辺ではオーバーハングする。また周堤盛土が壁の上部となるため、壁は高い箇所で 1.2m ほどに及ぶ。

付属遺構：付属遺構には周溝、主柱穴、壁柱穴、炭化物集中などがある。周溝は幅 10 cm・深さ 10 cm ほどで、竪穴中央部の貼り床および汚れた床面範囲を断続的に周回するとみられる。しかし周溝と竪穴住居跡の長軸方向は整合しない。また同範囲の中央部には HP-15 と大型扁平の砂岩礫が配置されていた。HP-15 は後述の主柱穴に含まれるかもしれない。

主柱穴は 13 基 (HP-1 ~ 3・5 ~ 14) で、規模は径 40 ~ 60 cm、深さ 70 ~ 90 cm が主、形状は概ね円筒形で床面とほぼ垂直に掘り込まれている。長軸に沿って南東側と北西側に整然と 2 列に配列されており、この内 HP-10・11・12・14 の開口部には、粘性が強くすこぶる堅い黄白色の粘土（各遺構覆土の 1 層）が貼られていた。4 基の位置は主柱穴列の端から 2 つ目にあたり、長軸を挟んで対称的な位置関係にある。このため、これら 4 基は古い主柱穴で、住居の拡張によって不要となり、埋め戻して上面を貼り土したことが推測できる。拡張後は HP-1・5・8・9・13 が新たに設けられ、HP-2・3・6・7 と共に 8 本主柱穴の住居となったことが考えられる。

壁柱穴は 5 基 (HP-16 ~ 20) で、南西壁に 3 基、南東壁に 2 基みられる。前者 3 基の間隔は約 1m で壁中央に整然と配置されている。壁柱穴の規模は径 10 cm・深さ 10 ~ 40 cm ほどで内傾気味に構築され、HP-17 ~ 20 は底面が丸みを帯び、また住居壁面に食い込んで認められた。

このほか柱穴は北側隅に HP-4・21 の浅いもの（深さ 15 cm 以下）がみられた。

炭化物集中は床面北東部に HCC-1 を検出した。炭化物の分布範囲は 30 cm ほどである。

遺物出土状況：出土遺物の総数は 15,814 点で、土器等が 6,451 点、石器等が 9,363 点である。土器等はⅡ群 b 類 6,305 点、Ⅲ群 a 類 87 点、Ⅲ群 b 類 43 点、Ⅳ群 a 類 1 点、焼成粘土塊 8 点、土製円盤 7 点が、石器等は石鏃 11 点、石槍 20 点、両面調整石器 49 点、籠状石器 6 点、つまみ付きナイフ 14 点、スクレイパー 47 点、石錐 7 点、R フレイク 63 点、U フレイク 16 点、剥片 7,599 点、石核 51 点、石斧 1 点、石のみ 2 点、擦切残片 2 点、北海道式石冠 14 点、扁平打製石器 28 点、すり石 7 点、石鋸 7 点、たたき石 25 点、砥石 4 点、台石 3 点、石皿 1 点、原石 16 点、加工痕のある礫 21 点、礫 1,343 点、石製品 1 点、線刻礫 1 点、高師小僧 4 点が出土した。床面遺物は土器破片や石器類が散発的に出土したが、個体土器などのまとまった遺物はみられなかった。また採取土壤のフローテーション選別の結果、HCC-1 からオニグルミ核 1 点が検出された。

時期：床面・貼り床・床面直上土の出土土器は 381 点で、全てⅡ群 b 類である。また、床面検出の HCC-1 出土の炭化物からは $4,770 \pm 30$ yr BP (K04-D1)・ $4,620 \pm 30$ yr BP (K04-D2)、HP-4 覆土中の炭化物からは $4,170 \pm 30$ yr BP (K04-D3)、HP-9 検出面の炭化物からは $4,750 \pm 30$ yr BP (K04-D4) の年代測定値が得られている。遺物・年代測定値から縄文時代前期後半円筒下層 d1 式期と考えられる。（坂本）

掲載出土遺物：（図 VI-7-1 ~ 図 VI-16-104、図版 168 ~ 172）

土器：1 ~ 28 はⅡ群 b 類。1 ~ 13 は円筒下層 b1 ~ c 式。1 ~ 6 は口縁部文様帶が隆帯によって区画

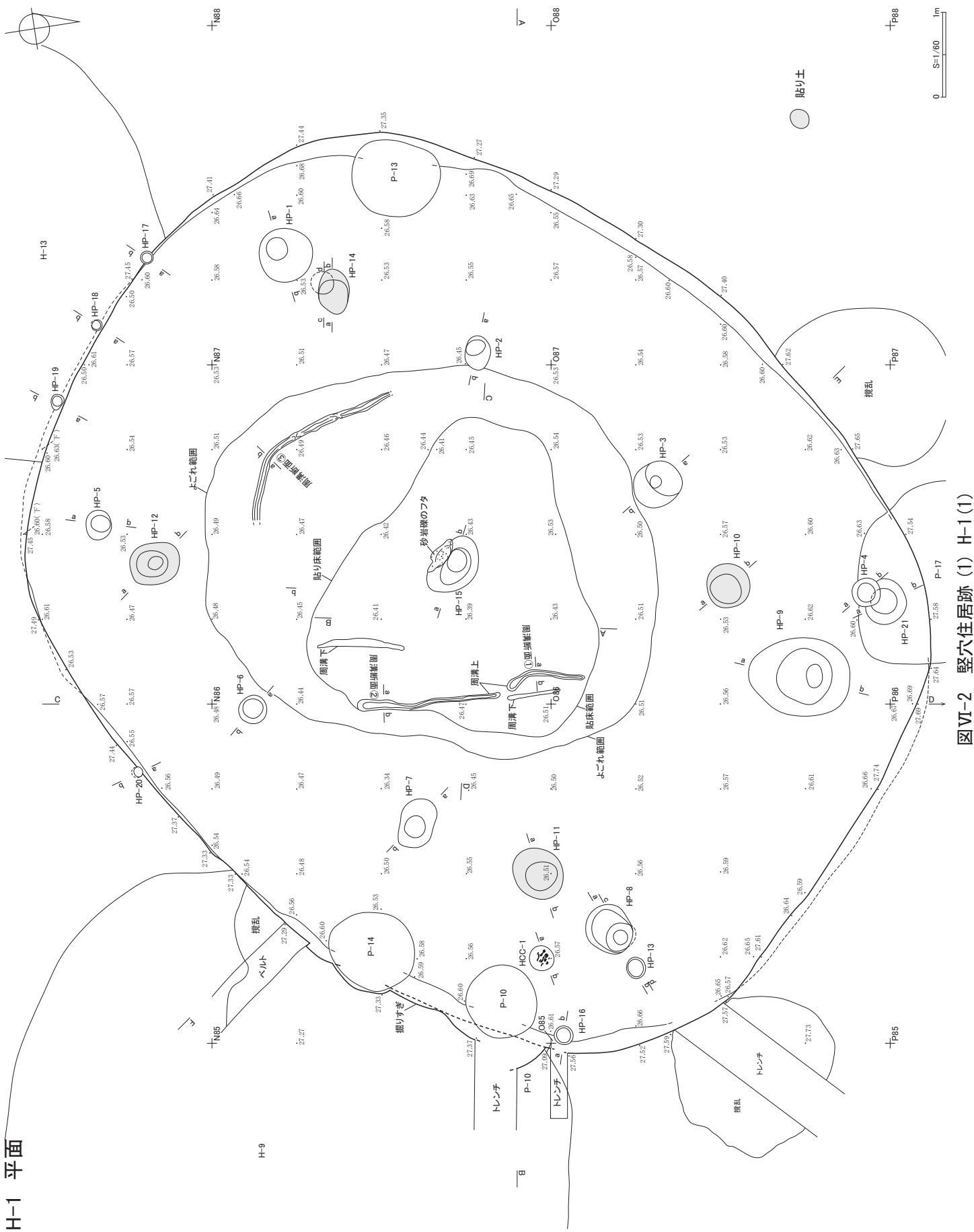
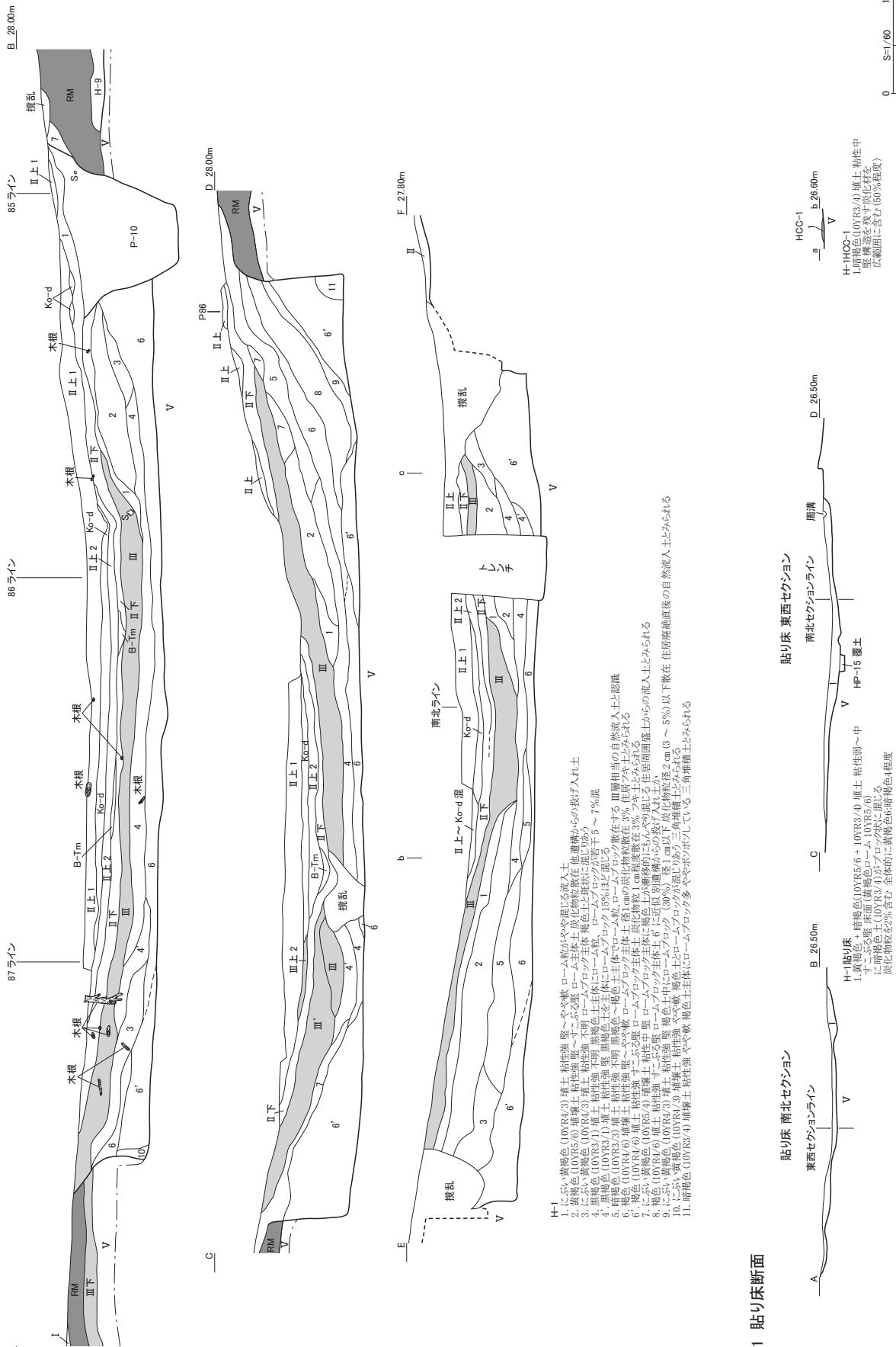


図 VI-2 積穴住居跡 (1) H-1(1)

H-1 断面



H-1 貼り床断面

H-1 断面図 HP-1 ~ 12・14~20

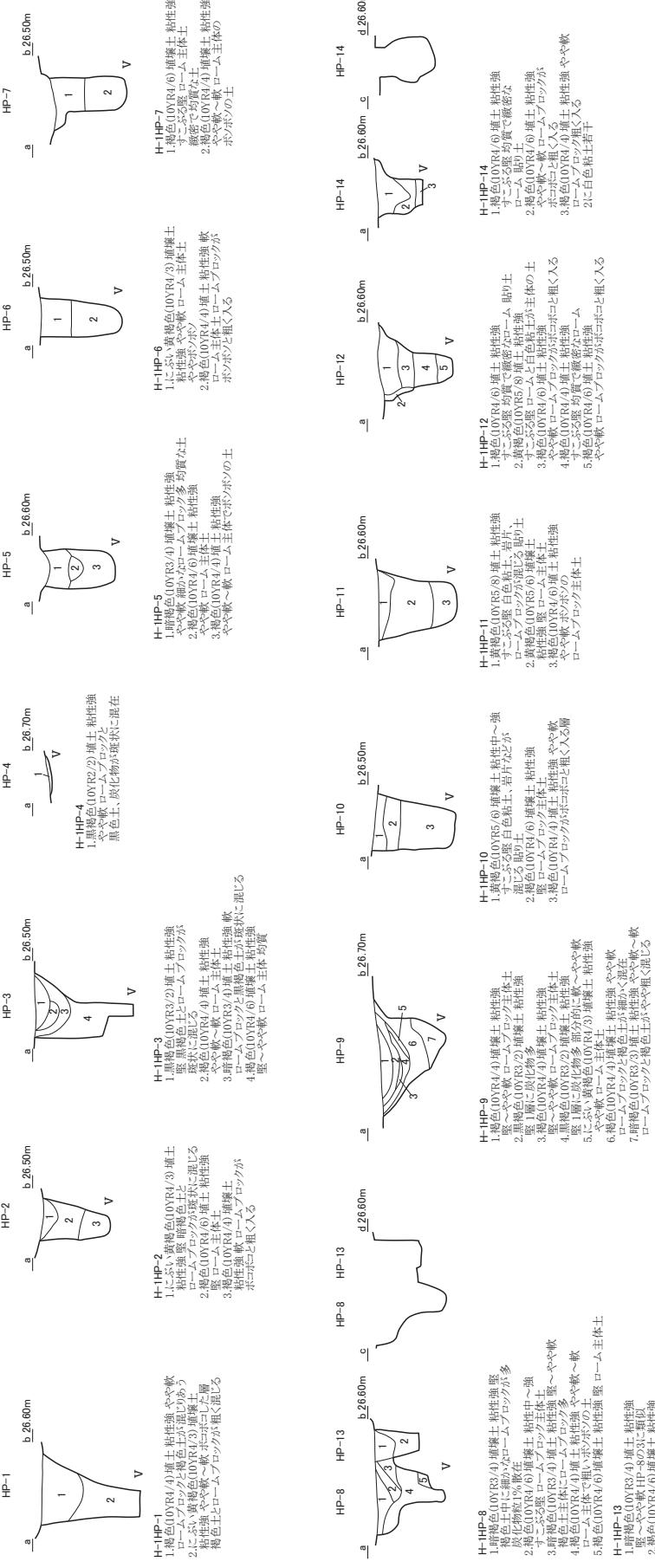
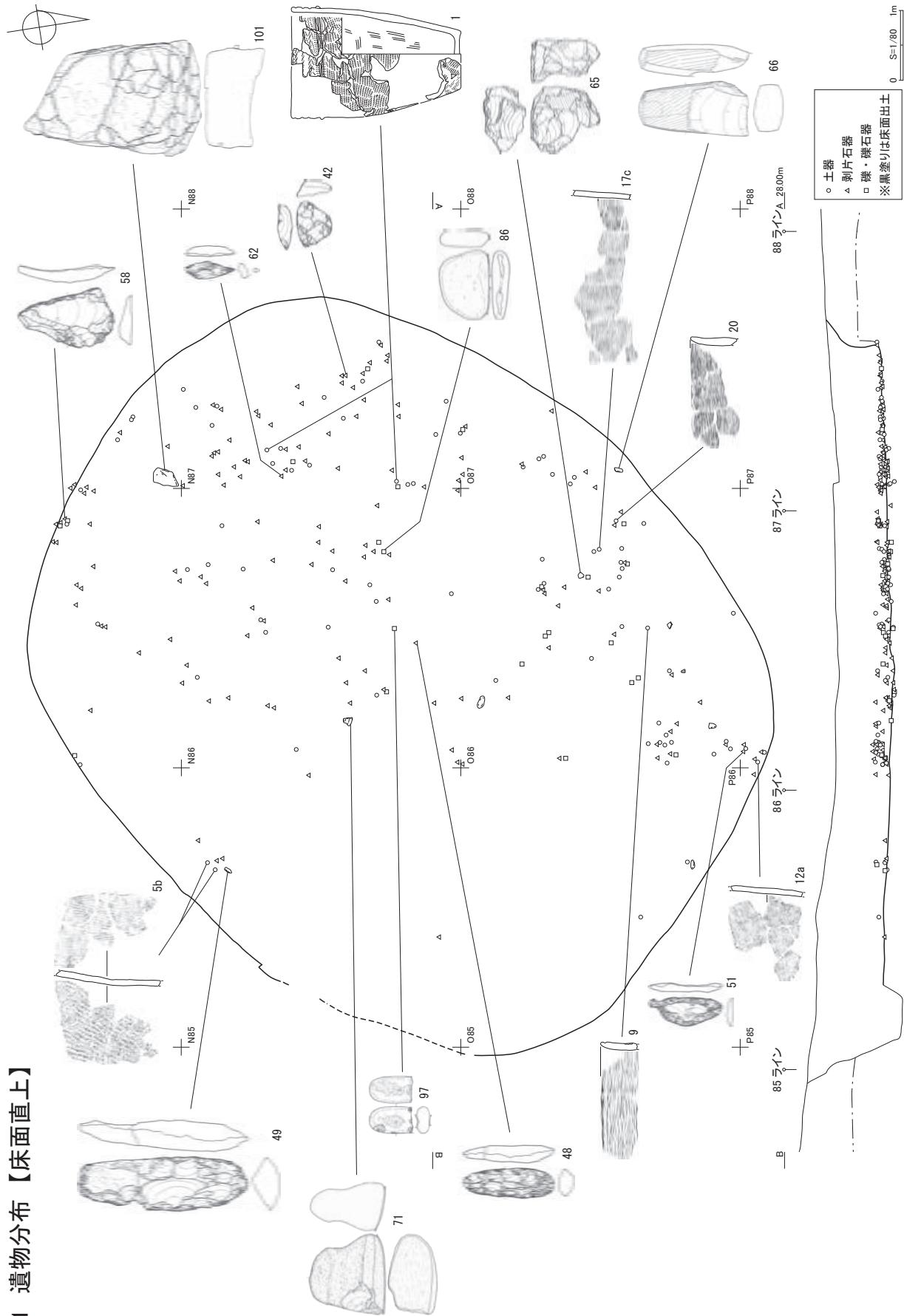


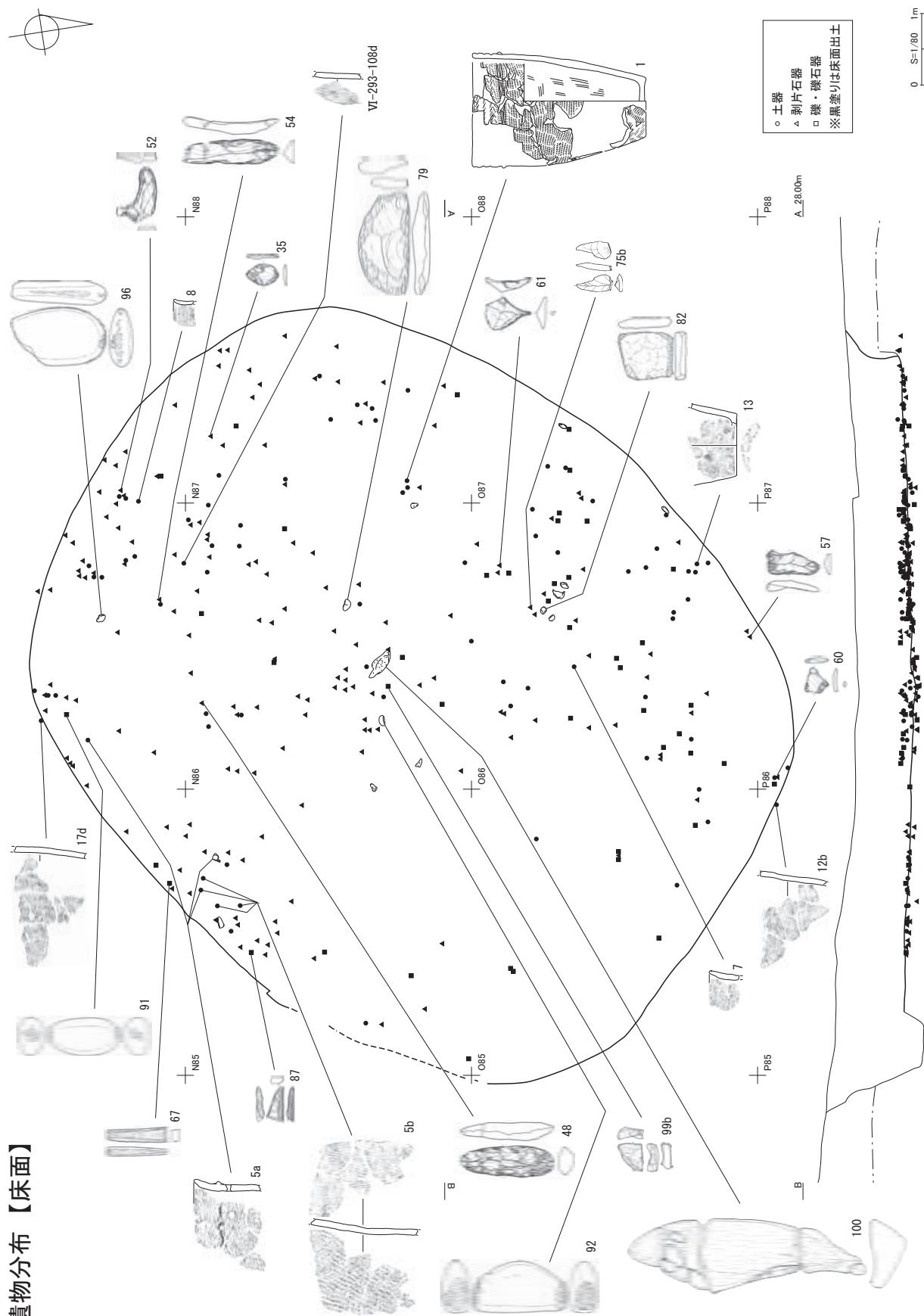
圖1-1 王昌齡《長安》

H-1 遺物分布【床面直上】



図VI-5 積穴住居跡 (4) H-1 (4)

H-1 遺物分布【床面】



されるもの。1は口縁部～胴部と底部を図上で復元した。底部から胴中央部はやや斜めに、さらに口縁部にかけてはほぼ垂直に立ち上がる。口縁部文様帶は上下斜行縄文と3本の縄線が巡る。隆帶は上下の絡条体圧痕によって強調される。胴部はLR縄文が斜めに回転された後、表面が磨かれる。内面もミガキ調整が顕著である。2は隆帶下位の沈線間に綾絡文、胴部には単軸絡条体1類が施文される。3は隆帶に指頭圧痕があり、貼付後に口縁・胴部とも縦走に近い縄文が施される。4は隆帶上に斜めに籠状工具で刻みが付けられ、口縁部には横方向に、胴部には縦方向に単軸絡条体1類が施文される。5は隆帶の上下に不整綾絡文が施され、胴部にはRLR縄文が縦走し、おそらく胴中央である5bには帶状の不整綾絡文が巡る。内面には縦位の貝殻条痕が残る。5aには直径9mmの補修孔がある。6は2同様、隆帶の上下及び2cmほど下位に沈線が巡り、口縁部と沈線間に不整綾絡文が横位に施文される。沈線下位の胴部には縦の単軸絡条体1類が施される。隆帶は断面が尖り、幅広の指頭圧痕が見られる。7は縄線文で区画された口縁部に横位の単軸絡条体5類、8は横位の貝殻条痕文が施文される。9は不整綾絡文の上に縄線文が口唇部直下に1条、口縁部文様帶に鋸歯状に加えられる。10は口縁部に横位の縄線文とその上に縦位の縄線文が施文され、胴部には直前段反撲LLRの縄文が施される。11は横位の絡条体圧痕上に鋸歯状の絡条体圧痕が施文され、胴部には単軸絡条体4類が施される。12は単軸絡条体1類の胴部片。13は底部片で、地文施文後に磨かれる。

14～16は円筒下層d1式。14は結束第1種羽状縄文で区画された口縁部に平行縄線Rが施文される。15は撲りの異なる2本1組の組紐状縄線が押捺される。16は段状の下部が刺突列と綾絡文で区画された口縁部に平行縄線Rと縦の刺突列が施文される。

17～22は円筒下層d1～d2式。17は結束第2種羽状縄文で区画された口縁部に横位の縄線とその間の斜位の短縄線によって矢羽根状に表現される。胴部には単軸絡条体1類が施文される。内面は、口縁部は横方向、胴部は縦方向によく磨かれ、光沢がある。18・19は平行縄線文が施文され、18の口唇部付近は内湾し、口唇外面には縄の圧痕が見られる。21・22は胴部片で、多軸絡条体が施される。23は口唇部に縄の圧痕のある波状の口縁部でRLR斜行縄文が施文される。円筒下層d2式か。24はLR縄文が斜め方向に回転され、横走する。II群b類にしたが、III群b類の可能性もある。

25～28は土製円盤。25a・bは接合しないが、形態・色調・胎土などから同一の底部を素材としたものと判断した。25aは底部縁辺を含み、25bも縁辺近くと推定される。両者とも孔が小さく、中央で割れていることから穿孔途中で折損したと考えられる。底部を分割し、適した素材の縁辺を打ち欠き等で整形した後、穿孔した工程が復元される。26は底面素材で、穿孔は8mmと大きく、両面から臼状の断面形である。27・28は土器側面素材で、折損品である。25・27・28は磨き調整から円筒下層d1～d2式、26は円筒下層b1～c式とみられる。

29～32はIII群a類。29は粘土紐の貼付のある胴部片、30は口唇部外側角に縄の圧痕のある口縁部、32の胴下部は無文の底部で、3点はサイベ沢VII式。31は二股に分かれる山形突起部で、口縁部に沿って縄線が数条施文される円筒上層a式。

33・34はIII群b類。33は下部がやや歪んだ形状の深鉢。突起は小型の山形のものが1つ残存するが3か所あった可能性がある。無節R縦走縄文が疎らに施文される。34は2本の縄線で区画された口縁部無文帶があり、胴部はLR縄文が横走気味に施文される。

石器：35～37は石鎌で、35・36はIa類、37はIII d類。38～40は石槍。38は小型で精巧である。39・40は粗い加工で、折損している。41～45は両面調整石器。41は右側縁から裏面への粗い加工を最後に遺棄される。42は加工途中で折損している。43～45は剥離が少なく、素材原石形状を残す。43は長さ10cm程の短冊状で、正面右側縁に3回の粗い剥離が残る。44は10cm程の平面三角形の原



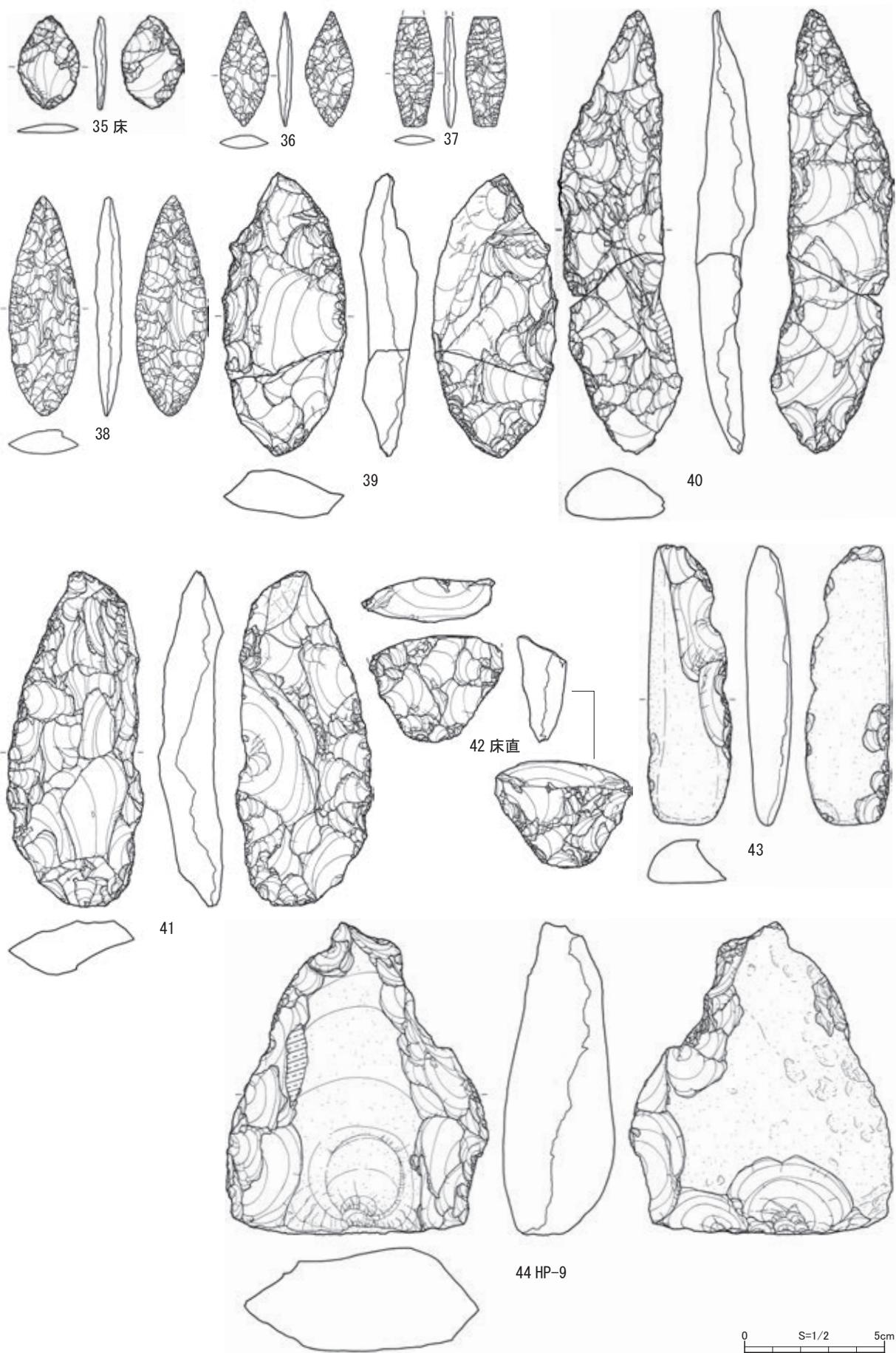
図VI-7 竪穴住居跡 (6) H-1 (6)



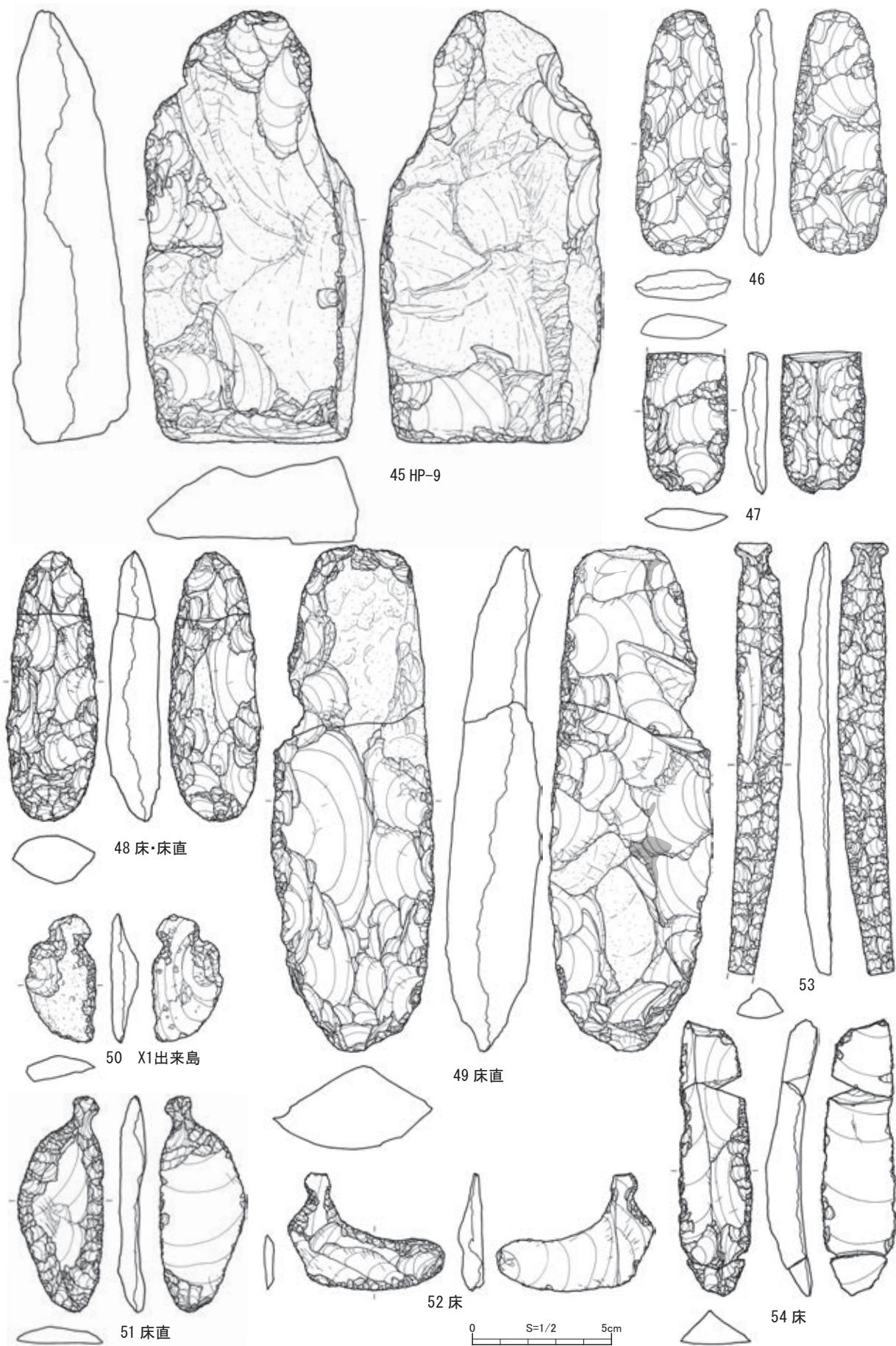
図VI-8 竪穴住居跡 (7) H-1 (7)

石素材で、正面左右側縁を中心に粗い剥離が行われる。45は長さ16cm程の直方体原石の上部がやや尖頭状に加工される。46～49は籠状石器で、下部に長軸方向の剥離がある。46・47は平坦剥離で薄く成形される。46は部分的に押圧とみられる剥離があり、特に裏面下部は直線的に丁寧に調整される。48・49は厚手で、下端部は丸みを帯びる。49は比較的原石に近いもので、折損後、上部破片に折れ面から長軸方向の剥離が加えられる。裏面上部及び中央部には光沢面が見られる。50～53はつまみ付きナイフ。50・51・53は縦型、52は横型。50は産地分析で「出来島」産と判定された球顆の混じる黒曜石製で、背面に原礫面を残す横長剥片素材である。縁辺のみの加工が施される。51は押圧剥離による加工が背面全周に施される。52はウートウルパッセの見られる素材で、加工は縁辺のみで素材形状をそのまま残している。53は15cmを超える断面三角形の長大な石刃状の素材で、正面左上部の素材のくぼんだ一部を除き全面が押圧剥離によって覆われている。54～58はスクレイパー。54・55はI b類、56はII類、57はIV類、58はVII類である。54は先端部折損後、再加工される。55には光沢がある。59～63は石錐。59～61は斜軸剥片、62は両面調整石器の折損品、63は薄い剥片素材で、それぞれ素材突出部に刃部が作出される。59・60の刃部は太く短く、61・62は細長い。64は石核I b類。17cm超の大型品であるが、両面に原礫面が残り、剥離頻度は高くない。65は石核V類で、頻繁な打面転移が見られる。

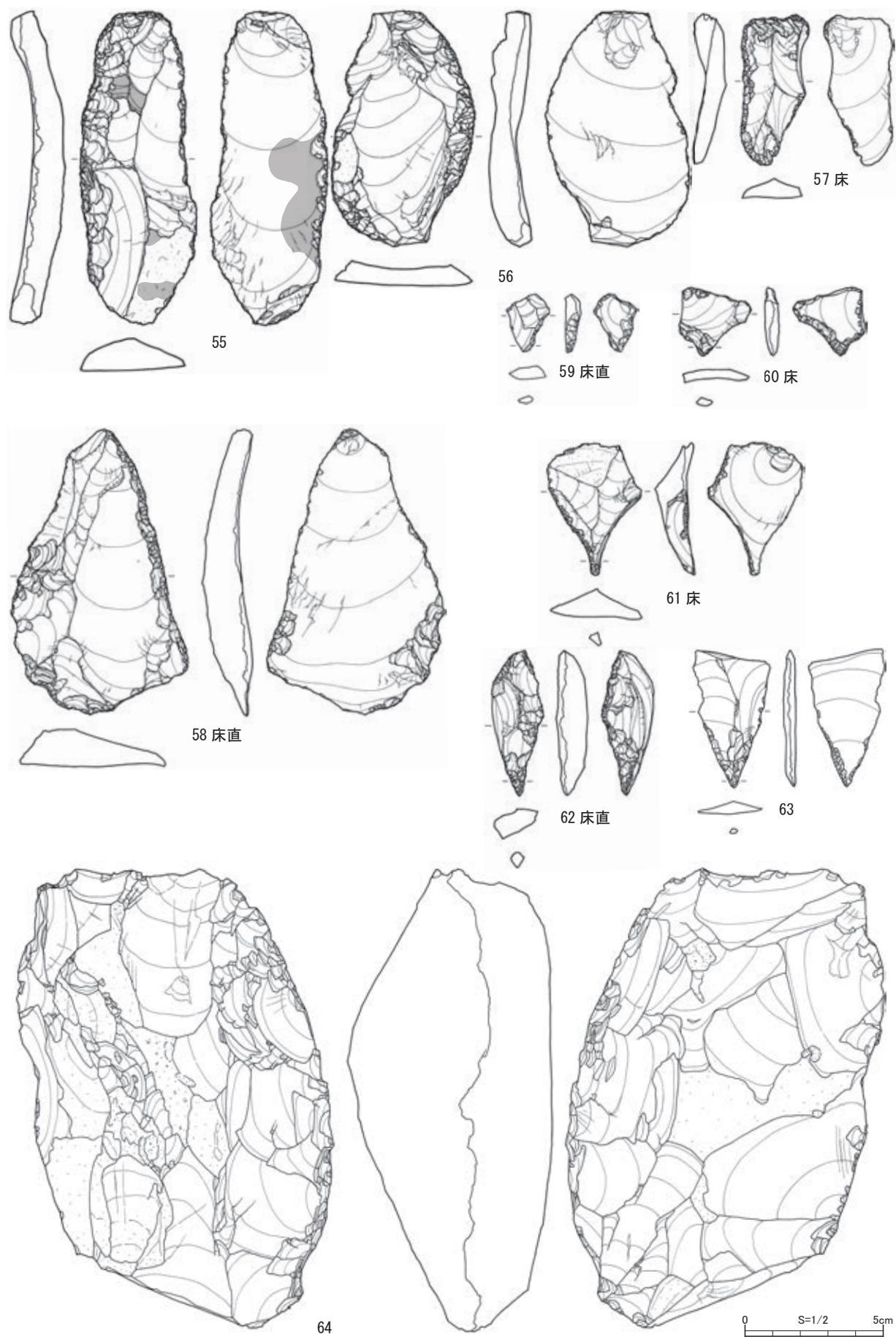
66は花崗閃緑岩製の石斧。表面は研磨により平滑で、稜線が明瞭である。刃部方向から破損した後、右側縁下部は一部敲打により整形される。67・68は石のみ。67は右側面を除く研磨により稜柱状に整形され、68は扁平な橢円礫の素材形状を残して部分的な研磨により整形される。69は擦切残片の接合資料。正面・左面のみ原礫面で、裏面・右面は分割面である。裏面が擦切技法により分割された後、表裏両面に上下方向の溝を彫り、左右に分割している。溝は正面側が深さ2.3cm、幅1.5cm、裏面側が深さ1.6cm、幅1.5cmである。折れ面の観察からは裏面側の溝に楔状のものを挿入し、叩くなどして折り取ったとみられる。その際、下面で折損し、出土していない下部は利用された可能性が高い。70～73は北海道式石冠で、全面敲打により整形される。70aは正面に下面からの打点のある2枚の剥片70b・cが接合する。70bの打点は明瞭で右隣に同時割れの痕跡があり、70cの打点は線状で、不明瞭である。どちらも石皿などとの敲く行為によって欠損したものと思われ、剥離面は裏面にも観察される。71は左側、72は右側が下面から欠損し、折損面と接する正面側下部にも下面からの剥離面がある。73は閃緑岩製で、下面に接する周縁に下面からの剥離面が巡り、右面上部には折損面がある。持ち手の溝は上下2段で、上の溝は折損面に切られ、下の溝はそれを切ることから当初の溝は上段で、右側の欠損後、再度、下段の溝を作り直したものと考えられる。周縁部の剥離の量と左右の幅の狭さと合わせて使用と再整形による変形が進んだ状況を示す資料である。74は北海道式石冠の未成品とみられるもので、レンガ割り法（上條2015、P245第112図）による打ち割り後の一部調整段階と推定される。下面縁辺部の敲打と正面の剥離、上部から左側縁にかけての敲打痕がある。75は北海道式石冠から剥離された剥片の接合資料である。剥離角や正面に敲打痕のある面がないことから小口面を整形する際に剥離されたものと推測される。76～84は扁平打製石器。76・77はI類、78・79はIII類、80はIV類、81はV類、82～84はVI類。安山岩・砂岩・頁岩・泥岩など多様な石材が利用されるが、扁平な原石が多く、加工は縁辺のみに施されるのがほとんどであるため、石器形状は原石の形態が反映されている。77は加工範囲が広く、変形の度合いが高い。直線的な下縁部は両面の剥離によって稜状（V字状）もしくは潰れて「U」字状であるが、78・83のように平坦面が残るものがある。85・86はすり石で、85はI a類、86はII類。85には両面に幅広で短い刃こぼれ状の剥離がある。87～90は石鋸。87は下縁部が機能部で、上縁も研磨により尖頭状である。88・89は酷似した石材の扁



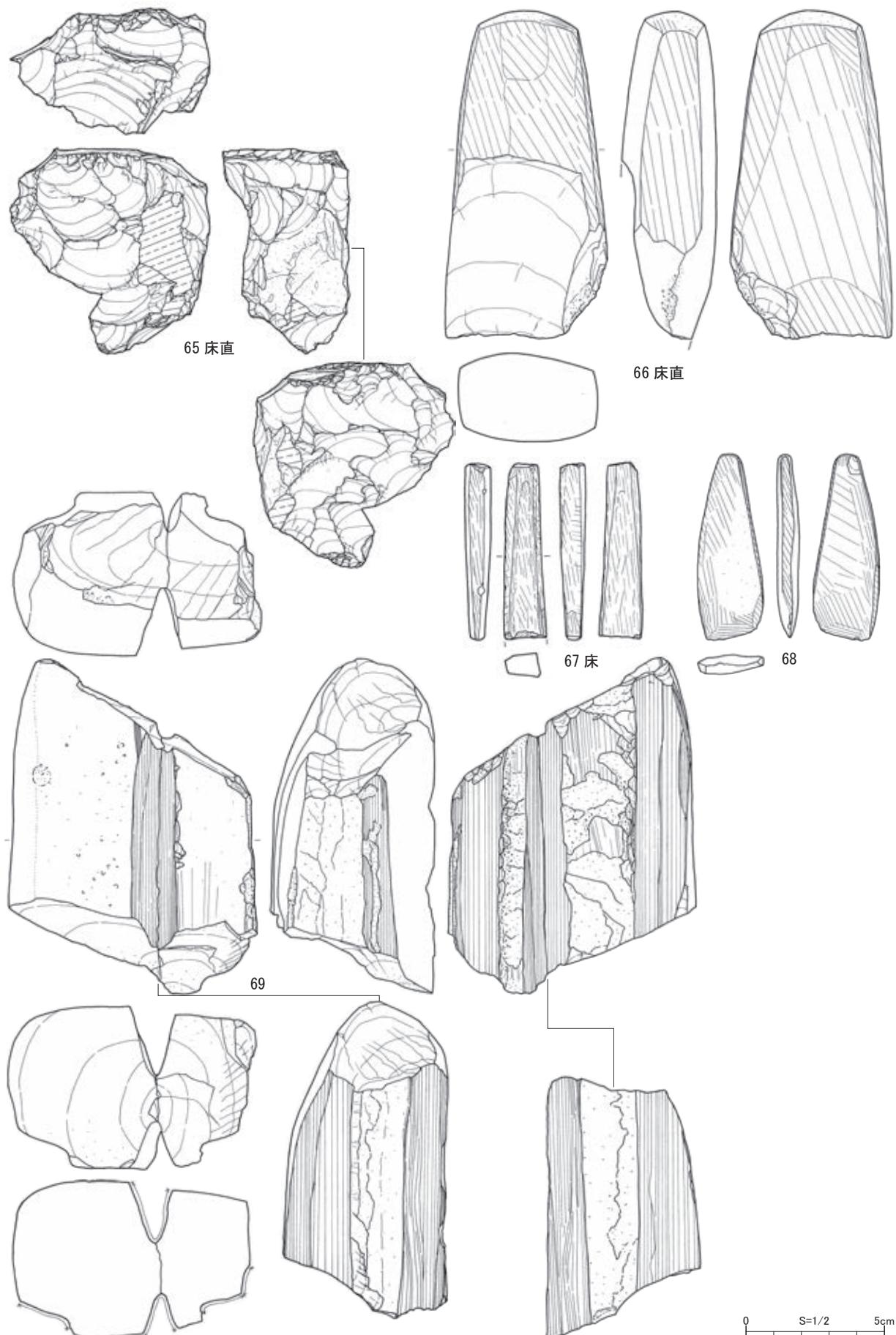
図VI-9 竪穴住居跡 (8) H-1 (8)



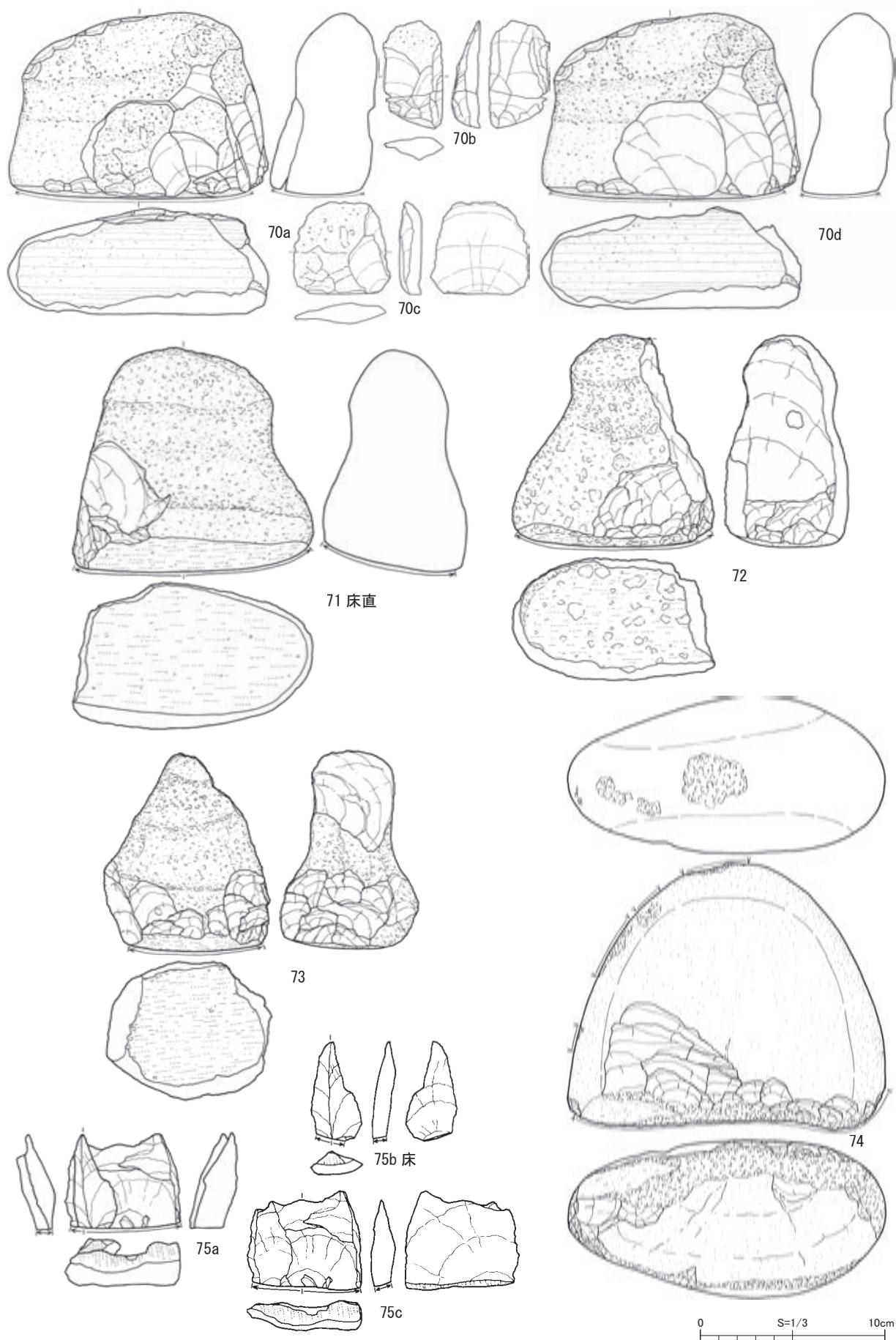
図VI-10 積穴住居跡 (9) H-1 (9)



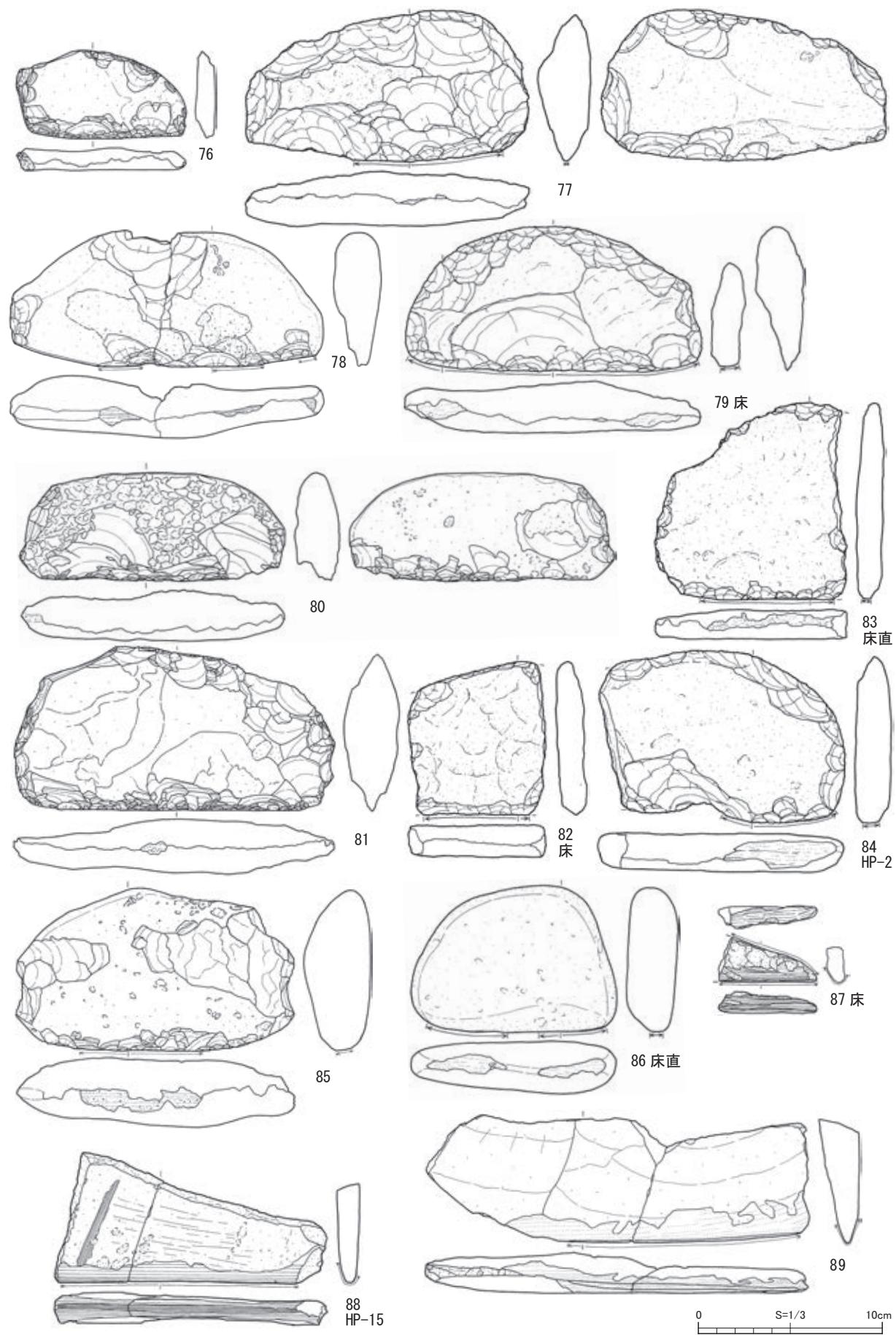
図VI-11 積穴住居跡 (10) H-1 (10)



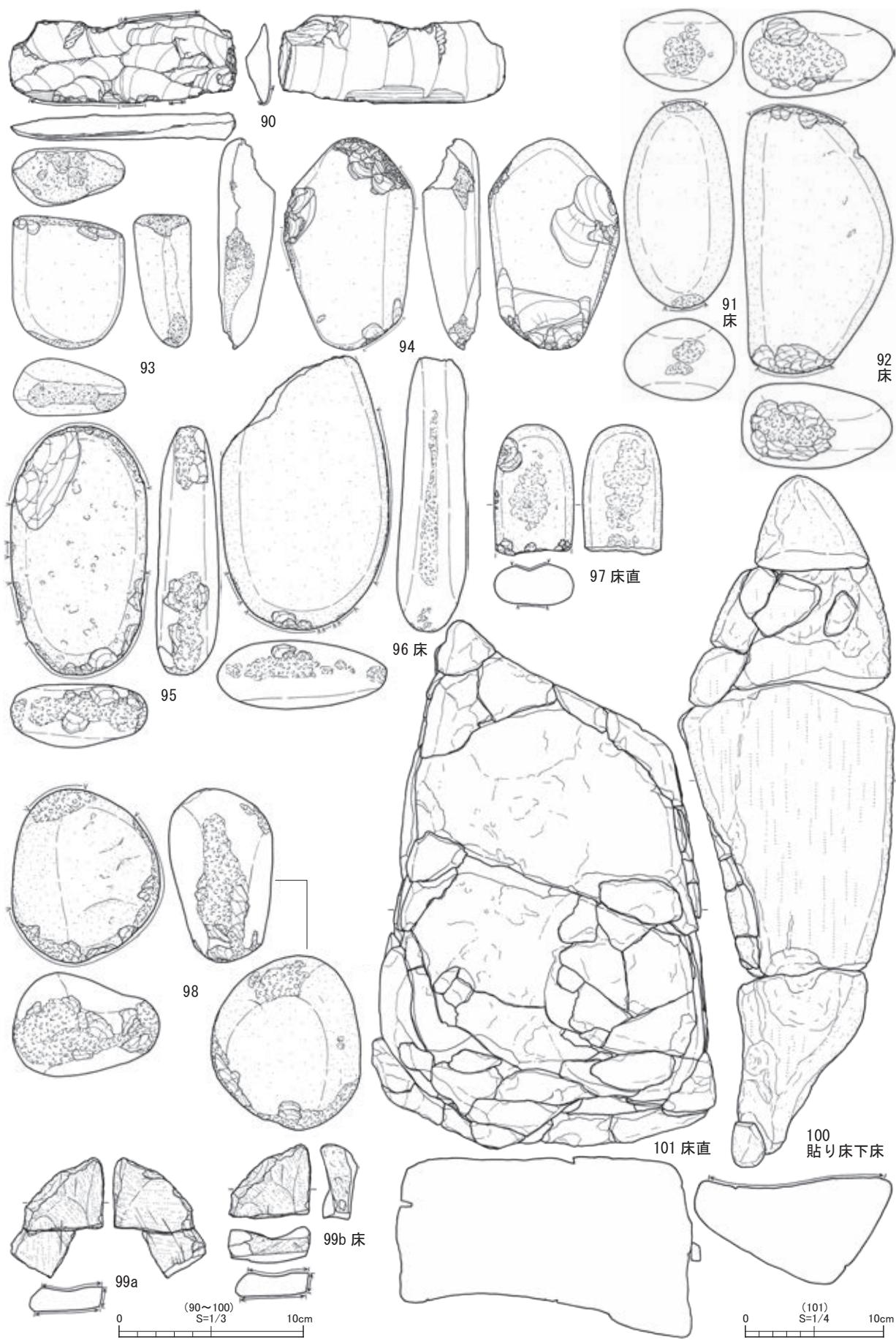
図VI-12 穫穴住居跡 (11) H-1(11)



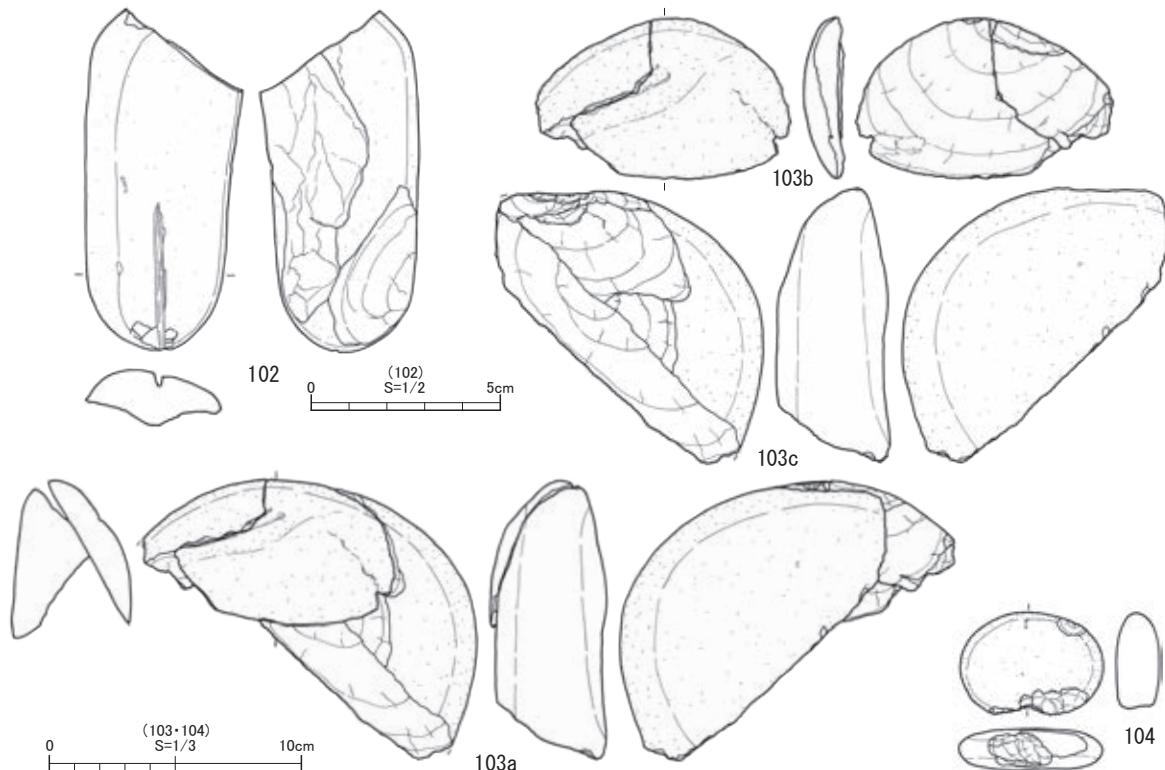
図VI-13 穫穴住居跡 (12) H-1 (12)



図VI-14 壇穴住居跡 (13) H-1 (13)



図VI-15 積穴住居跡 (14) H-1 (14)



図VI-16 壇穴住居跡(15) H-1(15)

平な素材で、刃部長がそれぞれ 14・17 cm と長い。両者とも折損しているが、再利用された形跡はない。90 は頁岩製の単剥離打面の石刃素材で、素材右側縁である下縁に刃部が形成され、上部の一部縁辺も丸みを帯びる。91～98 はたたき石。91・92 は I a1 類、93 は I a3 類、94 は I c 類、95・96 は I d 類、97 は II b 類、98 は III 類。砂岩が主体であるが、頁岩・泥岩・安山岩も利用される。機能部は末端部が多いが、側縁や平坦面にあるものもある。99・100 は砥石。99a の両面にはすり面があり、両面が使用されている。99b の下面にすり面があることから折損後、折れ面が使用されたものと考えられる。100 は長さ 37 cm の細長い形状で長軸方向に溝状のすり面がある。101 は台石。厚さ 12 cm 程の直方体に近い形状で、表面は平坦である。102 は線刻礫で、正面中央下部に石器等で溝状に線刻される。103・104 は加工痕のある礫。103 は扁平な円礫を分割する意図があったと思われる。104 は小型扁平橢円礫の短軸中央に両極剥離状の剥離が残る。

(鈴木)

壇穴住居跡2 (H-2) (図VI-17～22、表VI-2、図版27～32)

確認・調査: 調査区西側の標高 27.2m 付近の高位部に位置する。調査前より窪みとして認識できたため、表土除去後、同様の窪みの H-1・4 との関係性を把握するため、3軒の住居をまたがるトレーナーを設定し、土層の確認を行った。その結果、周堤を伴う大型住居と判断し、トレーナーの西側とそれに直交するベルトを十字に残し、四分割して内部を掘り下げた。中央やや東寄りで屋根土の上から二次的に堆積したとみられる焼土 (HF-1)、その北東部には覆土中に掘り込まれた P-11 が、また、南壁付近に P-109 が検出された。

壇穴は南側の調査区外に伸びるが、柱穴と貼り床の位置から住居の 80% ほどは調査したと推定される。

土層: 覆土は大きく上下に分けられ、上層には自然堆積層の II 上 1・2、Ko-d、III 層、下層には流入土とみられる 3 層、屋根土の 9 層、貼り床とみられる汚れた 10 層がある。また、下層の 3 層と 9 層

の間にはV層に類似した4層が堆積し、住居の掘り上げ土と推定される。これらのことから住居廃絶直後、屋根土が竪穴内に崩落し、そのすり鉢状の上面に他の住居の掘り上げ土が投げ込まれ、周辺の土が流入した後、Ⅲ層以上の自然堆積層が形成されたと考えられる。投げ込み土の4層は北側には分布せず、南側に遍在することより南側の住居が供給源とみられる。また、屋根土と4層の間に自然堆積層や流入土がないことから住居廃絶後、時間的間隙を置かずに掘り上げ土が投げ込まれたと想定される。

周囲にはV層に類似したRM層が巡り、西側の斜面には15cm程度、東側にはH-10を埋め、さらに土手状に30cm程度堆積する。H-1にもRM層が認められるが、断面A-Bでは木根攪乱により両者のRM層の前後関係は把握できなかった。

床面・壁：床面は平坦で、中央には3.1×2.5mの範囲に貼り床が検出され、その中心には汚れた土が分布する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は隅丸長方形である。

付属遺構：主柱穴7基(HP-1・2・4・6・7・13・14)、柱穴の可能性のあるピット2基(HP-3・15)、径20～40cmの浅いピット3基(HP-5・8・11)、径10cm程の小型のピット2基(HP-9・12)、溝状のピット1基(HP-10)が検出された。

主柱穴は貼り床を囲む東西南北の4本とみられ、東はHP-2からHP-4、西はHP-6からHP-7、南はHP-14からHP-13へそれぞれ柱の建て替えが行われている。古い柱穴の深さは50cm前後で、新しい柱穴は70cm程で、より深く変化している。また、位置は住居の中心から放射状に50cm程外側に移動している。

古い柱穴は上部がすり鉢状に広がり、抜き取り痕とみられる。

古い柱穴HP-2・6は覆土最上部には白色粘土が混じるV層があり、柱穴を埋めた後、最上部に白色粘土混じりのV層を詰めて突き固め、床面としている(図版31-1・4)。また、HP-1・4・7・14の底には白色粘土が3～8cmの厚さで貼られ、土台としている(図版31-2・5)。

主柱穴以外はHP-15を除き、直径13～40cm、深さ20cm以下の小型のもので、住居中央付近には5基(HP-5・9・11・12・15)あり、弧状の溝状遺構(HP-10)も検出されている。

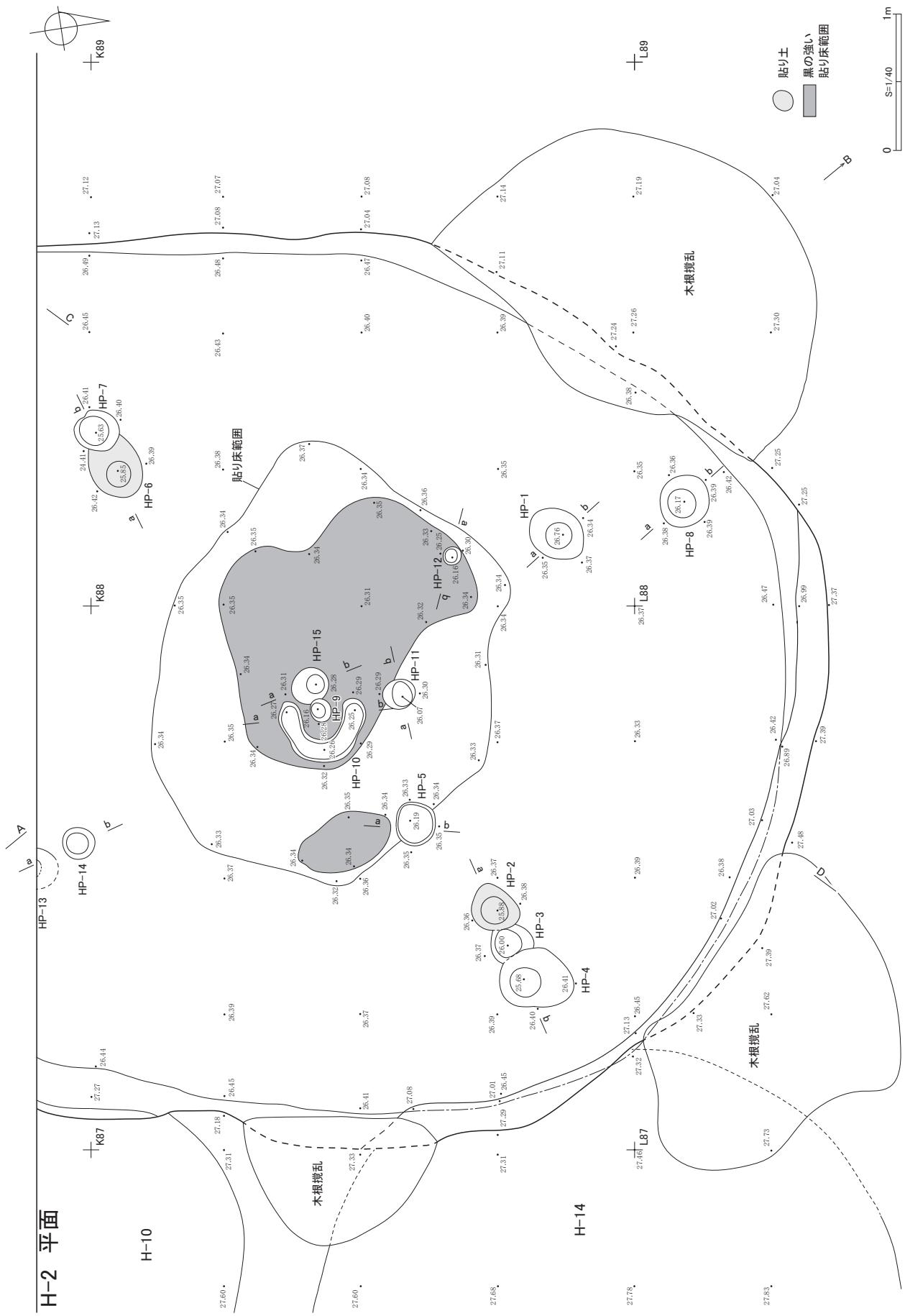
HP-15は主柱穴より小型であるが、ほぼ中心に位置し、深さは37cm、直径12cmと比較的深く、細い柱である可能性がある。床面に炉跡は検出されなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数は3,109点で、土器等が911点、石器等が2,198点である。土器等はⅡ群b類905点、Ⅲ群a類5点、時期不明1点が、石器等は石鏃3点、石槍5点、両面調整石器5点、つまみ付きナイフ4点、スクレイパー18点、石錐2点、Rフレイク16点、Uフレイク2点、剥片1,560点、石核23点、石斧4点、擦切残片1点、北海道式石冠4点、扁平打製石器10点、すり石2点、石鋸1点、たたき石11点、台石2点、原石6点、加工痕のある礫1点、礫516点、線刻礫1点、雨だれ石1点が出土した。床面近くの遺物は少ない。

時期：出土遺物・遺構の形状から縄文時代前期後半円筒下層d1式期と考えられる。

掲載出土遺物：(図VI-21-1～図VI-22-25、図版172・173)

土器：1～10はⅡ群b類。1・2は隆帯のあるもの。1は不整綾絡文、2は平行縄線文が口縁部及び隆帯の上下に施され、隆帯上には斜めに縄の圧痕が付けられる。3は平行縄線文のある口縁部。4は隆帯がなく、口縁部には横位の絡条体圧痕が施文される。5は地文施文後、表面が磨かれる。6は底部で、底角が張り出す。1・2は円筒下層b1式、4は同c式、3・5・6は同b1～c式。7～9は円筒下層d1式。7・8は口縁部に結束第1種羽状縄文、9は平行縄線文が施文され、7は2本の綾絡文で、9は刺突列と結束第2種羽状縄文で区画される。10はⅢ群b類の可能性もある。



図VI-17 積穴住居跡 (16) H-2(1)

H-2 斷面 K87

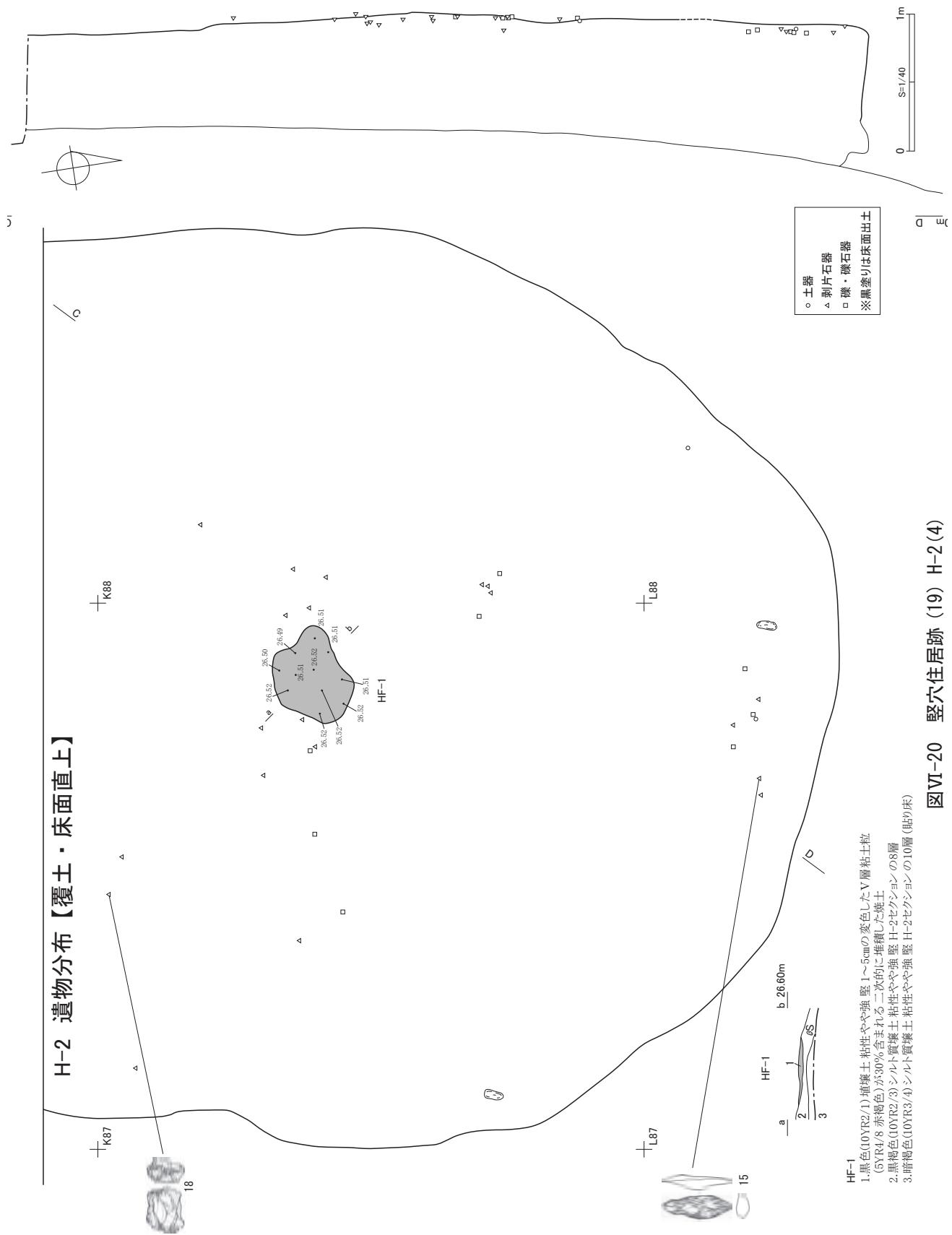


図VI-18 穔穴住居跡(17) H-2(2)

H-2 断面図

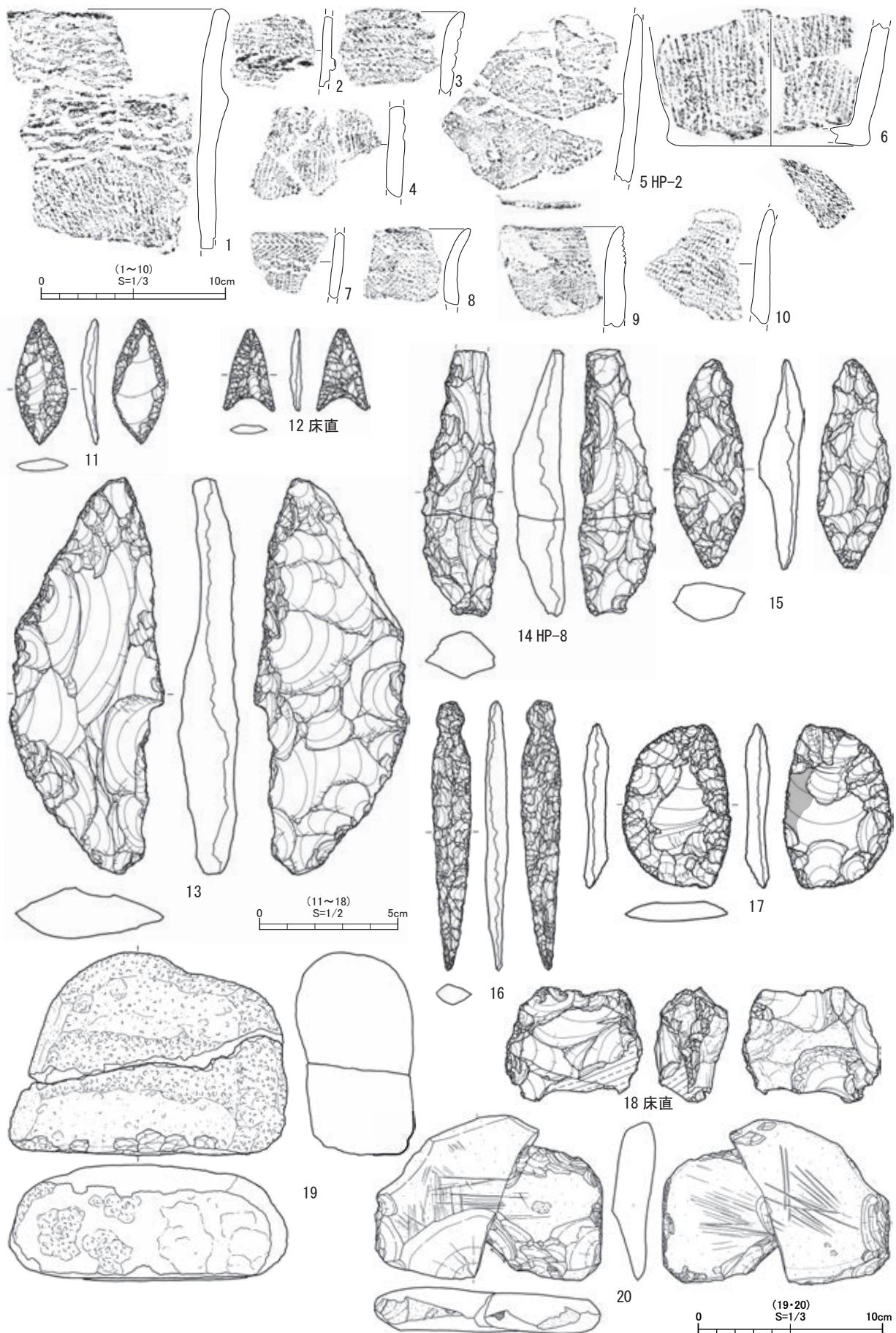


図VI-19 壊穴住居跡 (18) H-2(3)

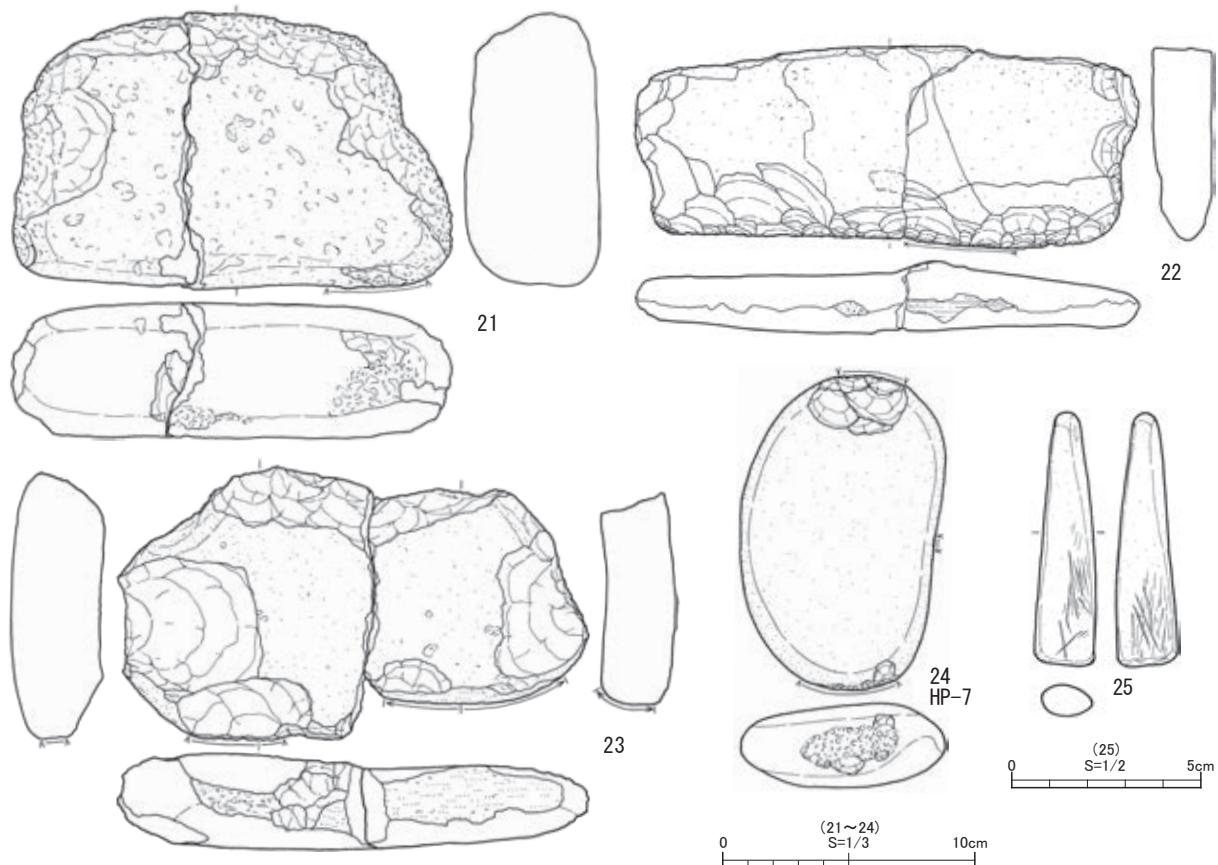


图VI-20 竖穴住居跡 (19) H-2(4)

HF-1 黒色(10YR2/1)植物土 粘土性やや強 壓1~5cmの変色したV層粘土粒
1. 黒色(10YR2/1)植物土 粘土性やや強 壓1~5cmの変色したV層粘土粒
2. 黑褐色(10YR2/3)シルト質礫土 粘土性やや強 壓H-2セシヨンの8層
3. 黑褐色(10YR3/4)シルト質礫土 粘土性やや強 壓H-2セシヨンの10層(貼り戻)



図VI-21 壇穴住居跡 (20) H-2 (5)



図VI-22 竪穴住居跡 (21) H-2 (6)

石器：11・12は石鏃で、11はI a類、12はIII c類。13は石槍。裏面上部に欠損の痕があり、加工途中で欠損した後、正面左側縁上部に再加工が行われた結果、左右非対称な形状になったとみられる。14は両面調整石器で、粗い加工で覆われる。15・16はつまみ付きナイフ。両者とも左右対称の両面調整体で、棒状の16は先端部と中央の稜に光沢が残る。17は全体的に平坦剥離で加工されたスクレイパーV類。右側縁裏面に光沢がある。18はII a類の小型石核。19・21は北海道式石冠の未成品で、よく似た扁平な安山岩礫素材。同一原石の分割素材の可能性がある。19は上・右側縁及び溝部の敲打が認められ、下面是「レンガ割り法」による分割面とみられる。21は上・左右側縁のみ敲打による整形が行われる。いずれも整形途中で破損している。20・22は扁平打製石器。20はI類で、中央で折損後、右側の破片には加工が施される。両面には石器などの鋭利な刃による複数方向の条痕が見られる。22はIV類で、ほぼ素材形状を維持する。23はすり石IV類で、中央で折損後、右側の小型破片が再利用され、使用により高さが1.5 cmほど減少する。24はたたき石I a2類。正面上部に剥落痕がある。25は線刻礫。撥形の素材の先端部両面に線刻される。

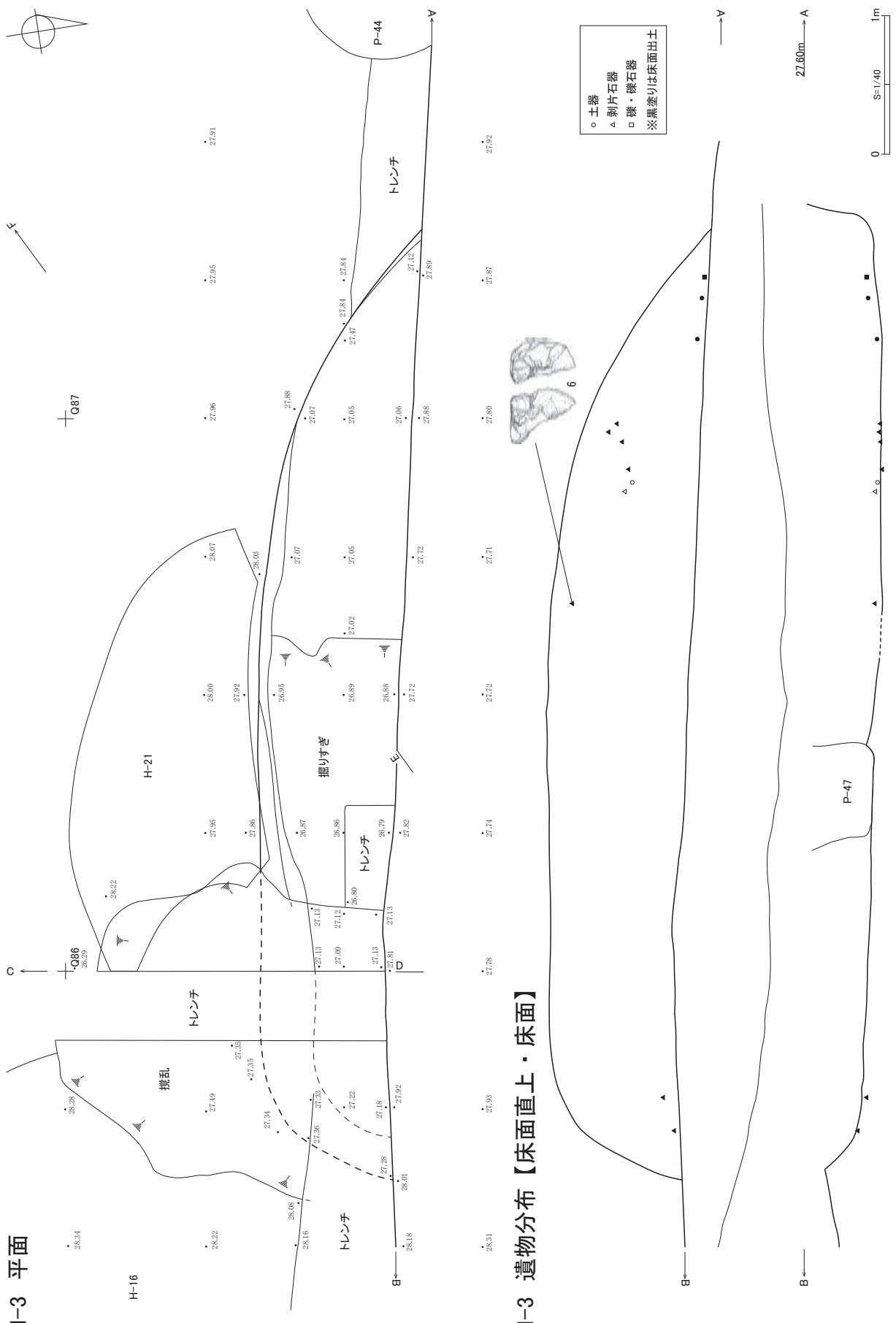
(鈴木)

竪穴住居跡3 (H-3) (図VI-23～25、表VI-2、図版33・34)

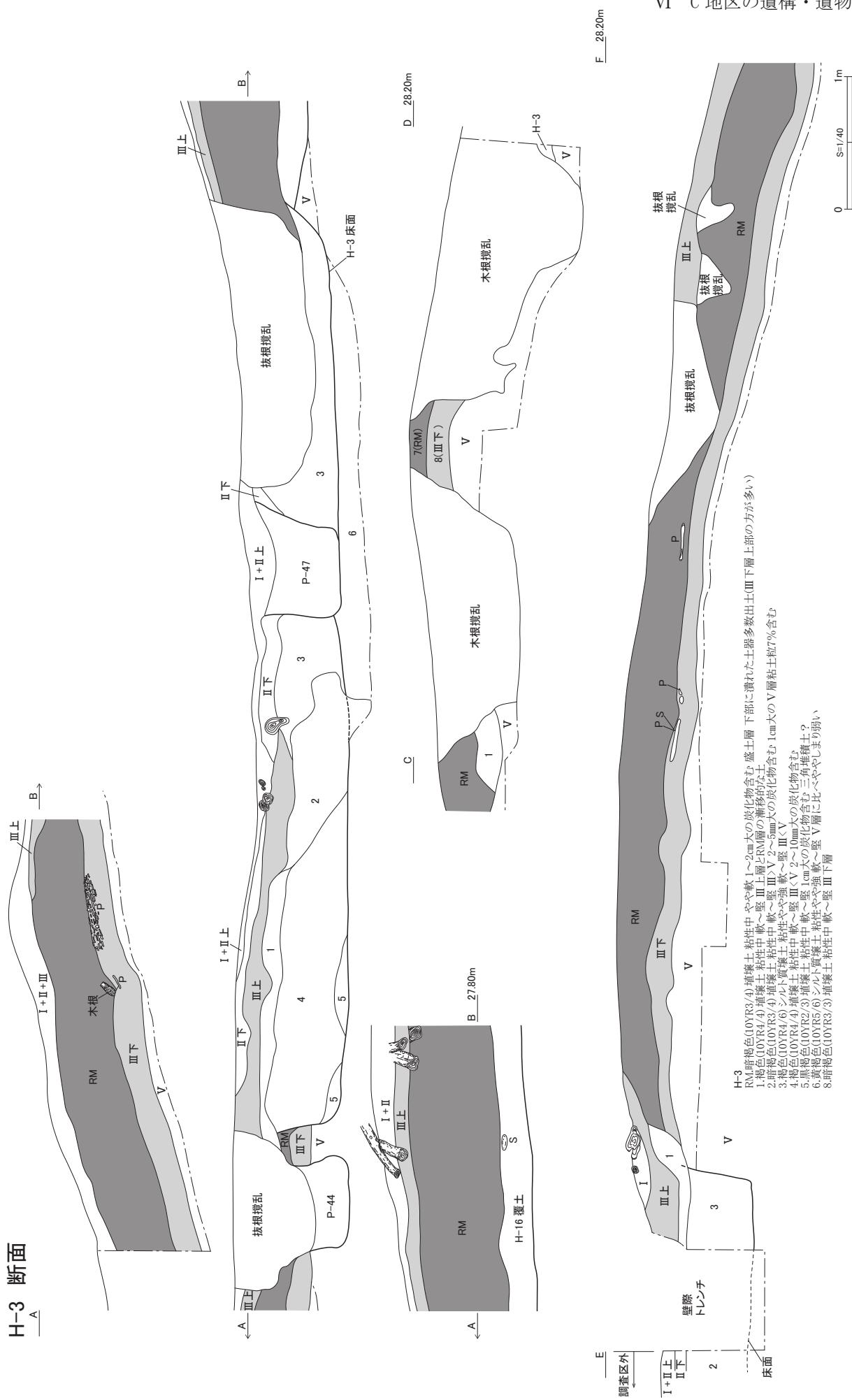
確認・調査：調査区西側の標高27.9m付近の高位部に位置する。調査前より壅みとして認識されていたが、大部分は北側の調査区外に伸び、今回は住居の一端を調査したに過ぎない。

隣接するH-1と連続する86ラインのトレーナにより土層観察を行い、周堤を伴う大型住居と確認した。そのまま86ラインのベルトを残し、内部を掘り下げた。北壁断面では覆土中に掘り込まれたP-47を検出した。調査区外の北側には周堤が巡り(図版34-5)、その北端はD地区で検出されている。

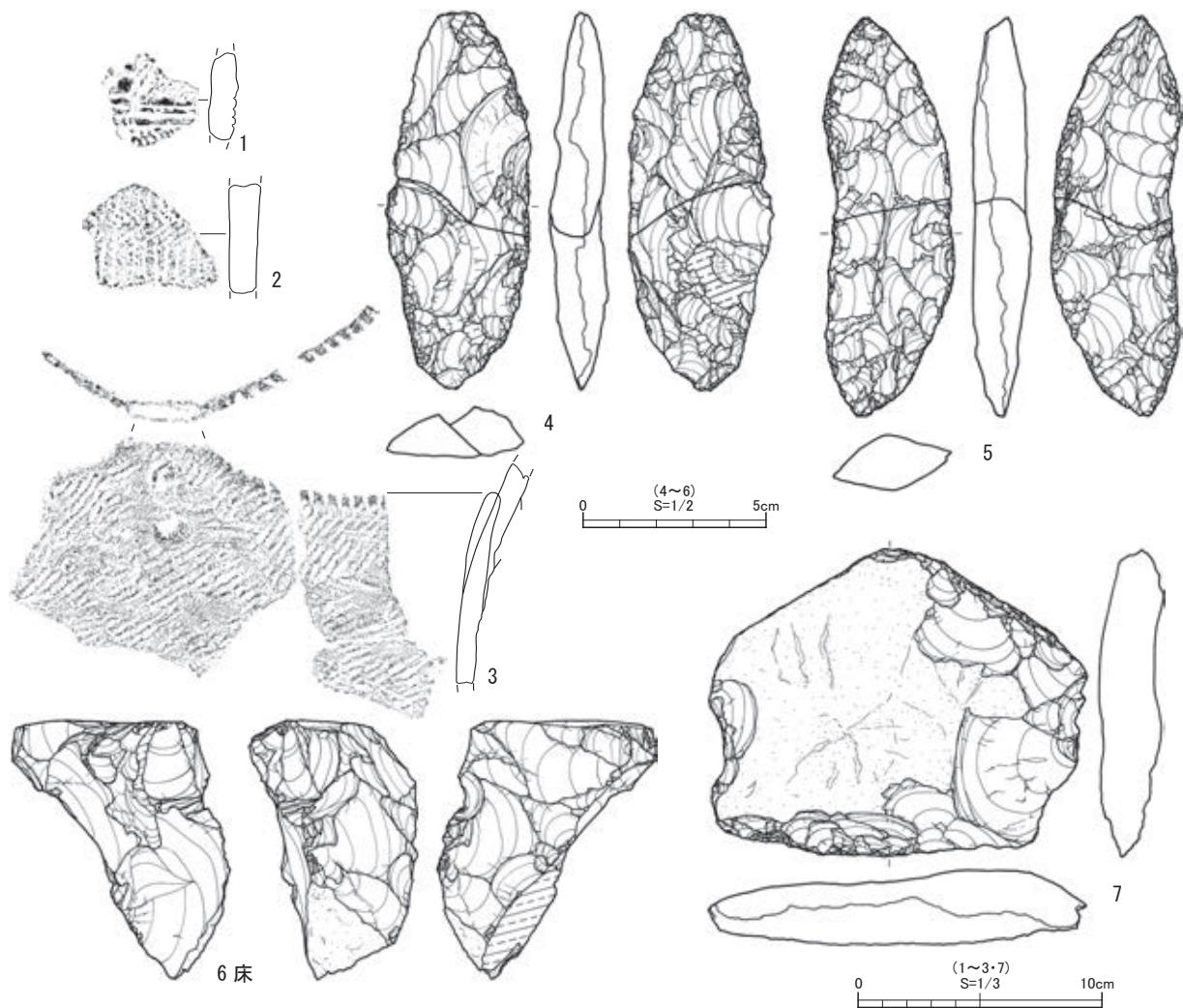
土層：住居の末端であり、覆土は大部分が屋根土(覆土2～4)の崩落土である。その上にはIII上層



H-3 遺物分布【床面直上・床面】



図VI-24 穔穴住居跡 (23) H-3 (2)



図VI-25 壇穴住居跡 (24) H-3 (3)

以上の自然堆積層が覆っている。周堤であるRM層は周囲を厚く巡り、A-B断面の西斜面側では40cm、東側では67cm確認される。後者はH-3・4のRM層が重層しているため厚いと考えられるが、肉眼的に分層不可能で、前後関係を判定できなかった。また、86ライン断面(C-D)では攪乱によりH-1・3間のRM層の切り合い関係は確認できなかった。

床面・壁：床は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は隅丸の方形または長方形になると推定される。

付属遺構：住居の縁辺のみの調査であり、柱穴等の遺構は検出されなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数は1,991点で、土器等が696点、石器等が1,295点である。土器等はII群b類686点、III群a類10点が、石器等は石鏃4点、石槍2点、両面調整石器7点、つまみ付きナイフ1点、スクレイパー6点、Rフレイク9点、Uフレイク1点、剥片949点、石核8点、扁平打製石器1点、石鋸1点、砥石4点、加工痕のある礫1点、礫301点が出土した。

床面付近に遺物は少ない。

時期：周堤を伴う大型住居であることからH-1・2・4とほぼ同時期とみられ、縄文時代前期後半円筒下層d1式期と考えられる。

掲載出土遺物：(図VI-25-1～7、図版173)

土器：1・2はII群b類。1は半裁竹管状工具による沈線と多軸絡条体が施文される。2は結束第1種

羽状縄文が単軸縞条体 1 類の間に横環する。2 は円筒下層 d1 式。3 はⅢ群 a 類。口唇外側に縄の圧痕、口縁部突起下に把手状貼付の痕跡が見られる。

石器：4・5 は石槍。長さ 10 cm 程でどちらも中央で折損している。6 は石核Ⅶ 類。左側面が節理面で大きく破損している。7 は扁平打製石器Ⅱ 類。上縁は山形に調整され、下縁の稜は両面加工により鋭角である。
(鈴木)

竪穴住居跡 4 (H-4) (図VI-26～39、表VI-2、図版 35～39)

確認・調査：調査区西側の標高 27～28m 付近の高位部に位置する。調査前より窪みとして認識できたため、表土除去後、同様の窪みの H-1・2 との関係性を把握するため、3 軒の住居跡をまたがるトレントを設定し、土層の確認を行った。その結果、周堤を伴う大型住居跡と判断し、トレントの西側とそれに直交するベルトを十字に残し、四分割して内部を掘り下げた。覆土掘削過程では自然堆積とみられる暗褐色土(5' 層)で個体土器や剥片集中、礫集中などを検出した。床面と壁を確認後、土層の堆積状況を記録し、ベルト除去と床面精査を行なって貼り床、柱穴、周溝、砂ピットなどの付属遺構を検出し、個別に調査した。

竪穴は北側の調査区外に伸びるが、柱穴と貼り床の位置から住居の 80% ほどは調査したと推定される。平面形態は隅丸方形もしくは楕円形、長軸は南西～北東方向、大きさは復元で長軸 8.0m 以上 × 短軸 7.7m である。

土層：覆土は大きく上下に分けられ、上層は自然堆積層のⅡ上・Ⅱ下とⅢ層、下層は流入土など自然堆積とみられる暗褐色土の 2・5' 層、掘り上げ土の投げ込みや崩落とみられる褐色・暗褐色の 3・4 層、屋根土の崩落とみられる 6 層で構成される。3・4 層は黄褐色土主体の厚い堆積で竪穴の窪み全体を覆うように分布しており、掘り上げ土の投げ込みが主と推測される。5' 層からは個体土器や剥片集中、礫集中などまとまった遺物の出土がみられ、廃絶竪穴の窪みを利用した廃棄行為や石器製作などが考えられる。屋根土の 6 層は壁際から中央にかけて床面全面を覆っており、上屋構造の全体に褐色土が葺かれていたことが推測できる。6 層は壁際に厚く認められ、特に周堤盛土から屋根の裾部に厚く盛られたと考えられる。

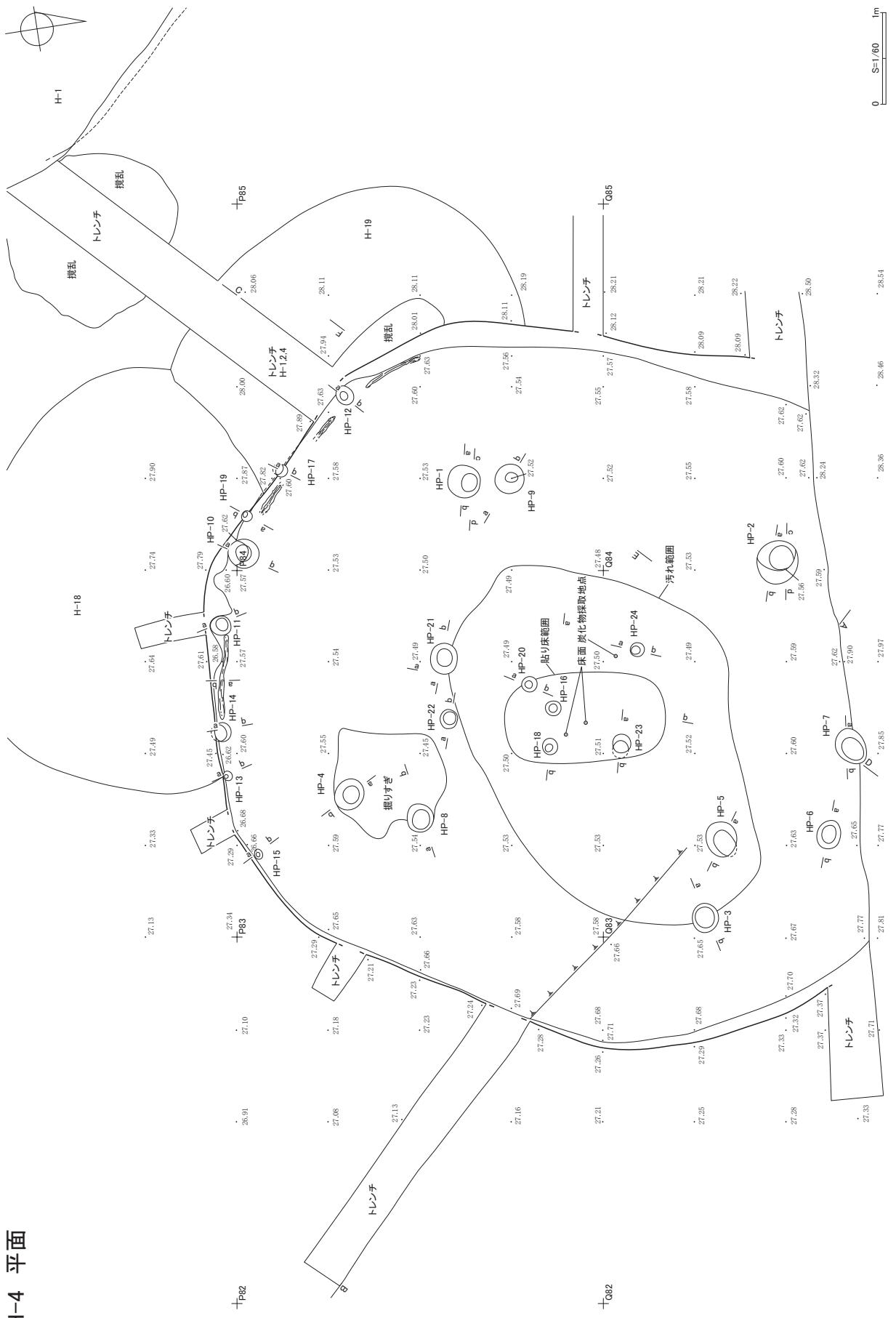
竪穴の周囲には 1 層や RM 層などの掘り上げ土が周堤状に盛土された様子が観察でき、特に H-1 が隣接する南側では 50 cm 以上の顕著な厚さで認められ、H-19 を埋めている。

以上の状況から全体の堆積過程を復元すると、①竪穴を構築し掘り上げ土を周堤盛土や屋根土に利用する、②住居廃絶後に屋根土が床面直上に崩落する、③流入土が自然堆積する過程で遺物の廃棄や石器製作が窪みを利用して行われる、④隣接遺構から竪穴の窪みに多量の掘り上げ土が投げ込まれる、⑤上部にⅢ～Ⅱ層の黒色土の堆積が発達する、の推移が考えられる。

床面・壁：床面は概ね水平・平坦に構築されているが、壁付近 1.5～2m ほどで若干せり上がる。床面中央部には 1.8 × 1.0m の楕円形に貼り床が施されており、その周囲 4.4 × 2.9m の不整形な範囲には黒褐色・暗褐色に汚れた床面が検出された。壁は概ね垂直に近い角度で立ち上がる。また周堤盛土が壁上部となるため、壁の高さは最大で 1.3m を超える。

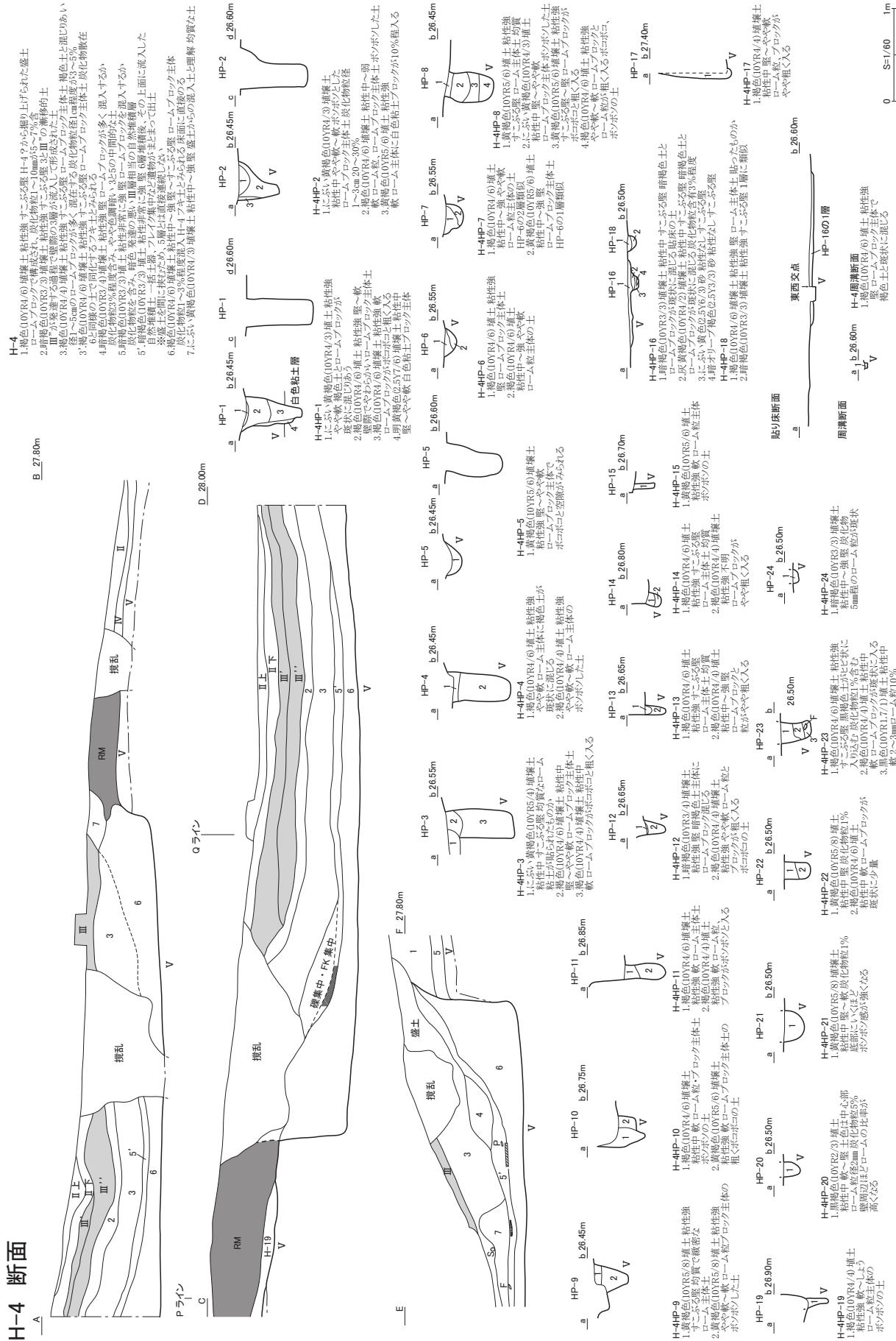
付属遺構：付属遺構には周溝、主柱穴、小柱穴、壁柱穴などがある。周溝は幅 10 cm 以下・深さ 5 cm ほどで、南西壁に沿って検出された。また南西壁には壁柱穴 8 基が 0.3～0.9m の間隔で並び、周溝は壁柱穴の間を繋ぐように認められた。壁柱穴は径 10～15 cm、深さ 20～40 cm を主とし、内傾気味で壁に食い込んで作られていた。主柱穴は HP-1～5・8・9 の 7 基で、規模は径 30～40 cm、深さ 60～70 cm が主、形状は円筒形で床面と垂直に掘り込まれている。配置は長軸を中心に HP-1・9、HP-2、HP-3・5、HP-4・8 の 4 単位が対称に認められる。主柱穴が 2 基 1 対で近接する状況は、建て替えなどで主柱穴

H-4 平面



圖VI-26 豎穴住居跡 (25) H-4(1)

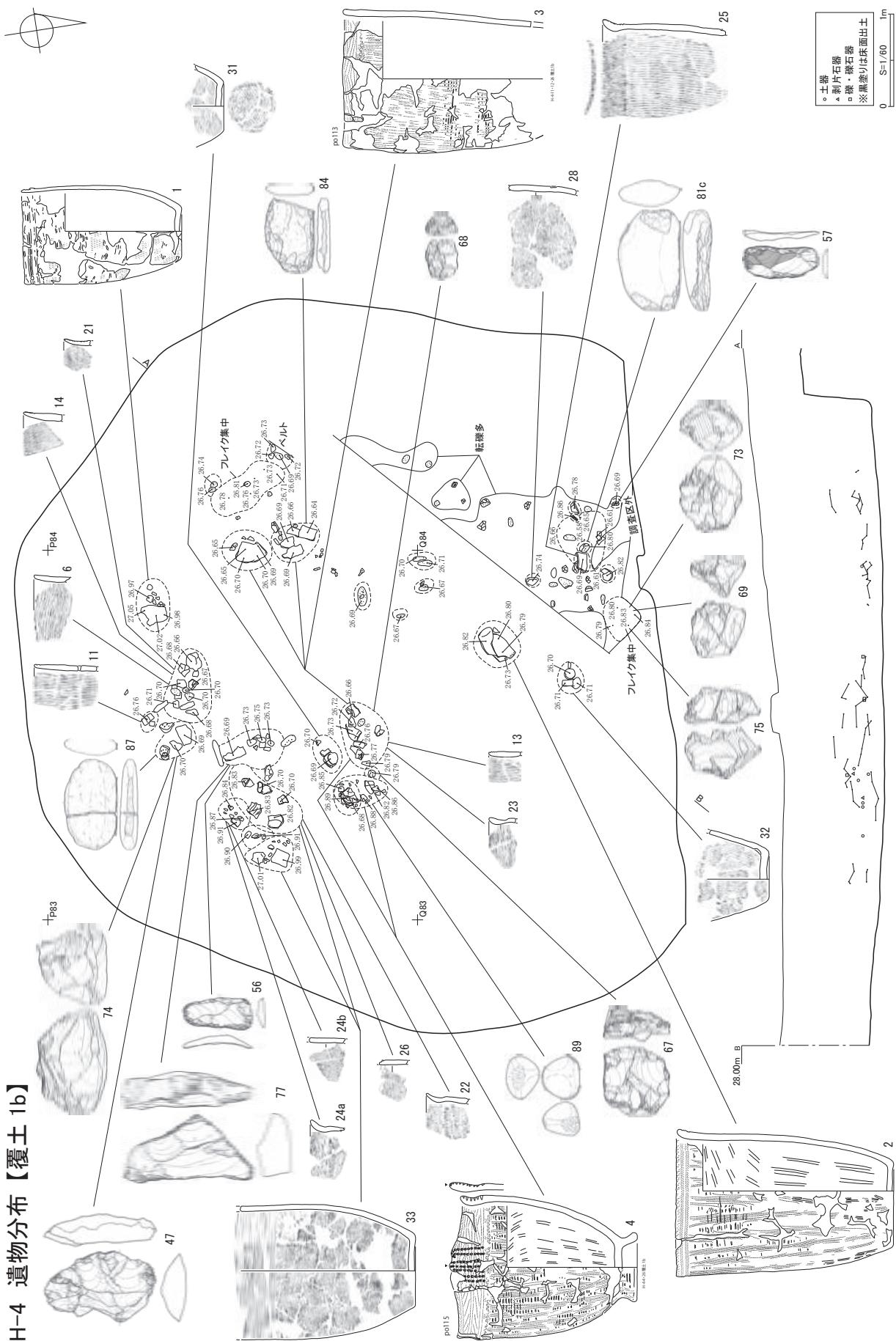
H-4 断面



圖VI-27 豐穴住居跡 (26) H-4 (2)

VI C 地区の遺構・遺物

H-4 遺物分布【覆土1b】



H-4 遺物分布【床面直上・床面】

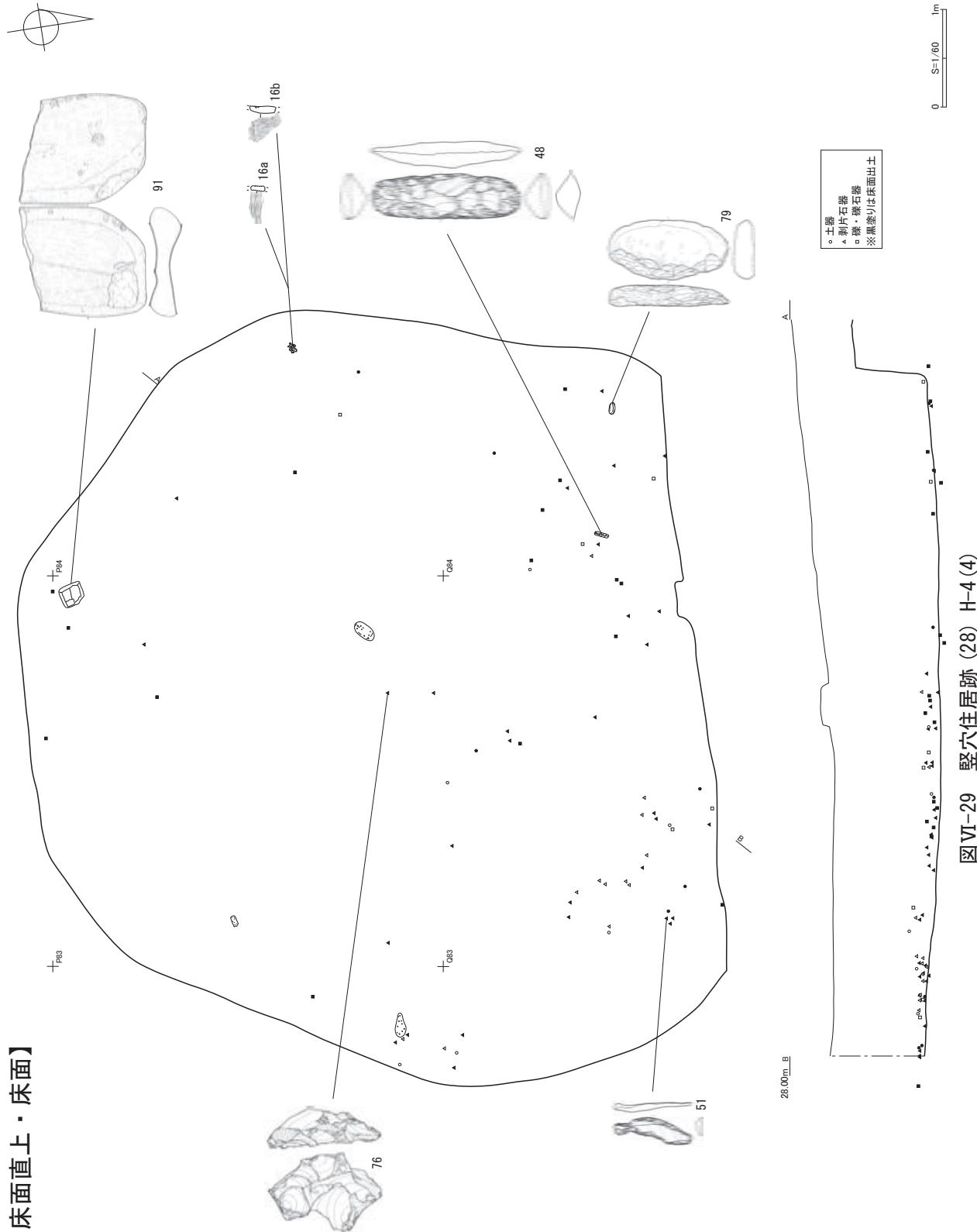


図 VI-29 積穴住居跡 (28) H-4 (4)

を付け替えたことが推測できる。住居跡長軸上にはHP-6・7とHP-21・22の径30cm・深さ20cmを主とするやや浅い柱穴がやはり2基1対で認められる。このほか住居中央部の貼り床範囲に5基の小柱穴HP-16・18・20・23・24を検出した。径20cm以下・深さ30cm以下が主体で、HP-16を除く4基は方形に並び、その長軸上にHP-16が配置されている。HP-16はいわゆる「砂ピット」で、覆土下部に砂の充填が認められた。

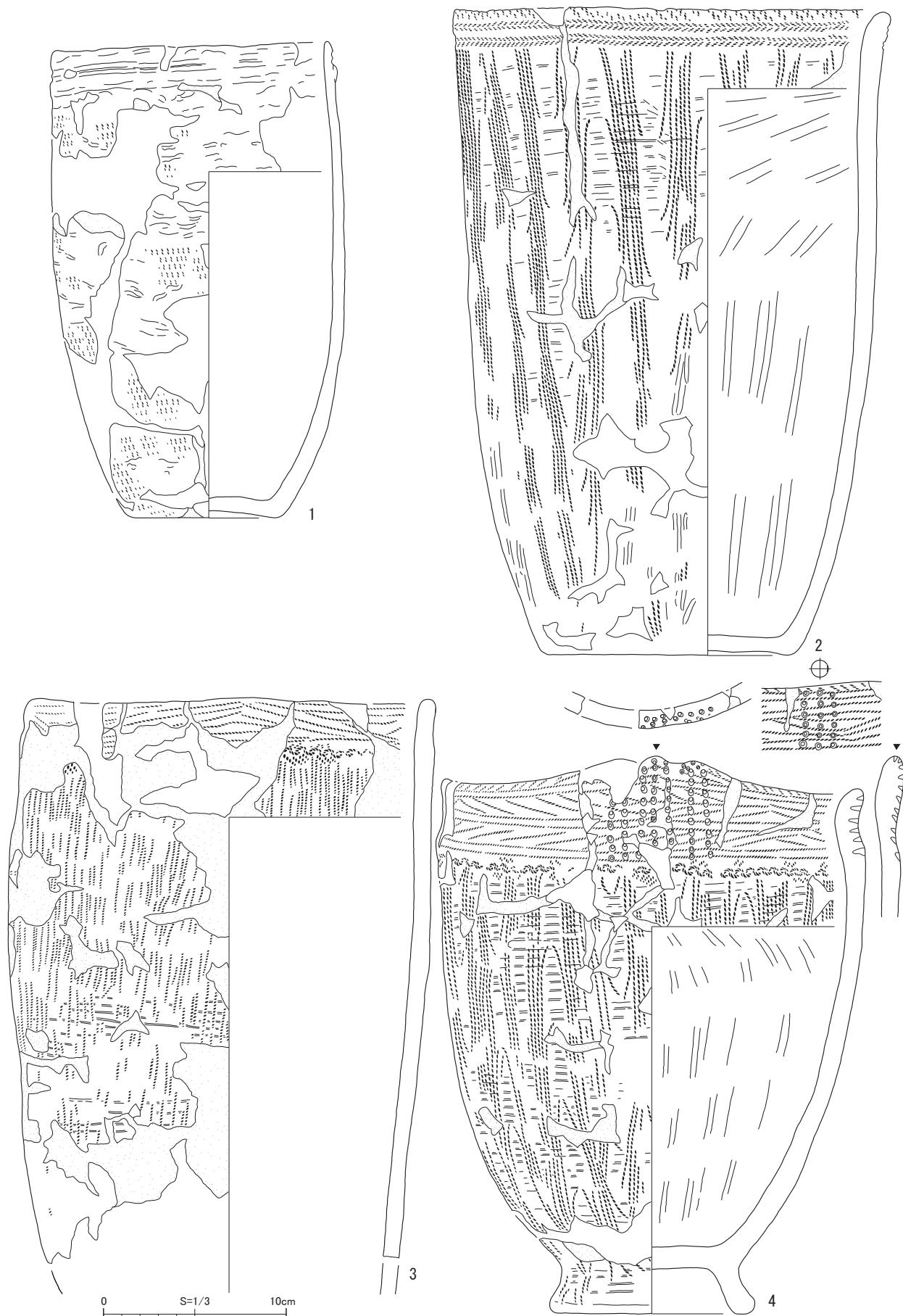
遺物出土状況：出土遺物の総数は13,996点で、土器等が5,144点、石器等が8,852点である。土器等はⅡ群b類5,112点、Ⅲ群a類4点、Ⅲ群b類18点、時期不明1点、焼成粘土塊7点、土製円盤1点が、石器等は石鏃5点、石槍11点、両面調整石器36点、籠状石器3点、つまみ付きナイフ13点、スクレイパー37点、Rフレイク27点、Uフレイク8点、剥片6,752点、石核62点、石斧2点、石斧未成品1点、石のみ1点、北海道式石冠1点、扁平打製石器15点、すり石4点、たたき石16点、砥石1点、台石1点、石皿1点、原石14点、加工痕のある礫2点、礫1,836点、石製品2点、磨製礫1点、赤色顔料?1点が出土した。特に覆土中の自然堆積層である5'層からは、Ⅱ群b類の土器、剥片、礫がまとまった状態で検出され、埋没過程の堅穴の窪みを利用した縄文前期後半の廃棄行為や石器製作の様子が認められる。対して床面出土遺物は少ないものの、つまみ付きナイフ、籠状石器、石皿などの定形石器が出土し、確実な当該期の資料として認めることができる。石皿は南西壁に近接して出土し、住居内での設置場所もしくは保管場所を示すことが考えられる。

土壌のフローテーション選別の結果、HP-2覆土1層からウルシ属核3点が検出された。さらに種の同定を目的として詳細な分析を行ったが3点ともウルシと判定するには至らなかった（VIII章4・5）。

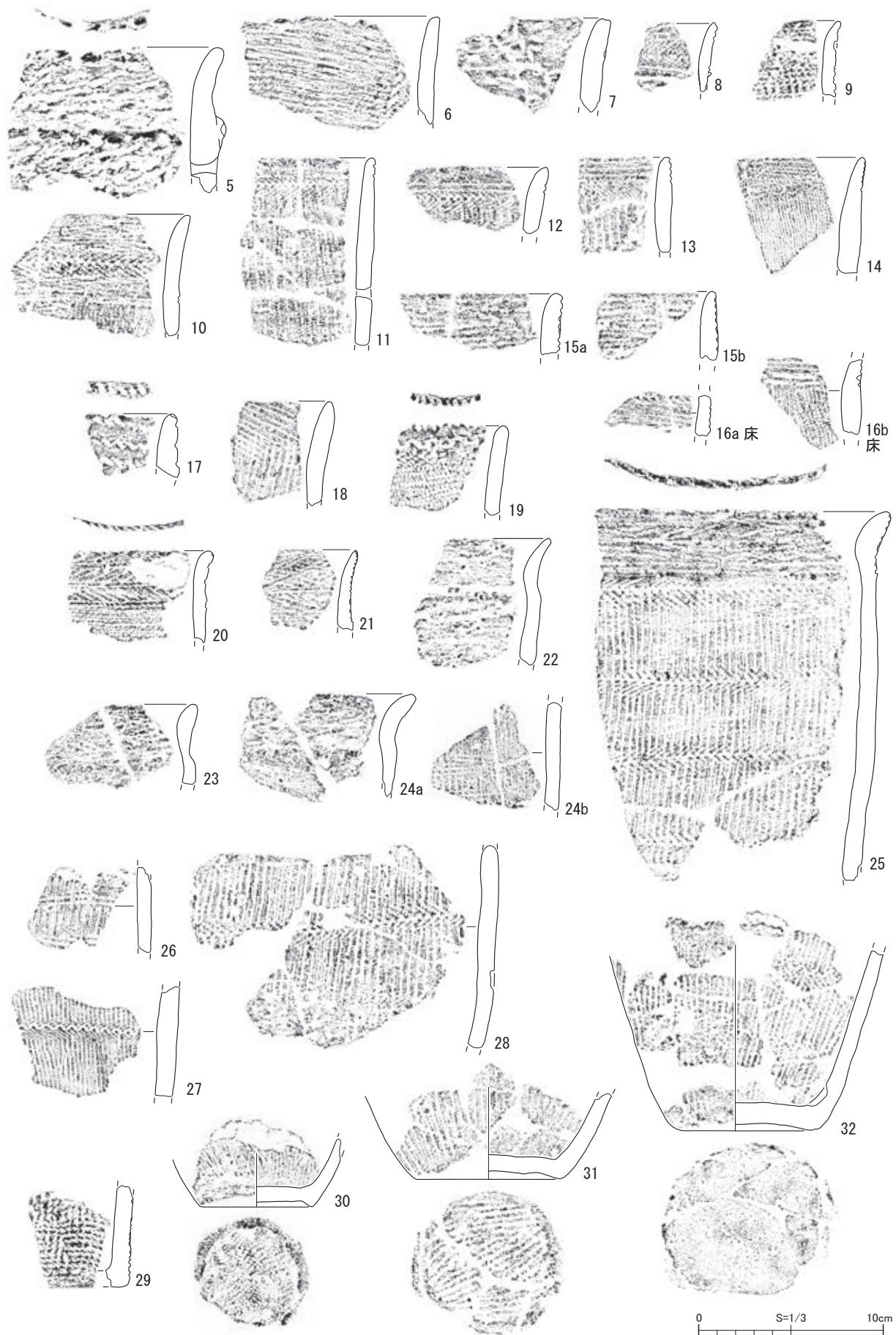
時期：床面出土土器は全てⅡ群b類である。HP-2覆土1層出土の炭化物からは $4,680 \pm 30$ yrBP (K04-D5)、床面出土の炭化物からは $4,780 \pm 30$ yrBP (K04-D6)の年代測定値が得られている。遺物・年代測定値から縄文時代前期後半円筒下層d1式期と考えられる。 (坂本)

掲載出土遺物：(図VI-30-1～図VI-39-94、図版174～178)

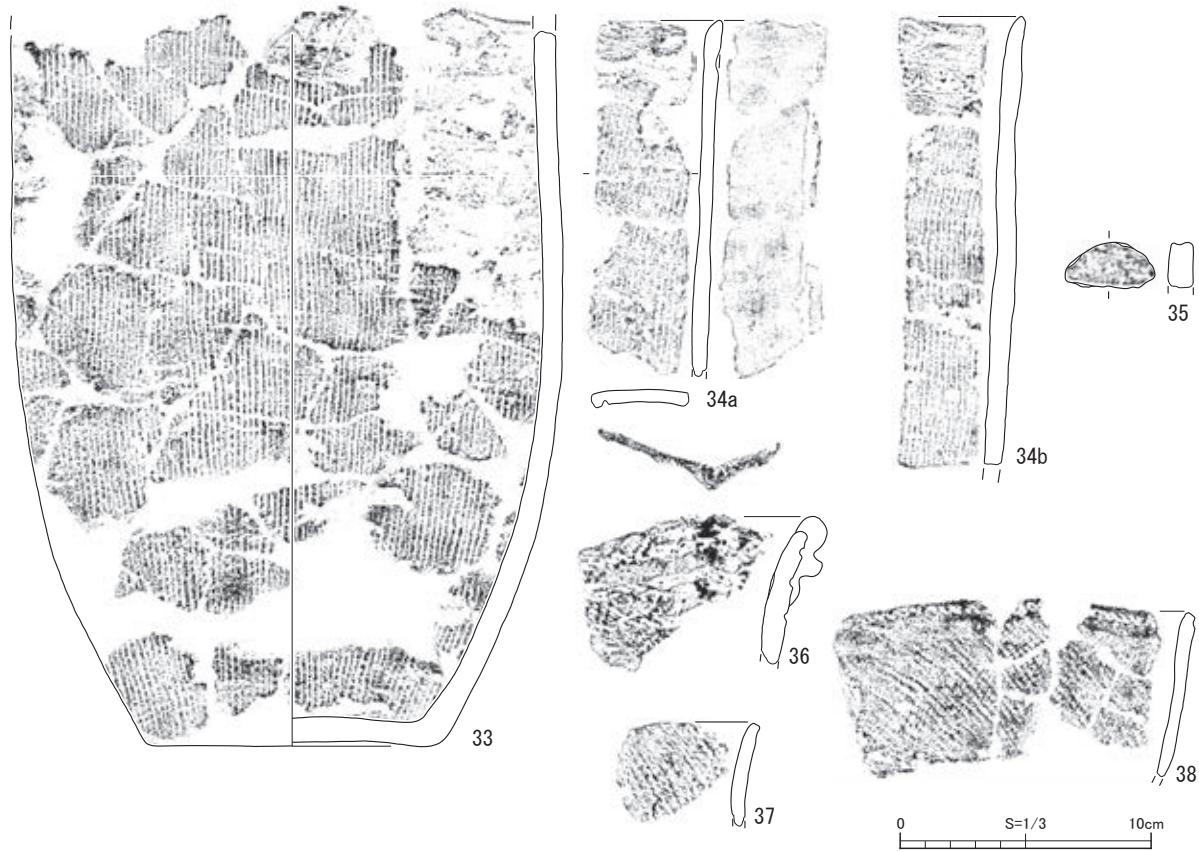
土器：1～35はⅡ群a類。5は円筒下層b1式。厚手で、指頭圧痕のある貼付の上下に不整綾絡文が施文される。6・7は円筒下層b2式。6は横位の単軸絡条体1類の上に、縦の縄線文が、7は不整綾絡文に鋸歯状の縄線文が押捺される。8～10は円筒下層c式。8は逆撫り2本1組の縄線で上下が区画された口縁部に結束第1種羽状縄文が施文される。9は口縁部に逆撫り2本1組の縄線が複数充填される。10は逆撫り2本1組の縄線で上下が区画された口縁部に横走するLLR縄文、結束羽状1種羽状縄文が施文され、胴部には同じLLR縄文が縦位に施される。これらの口縁部は胴部から直線的に立ち上がり、緩やかに外反する。1～3・11～19は円筒下層d1式。1は凹状の底部からふくらみをもつて立ち上がり、胴中央部から口縁部までほぼ垂直に立ち上がる。表面は風化により判然としないが、口縁部は縄線らしい横位の窪みが横環し、胴部には多軸絡条体が縦位に回転施文される。2はほぼ平坦な底部からわずかに膨らみ、胴部中央から垂直に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。横方向の貝殻条痕による下地の上に単軸絡条体1A類が縦位に施文される。口縁部には逆撫り2本1組の縄線が2段巡り、口唇外面には斜めに縄の圧痕が押捺される。胴部に施文された単位から原体の直径は1.5cm程と推定される。内面は光沢が出るほど丁寧に磨かれ、その方向は口縁部が横、胴部が縦である。3は底部を欠くが、2と同様な形状である。結束第2種羽状縄文で区画された口縁部は縄線による鋸歯文とその間を充填する水平の縄線が描かれる。胴部は横位の貝殻条痕の上に自縄自巻の縄文が縦位に施文される。内面の調整は2と同様である。11～14は幅の狭い口縁部に縄線・結束羽状縄文、胴部に自縄自巻縄文または単軸絡条体1類が施文される。15は平行縄線に斜めの縄線が加わる。16は2列の短沈線の区画文と横位の自縄自巻縄文、17は口縁部の平行縄線に加え、口唇部に棒状工具によ



図VI-30 壇穴住居跡 (29) H-4 (5)



図VI-31 壇穴住居跡 (30) H-4 (6)



図VI-32 穫穴住居跡 (31) H-4 (7)

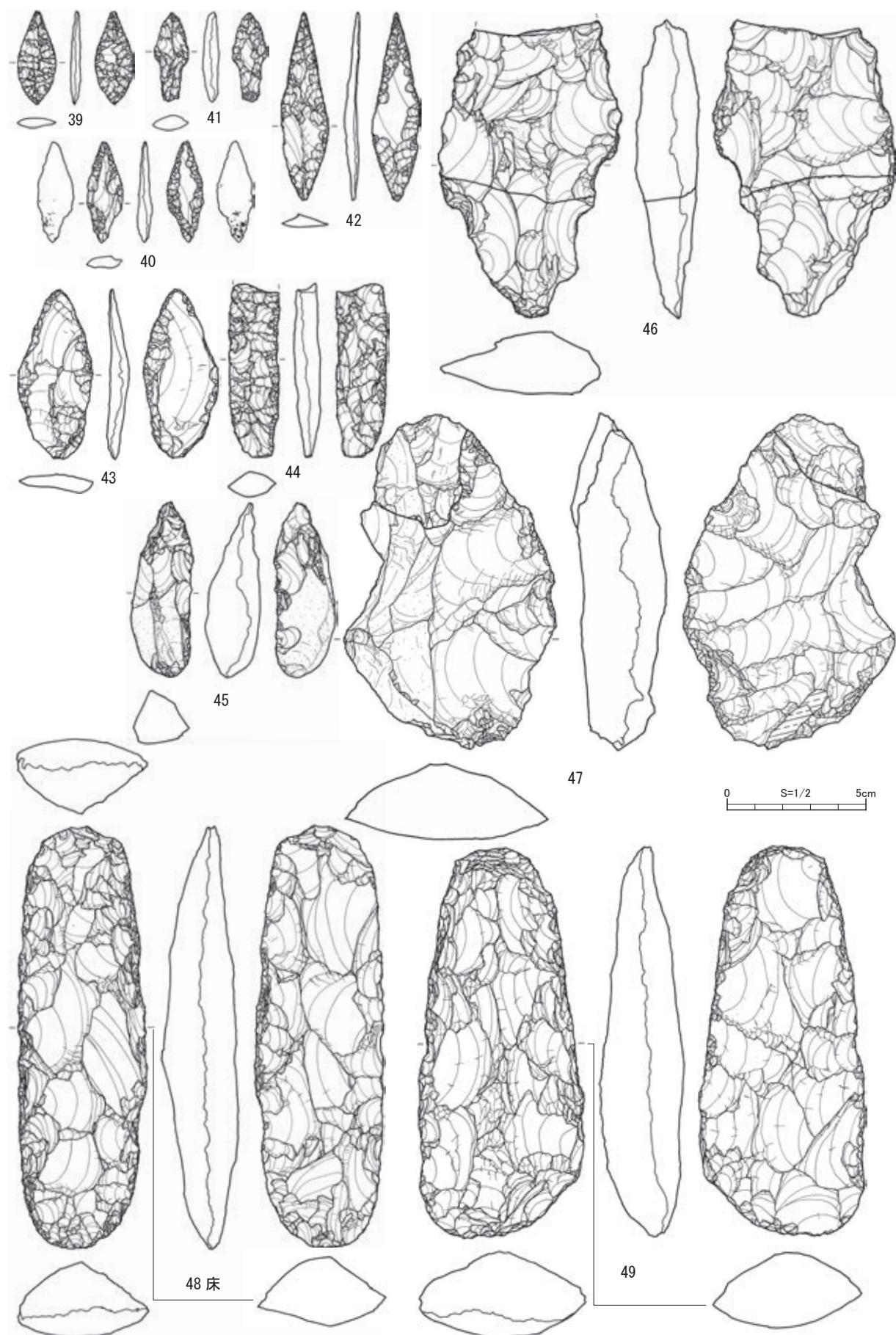
る刻みが見られる。18は自縄自巻縄文が斜行する。19は口縁部に結束第2種羽状縄文、口唇部に縄の圧痕、胴部に多軸絡条体が施文される。これら口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、先端部はやや薄くなる。4・20～25は円筒下層d2式。4は高台の付く深鉢で、胴が膨らんで上部は垂直に立ち上がり、口縁部はくびれる。3個1組の低い山形突起がおそらく2単位あり、突起下には中央に3列1組、左右に2列1組の刺突列が3つの小突起下にそれぞれ垂下する。突起の無い90度左右には3列の刺突列が垂下する。口縁部の上下と中央には2本1組の縄線が横環し、その間に斜めの縄線で菱形が描かれる。また、口唇外面には単軸絡条体が施文される。口縁部下の肩には結束第2種羽状縄文が施文され、胴部には横方向の貝殻条痕を下地に単軸絡条体1A類が縦に回転施文される。その単位の長さから原体の軸の直径は約1.5cmである。内面はよく磨かれ、口縁部付近は横方向、以下は縦方向で、光沢がある。20・21は2本1組の横走縄線に斜めの短縄線が充填される。20の地文は多軸絡条体回転文である。22～24は表面の風化が激しい。23は一部縄線が確認でき、24bは横位の貝殻条痕文の下地に逆撫り2本1組の単軸絡条体1類回転文が縦位に施文される。25は縄線で菱形文とその内部に短縄線が充填され、胴部には横位の結束第1種羽状縄文と縦位の自縄自巻縄文が多段に施文される。26～28は円筒下層d1またはd2式の胴部片である。26は横位の貝殻条痕と逆撫り2本1組の単軸絡条体1類、27は横位の結束2種羽状縄文と自縄自巻縄文がそれぞれ多段に施文される。28は25と同様で、同一個体の可能性がある。29～33は底部で、29・30・32・33は縦位の単軸絡条体1類が施され、29は底部付近に横位の単軸絡条体1類が重ねられ、32には横位の結束第2種羽状縄文が多段に施文される。31は自縄自巻縄文である。30・31は軽く上げ底で、底面にも側面と同一原体で施文される。29～31は円筒下層b1～c式、32・33は円筒下層d1～d2式である。

34a・bは擦切土製品。同一個体の深鉢を3～4cm幅の短冊状に切断したものである。34aの裏面に

は溝が残る。口縁部文様は風化により不明瞭であるが、胴部には多軸絡条体が施文され、内面はよく磨かれる。円筒下層 d1 式。35 は土製円盤。底部素材で、底面には原体不明だが、地文がある。円筒下層 b1 ~ c 式。

36 ~ 38 はⅢ群 b 類。36 は波状口縁の頂部から縦の貼付があり、LR 斜行縄文地に縄線が 3 条施される。37 は口縁部が軽く外反し、斜めの単軸絡条体 1 類が施文される。38 は口縁部に縄線が 1 条横環する。石器：39 ~ 41 は石鏃で、39 は I b 類、40 は II a 類、41 は II b 類である。40 の基部にはアスファルトの付着が見られる。42 ~ 43 は石槍。42 は薄い縦長剥片素材。43 はめのう製で、横長剥片素材。44 ~ 47 は両面調整石器。44 は薄く細長い。45 は 7 cm 程の紡錘形の亜角礫素材で、先端部のみ加工がある。46 は大型の破損品で、粗い剥離面で覆われる。47 は両面に原礫面または原礫面に近い面が残り、一回り大きい程度の原石素材である。先端部が折れている。48 ~ 50 は籠状石器。48 ~ 49 は 15 cm 前後の大型品で、端部は 48 ~ 50 がやや丸みを帯び、49 は斜めに傾く。50 は下端からの剥離で折損している。51 ~ 55 はつまみ付きナイフ。51 ~ 53 は縦長で、縁辺のみ加工があり、51 ~ 52 には縁辺には光沢がある。54 は黒曜石製で、産地分析で「出来島」産と判定された (K04-X2)。背面に転礫面がある小型の剥片素材である。55 は反りのある小型の寸詰まりの剥片素材で、周縁に加工が施される。56 ~ 60 はスクレイパー。56 ~ 58 は I b 類、59 は II 類、60 は VI 類である。57 ~ 59 は反りがほとんどない素材である。全体的に押圧剥離状の薄い剥離で加工され、光沢が認められる。61 ~ 77 は石核。61 ~ 62 は I a 類、63 ~ 65 は I b 類、66 ~ 71 は II a 類、72 ~ 74 は IV 類、75 ~ 77 は VII 類、76 は II a 類に近い。61 は小口面で、62 ~ 65 は平坦な面で縦長剥片が剥離される。下面からの剥離のある石核は作業面の側面形が直線的で、目的剥片も縦断面の反りが少ない。求心状の作業面を持つ 66 ~ 71 は短寸の剥片や斜軸剥片が剥離される。68 は 5 cm 程の小型原石が利用される。72 ~ 74 は打面と作業面を入れ替える交互剥離によって幅広で末端が反りのある剥片が剥離される。76 は両面の剥離が進行し、77 は 3 ~ 4 回の剥離で遺棄される。78 ~ 79 は石斧。78 はミニチュア石器、軟質の素材でほぼ全面研磨される。79 は未完成品で、裏面が剥離面の楕円形の素材で周縁部が剥離・敲打によって整形される。素材形状を変えるまでは加工されずに遺棄される。80 は北海道式石冠で、下面からの力により裏面を大きく欠損している。82 ~ 85 は扁平打製石器。82 は II 類、83 ~ 84 は III 類、85 は IV 類。全て扁平な礫素材。直線的な下縁に一部幅の狭い平坦面が残るものがある。83 は折損後、大きい方の破片に再加工または使用による変形が認められる。85 は折損後、右側の破片が再利用される。81 ~ 86 ~ 87 はすり石。81 は I a 類、86 は I b 類、87 は II 類である。81 は剥片が接合し、両端部の打ち欠き、下面からの剥離（剥落）後に 81b が剥離（剥落）する。図ではわかりにくいが、本体 (81c) と 81b の打面には段差があり、81b 剥離後、敲打等の使用を継続したことにより下縁がすり減ったものと推定される。剥片 (81b) は H-8 の覆土と I78 区から出土し、本体 (81c) は H-4 の窪みに廃棄された可能性がある。86 は左右両端の敲打痕に比べ下面の平坦面は小さく、使用の頻度は少ない。87 は多孔質な石材で、両面の剥離は見られない。88 ~ 90 はたたき石。88 ~ 89 は III 類。88 は頁岩製で、縁辺が広く潰れる。89 は凸部に敲打痕がある。90 は I c 類で、左右側縁の機能部は下部よりに位置し、どちらも内湾する。91 は上部を欠損した石皿。正面に幅の狭い 2 条、裏面に幅広の 1 条のすり面が長軸方向に残る。92 は磨製礫。軟質の泥岩製で、楕円礫の周辺を研磨している。石のみの未完成品か。

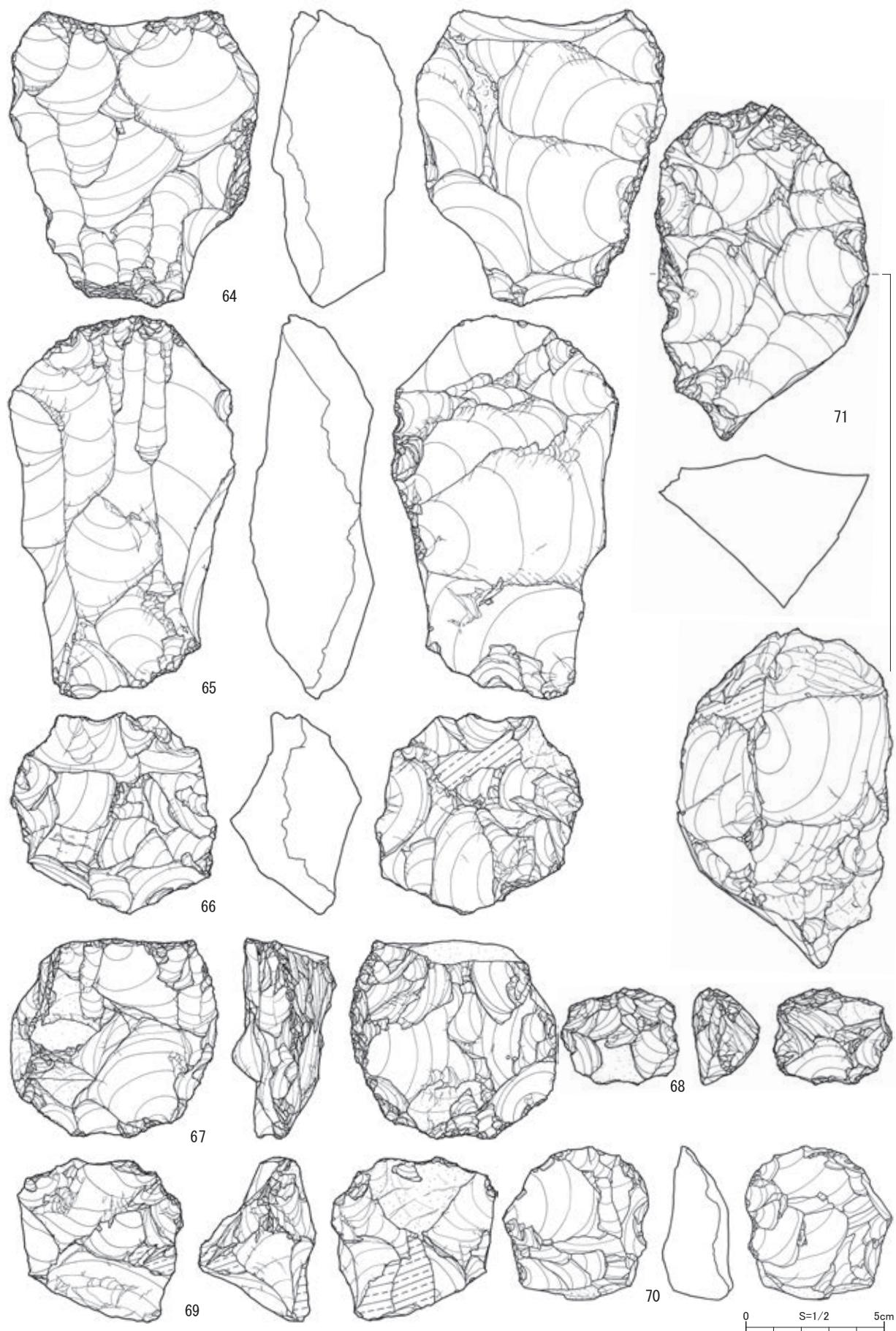
93 ~ 94 は接合資料。93 (母岩 1・接合 71) は 14.9 × 13.1 × 8.2 cm。あばた状の凹凸のある原礫面で覆われるノジュール状の扁平な円礫素材で、原石の形状で搬入される。両面で主に左右側縁から剥離が行われ、石核は原石形状を相似的に小型化したようなディスク状に変化したものとみられる。94 (母岩 2・接合 74) は 14.1 × 10.7 × 7.0 cm。砂の凝集した面と平滑な原礫面に覆われたノジュール



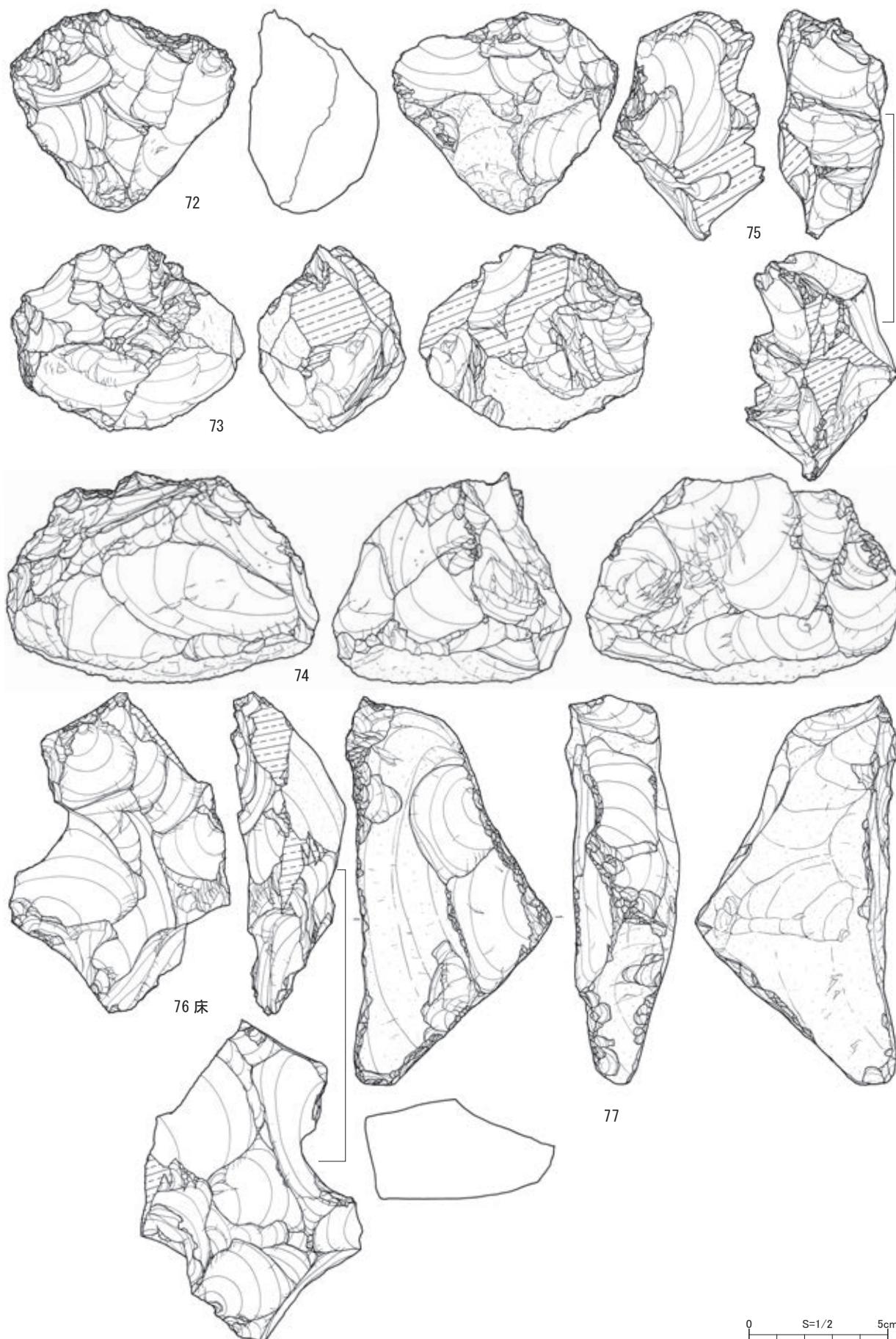
図VI-33 積穴住居跡 (32) H-4 (8)



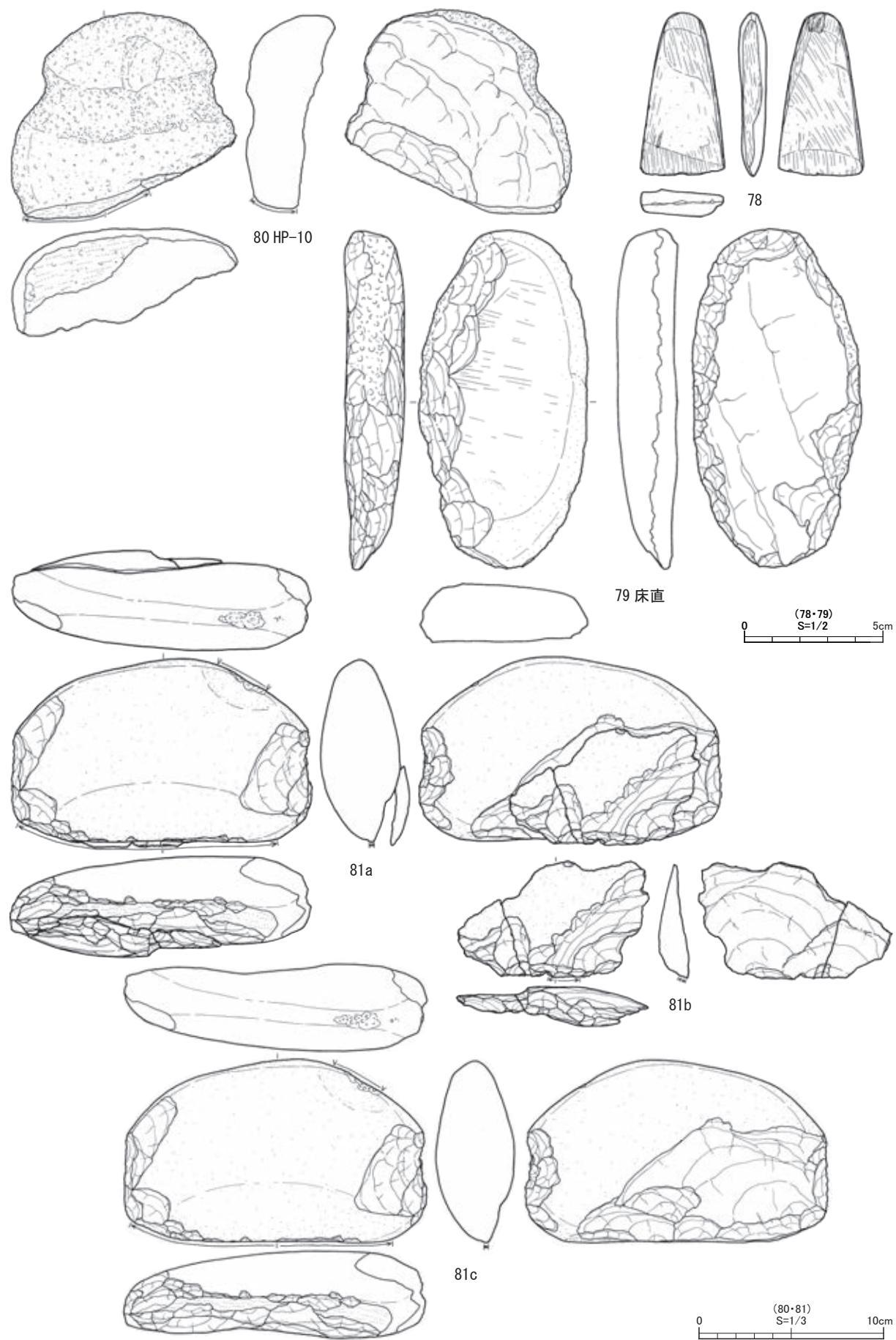
図VI-34 竪穴住居跡 (33) H-4 (9)



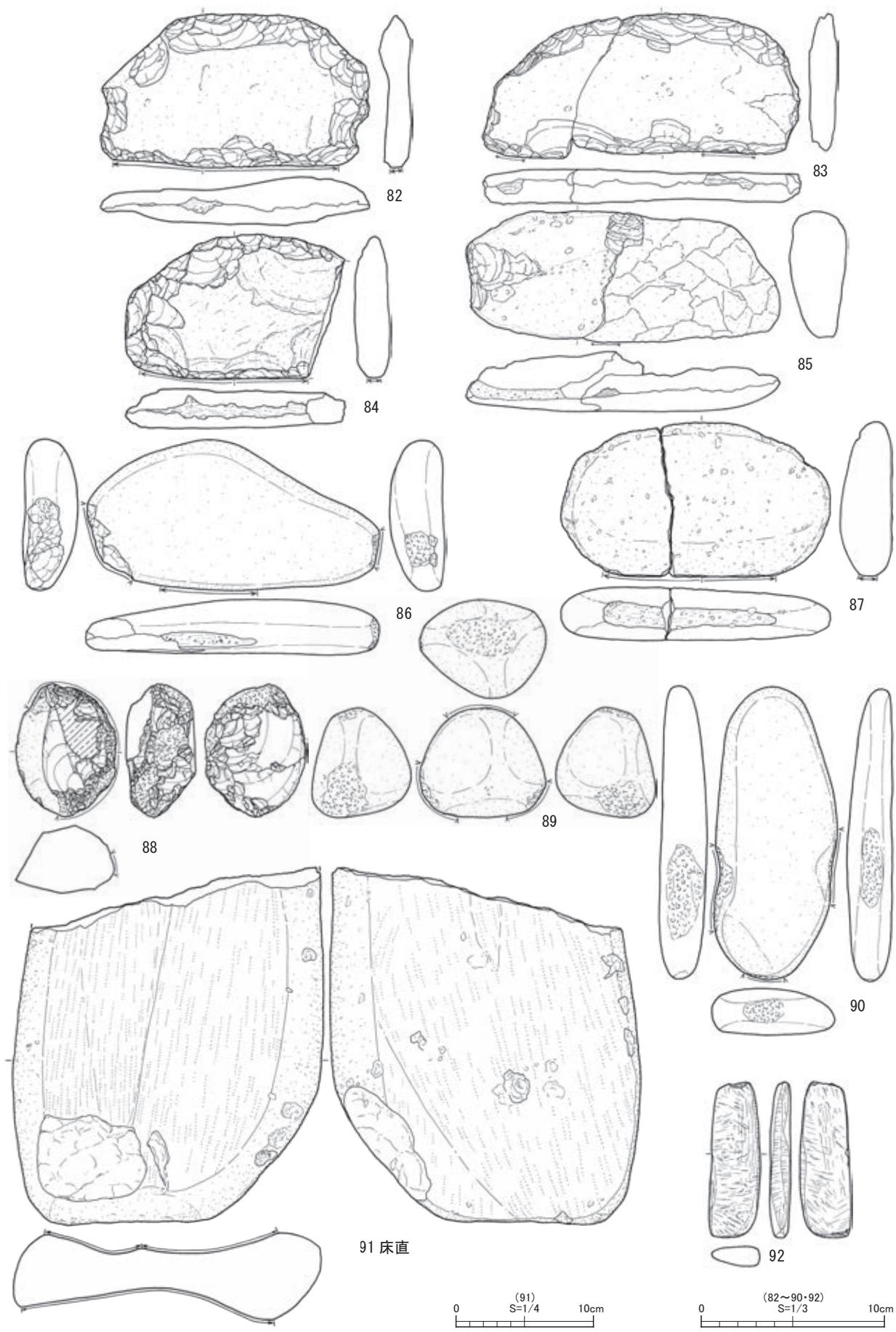
図VI-35 穫穴住居跡 (34) H-4(10)



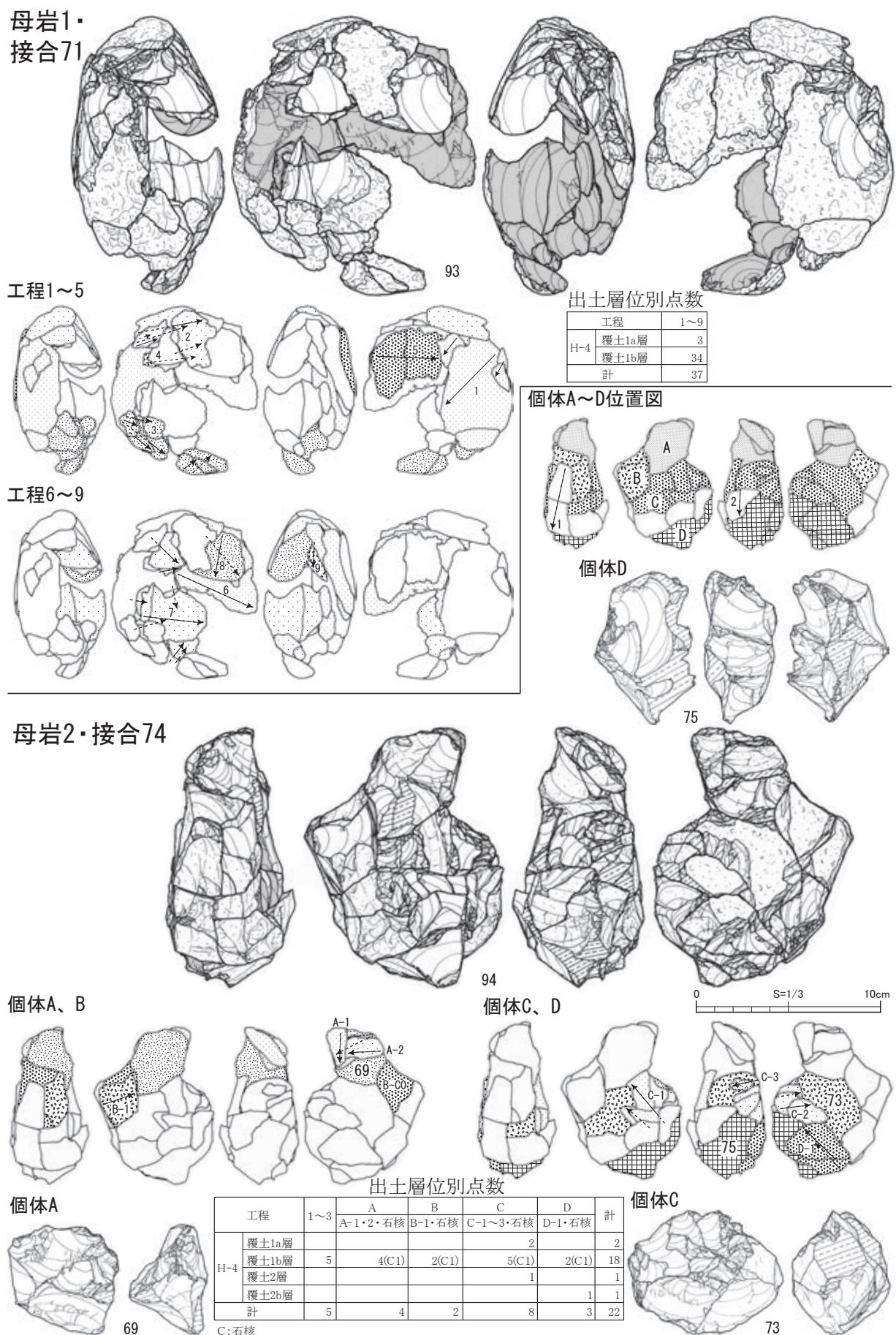
図VI-36 穫穴住居跡 (35) H-4(11)



図VI-37 竪穴住居跡 (36) H-4 (12)



図VI-38 穫穴住居跡 (37) H-4 (13)



図VI-39 竪穴住居跡 (38) H-4 (14)

状の扁平礫素材で、原石の形状で搬入される。左側面での上からの剥離（工程1）の後、内部の節理面で分割された素材4個体（個体A～D）でそれぞれ小型の剥片剥離が行われるが、それほど頻度は高くなく、廃棄される。

（鈴木）

豊穴住居跡5（H-5）（図VI-40～51、表VI-2、図版40～43・51）

確認・調査：C地区中央の標高22～23mの低位部に位置する。II層除去後、III層上部で斜面下の沢と並行する長軸をもつ黒褐色土の広がりを確認した。堆積状況・下端・壁面確認のため、黒褐色土範囲の中央で交差するトレンチを設定した。断面を確認したところ、黒褐色土を最下層とする床面と壁面を確認し、豊穴住居と判断した。また、覆土1層下部で焼土（HF-1）を検出した。周囲に遺物の集中もみられたことから（図VI-42）、住居の埋没過程の窪みを利用した後世の居住跡と思われる。土層観察用のベルトを2本設定し、トレンチにより確認済みの下端・壁面から平面形を想定して、覆土1層下部の居住跡を調査後、豊穴内の調査を開始した。

土層：覆土は床面の中央や壁際の一部に黒褐色土（覆土8）が薄く堆積し、北側の壁際には褐色土（覆土7）の三角堆積がみられる。それらの上位をにぶい黄褐色土（覆土6）が広く覆う。斜面上部からのM層の流れ込みの可能性がある。覆土6の上位には黒褐色土（覆土1・2・5）が厚く堆積している。覆土1・5に挟まれる形でHF-1（覆土3）と焼土に関連する極暗褐色土（覆土4）がみられた。

床面・壁：床面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。北側が緩斜面となっているため、北側の壁は50cm程度と比較的深く、沢に面した南側の壁は薄く15cm前後となっている。

付属遺構：付属遺構はHP-1～24とHF-1・2、HSC-1である。主柱穴はHP-1・2・3・6の四本柱とみられ、長方形に配置されている。主柱穴の内側の範囲にその他のHPの大半が検出された。特徴的なものとして径15cm程の細いもの（HP-7・11～18・24）、バケツ形に上方が開くもの（HP-4・5・10・20～22）、浅い皿状のもの（HP-8・23）が存在する。なお、HP-19は砂ピットである。また、HP-21～23はHF-2の下位から検出された。

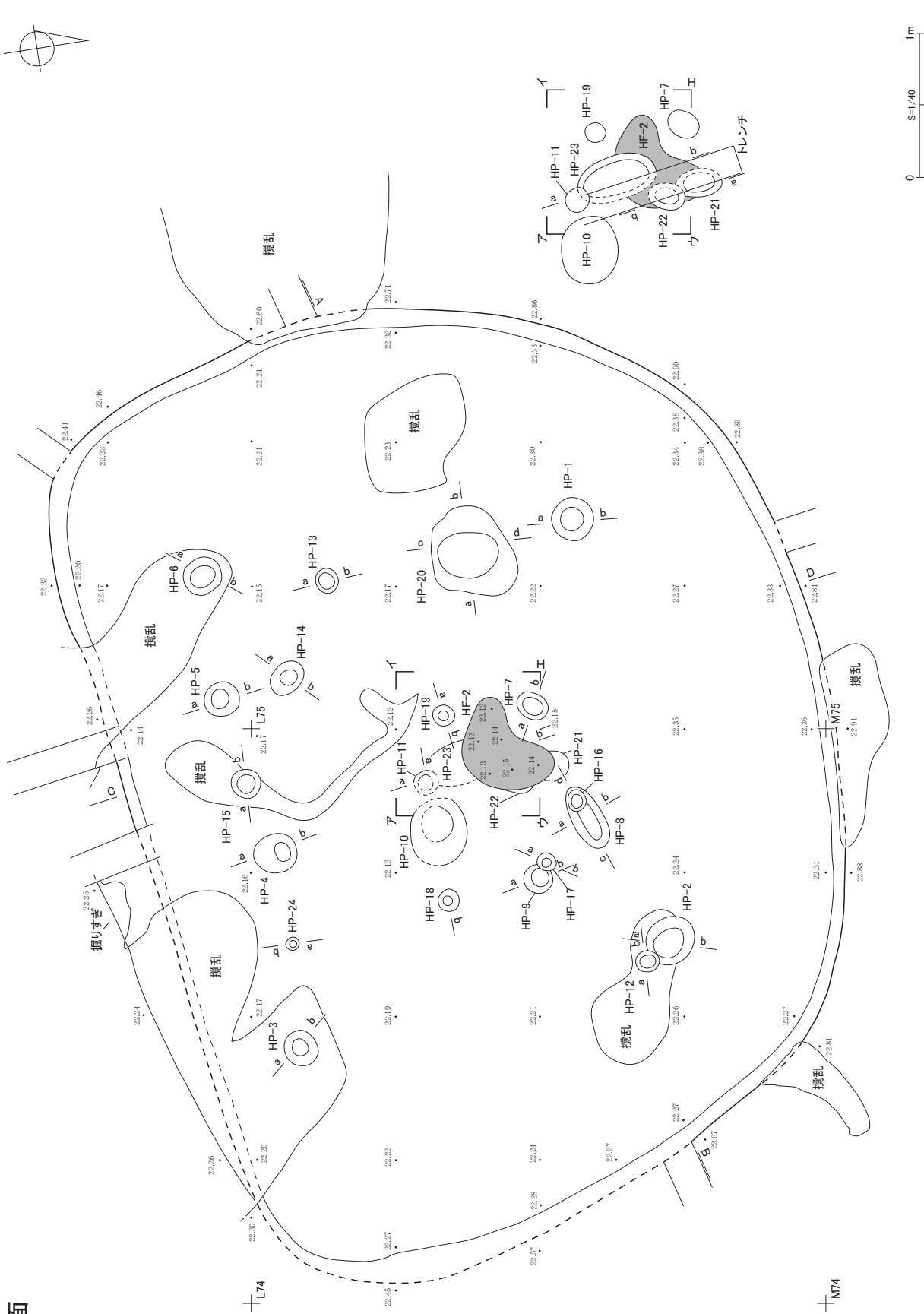
HF-2は中央の床面から検出された不整橢円形の地床炉である。黒褐色土中に焼土粒と炭化物粒を多く含むのが特徴で、焼土形成後に攪拌を受けたような状況である。HF-1は覆土1層下部から南北に細長い形状で検出された地床炉である。焼土の上面に接して5cm前後の被熱した円礫を主体とするHSC-1がみられた。両者は関連する遺構と考えられる。また、HF-1、HSC-1と同時期のHPも存在すると思われるが、覆土中からの掘り込みは確認されず、配置状況や付属遺構の規模・覆土から関連するHPを抽出することはできなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数は4,415点で、土器等が1,418点、石器等が2,997点である。土器等はII群b類345点、III群a類61点、III群b類935点、IV群a類60点、時期不明16点、焼成粘土塊1点が、石器等は石鏃5点、石槍9点、両面調整石器18点、つまみ付きナイフ2点、スクレイパー47点、石錐2点、Rフレイク38点、Uフレイク17点、剥片1,240点、石核20点、石斧1点、北海道式石冠5点、扁平打製石器8点、すり石13点、たたき石11点、台石4点、原石17点、加工痕のある礫5点、礫1,535点が出土した。

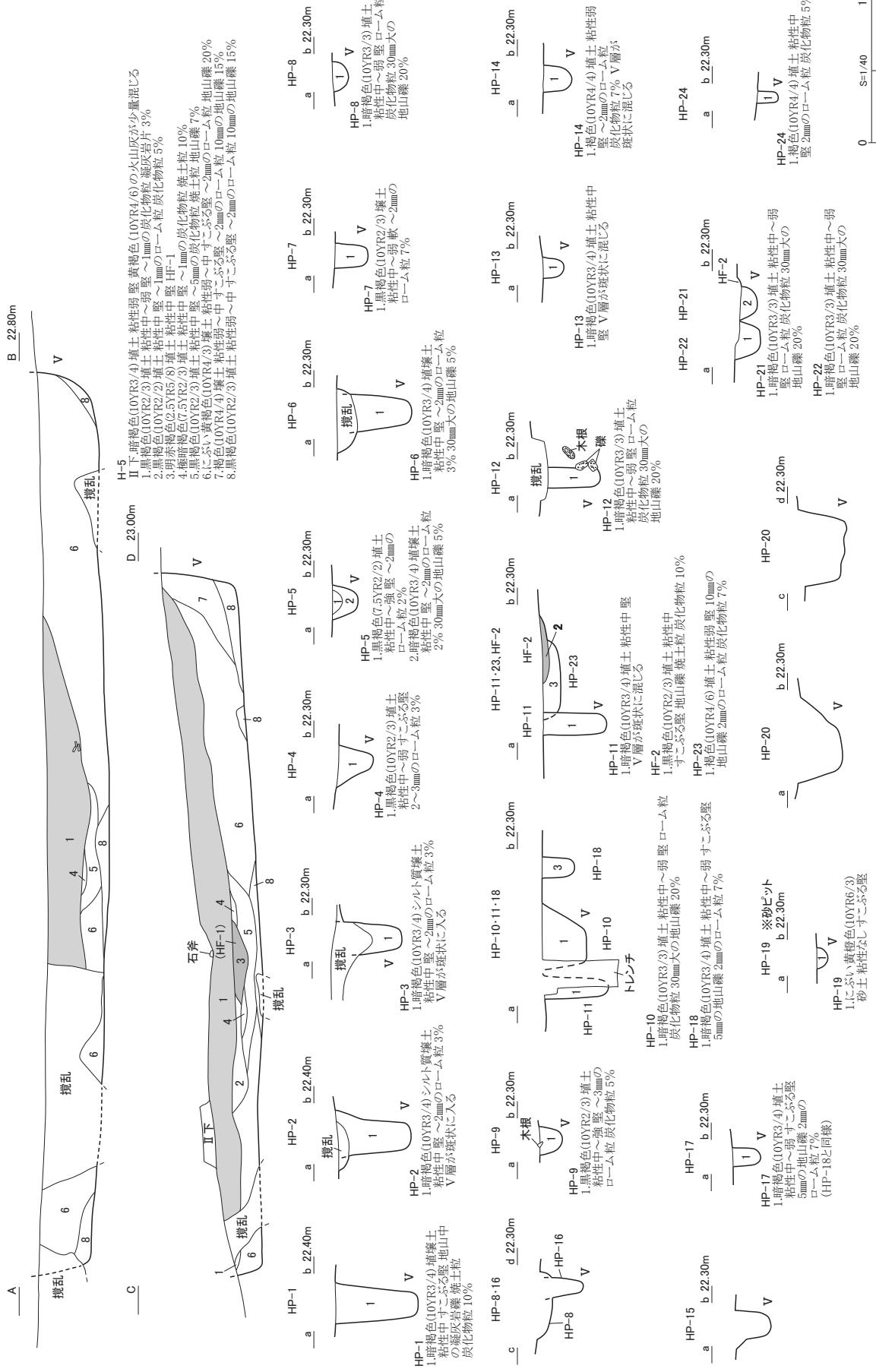
時期：覆土中にあるHF-1の炭化物は4,260±30yrBP（K04-D7）、床面にあるHF-2の炭化物は4,130±30yrBP（K04-D8）の年代値が得られている。後者は新しい値で直ちに採用できない。床面出土遺物および砂ピット、M層の可能性のある覆土の存在から住居の帰属時期は縄文時代前期後半と考えられる。また、埋没過程で形成されたHF-1を中心とする遺物のまとめは年代値と周辺の同層序の遺物から縄文時代中期後半榎林式期の居住跡と思われる。

（直江）

掲載出土遺物：（図VI-44-1～図VI-51-85、図版179～182）

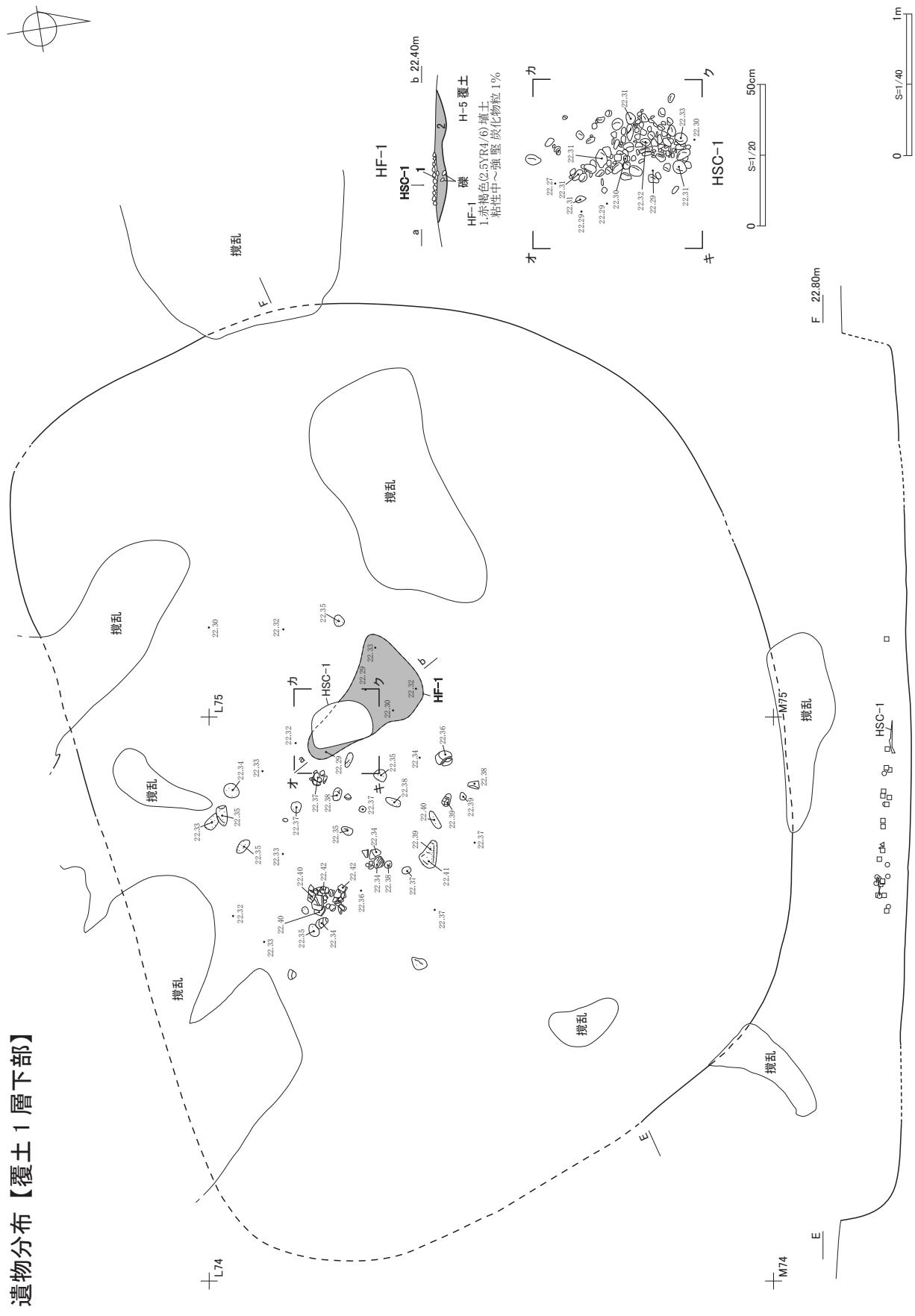


図VI-40 積穴住居跡 (39) H-5(1)



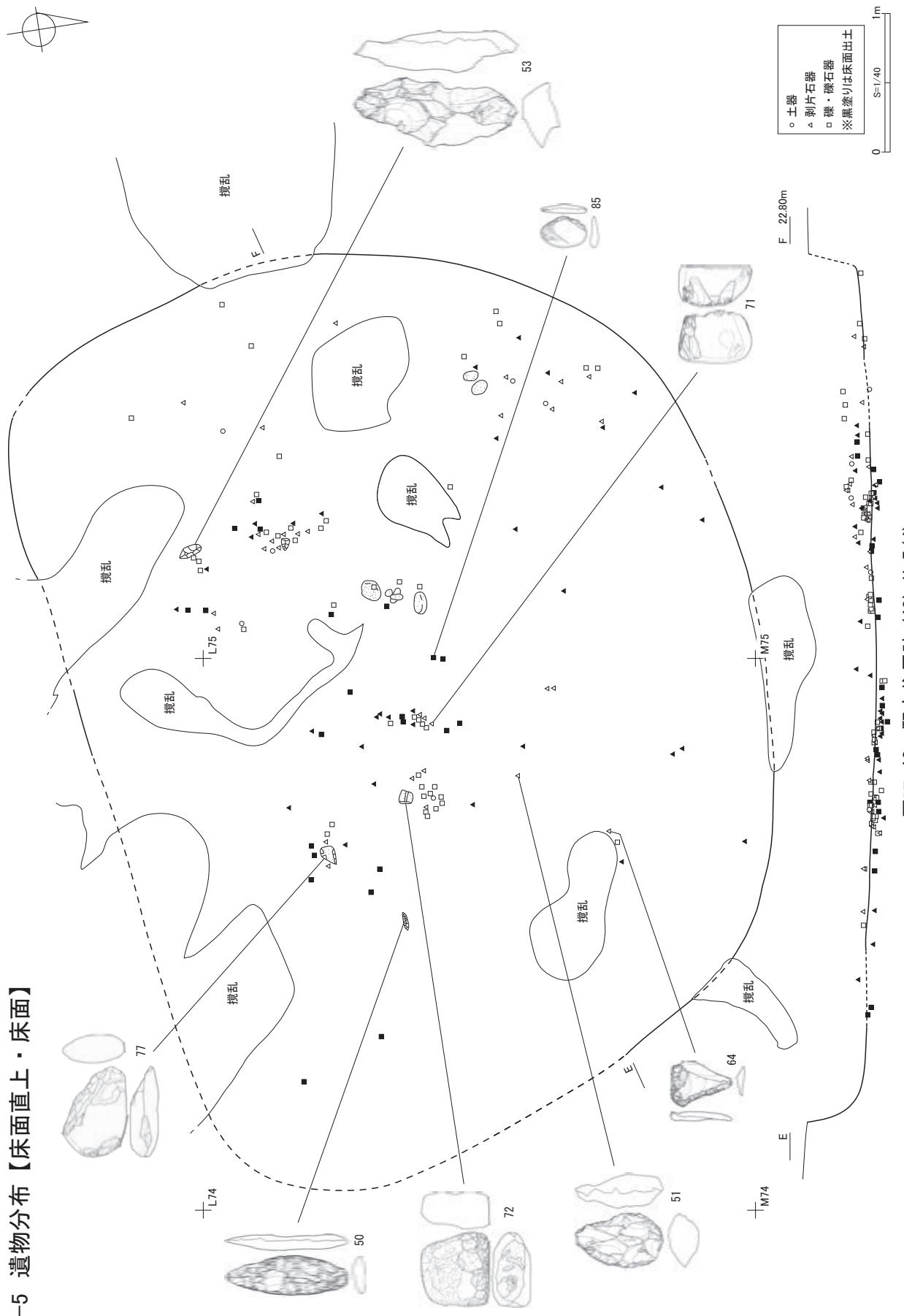
図VI-41 積穴住居跡 (40) H-5 (2)

H-5 遺物分布【覆土1層下部】



図VI-42 積穴住居跡 (41) H-5(3)

H-5 遺物分布【床面直上・床面】



図VI-43 竪穴住居跡 (42) H-5 (4)

土器：1～5はII群b類。1・2は円筒下層b1～b2式。不整綾絡文が施され、2は隆帶と沈線で区画される。3は結束縄文で区画された口縁部に平行縄線が巡る円筒下層d1式。4は平行縄線のある波状口縁部で、口唇と肩部に半裁竹管状工具による刺突が施される。胴部にはやや間隔の広い櫛歯状工具による条痕文が見られる。円筒下層d1～d2式。5は貝殻条痕と結束1種羽状縄文が施文される。円筒下層c式。6～10はIII群a類。6は結束第2種、9は結束第1種羽状縄文、8は綾絡文が施され、6は平坦な口唇部に刻み、8・9は斜めの口唇部に縄の側面圧痕が押捺される。8は先の尖る山形突起部で、縦の貼付がある。7は菱形の沈線が描かれ、先端がくぼむ小型筒状の山形突起には縄線が施文され、突起下には貼付の痕跡がある。サイベ沢VII式。10は無文の底部片で、底角が張り出す。11～41はIII群b類で、榎林式相当。11・14～22は沈線または刺突のあるものである。11は胴が膨らみ、頸部がくびれて、口縁部が直線的に外傾する。幅2cmほどの口縁部無文帶は断面三角形で厚みがあり、3単位の波状を呈し、波頂部下には円形文が配され、上下左右に沈線が伸びる。円形文の間には小型の渦巻きが2つ描かれ、さらに下方に沈線が垂下する。地文はLR斜行縄文で、口縁部肥厚帶の整形後、施文される。14～17は平行沈線と短沈線または刺突が組み合うものである。14は大型の深鉢で、波状口縁の間に小突起があり、口縁に沿って3条の沈線が施される。胴上部には円形文と縦横の沈線が描かれる。地文はRLR斜行縄文である。15は口縁部から頸部にかけて沈線と短沈線が交互に施文され、円形刺突が充填された円形文の下部にはV字状の沈線が垂下する。地文は単軸絡条体1類である。16は小突起のある口縁部で縦の貼付に斜め下方から刺突される。17は中空の工具によるやや深い円形刺突が沈線間に施される。18は2列の胴上部に刺突列があり、一部縦の沈線が見られる。19は沈線で区画された口縁部に楕円ないし途切れた沈線が施され、また、外傾接合が確認できる。20・21は口縁部に沈線が巡り、20は、口縁部が肥厚する。22は平行沈線下部に弧線文が描かれる。

12は口縁部に横位の縄線文が施される小型の深鉢で、底部から斜めにほぼ直線的に立ち上がる。13・32・33は櫛歯状工具による条痕文土器。13は底部から斜めにほぼ直線的に立ち上がる。3か所の小型の山形突起があり、厚手である。32は口唇部に中空工具による刺突が施される。23～29は縄文のみのもの。23～25は山形突起のある口縁部で、わずかに外反する。23・24はLR縄文の縦回転により条が横走し、23は縄文の間に縦方向の調整痕が残る。25はLR斜行縄文が施される。26は2個1組の山形突起があり、口縁部に1cm程の無文帶がある。LR原体の縦回転により条が斜行する。27は胴部が膨らみ、頸部がくびれて口縁部が外反する。口縁部破片が一部のみのため突起の有無は不明。28・29は胴部片。28はLR原体の斜回転による横走縄文、29は胴下部には櫛歯状工具による条痕文、その上部には条痕の上にLR斜行縄文が施される。29a・bの上部にはやや丸みを帯びた外傾接合面が観察できる。30・31は単軸絡条体1類が縦位に施文され、30の口唇部は厚みがあり、31には低い台形状突起がある。

33～41は底部片。底面は側面に比べ厚く、底角は直角ないしやや張り出すものが多い。34・36は上げ底で、36～40は内面が丸く椀状である。38・39は接合面があり、円形で板状の底面に側面から斜めに輪積みしており、そのため底角が直線的に立ち上がると考えられる。

42・43はIV群a類。42は天祐寺式。地文はRL縦回転によるもので、貼付上には同原体の横回転により羽状に表現される。貼付にはさらに中空工具による刺突が施される。43はミニチュア土器の高台とみられる。

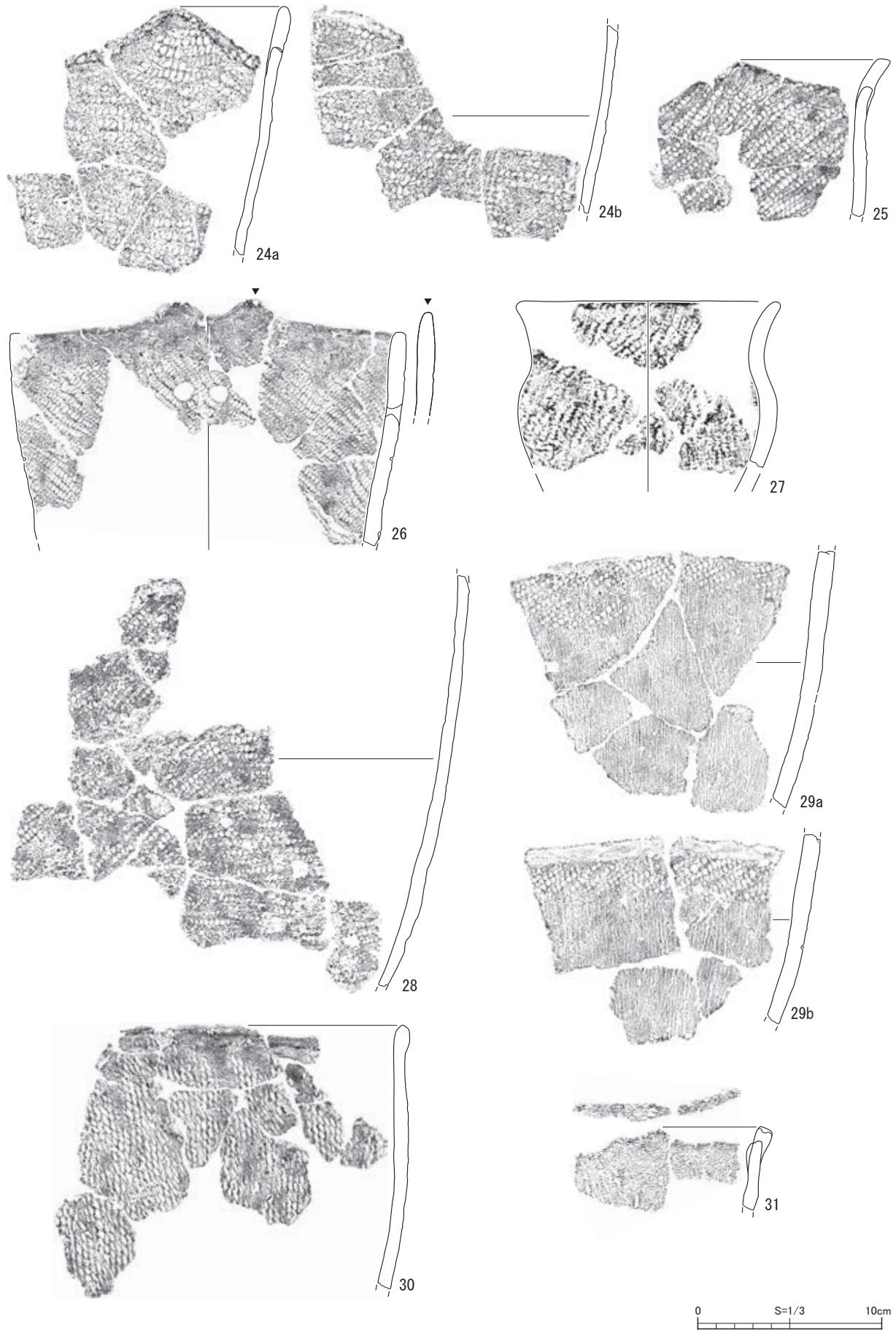
石器：44～47は石鏃。44はIa類、45～47はIIa類。48～50は石槍。48は細長い茎部があり、押圧剥離により側縁は鋸歯状である。先端部には摩耗が認められる。49は狭長かつ厚手で、剥離は粗い。50は平坦剥離で覆われ、正面左側縁には一部押圧とみられる剥離がある。51～54は両面調整



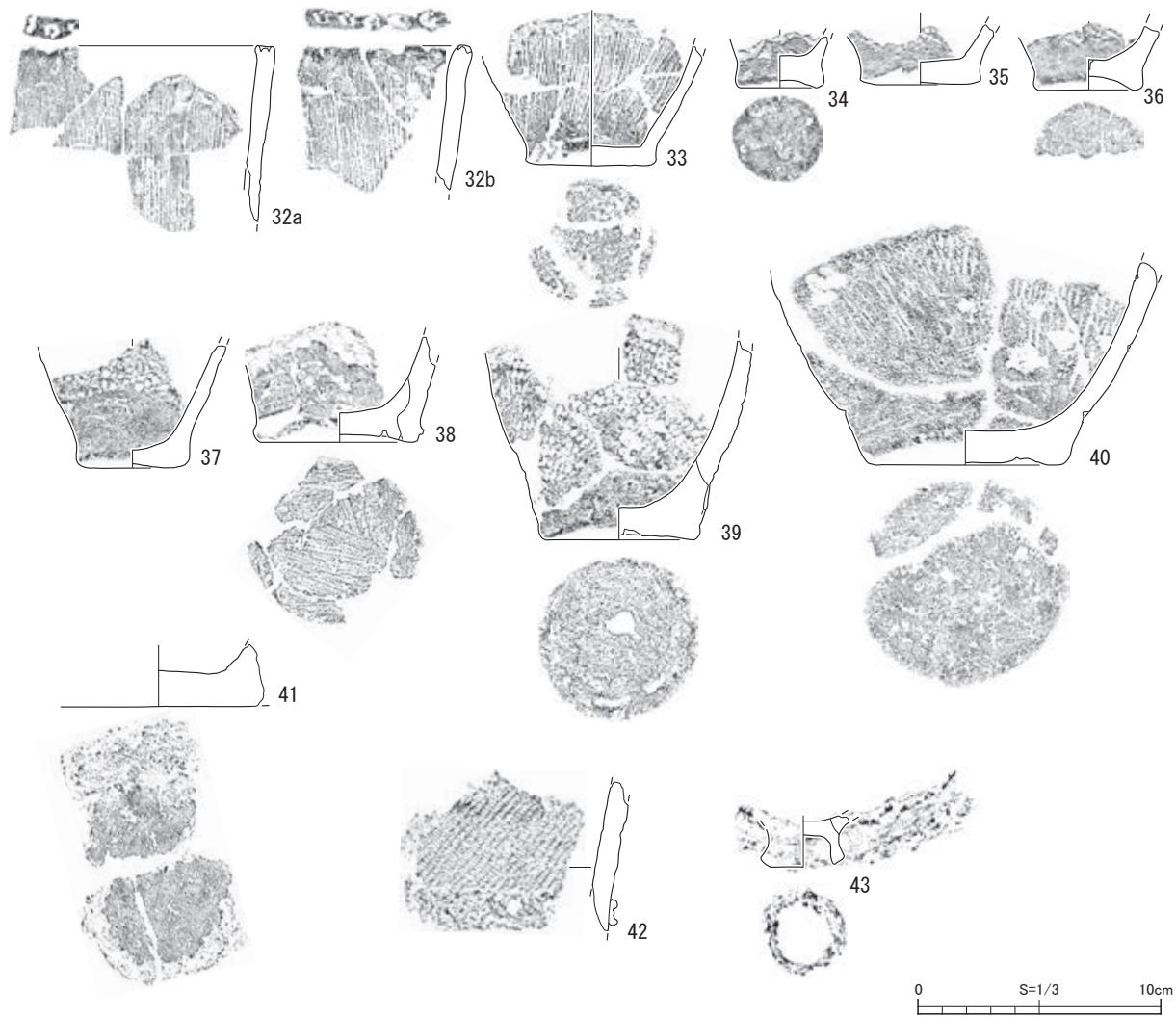
図VI-44 竪穴住居跡 (43) H-5 (5)



図VI-45 穫穴住居跡 (44) H-5 (6)

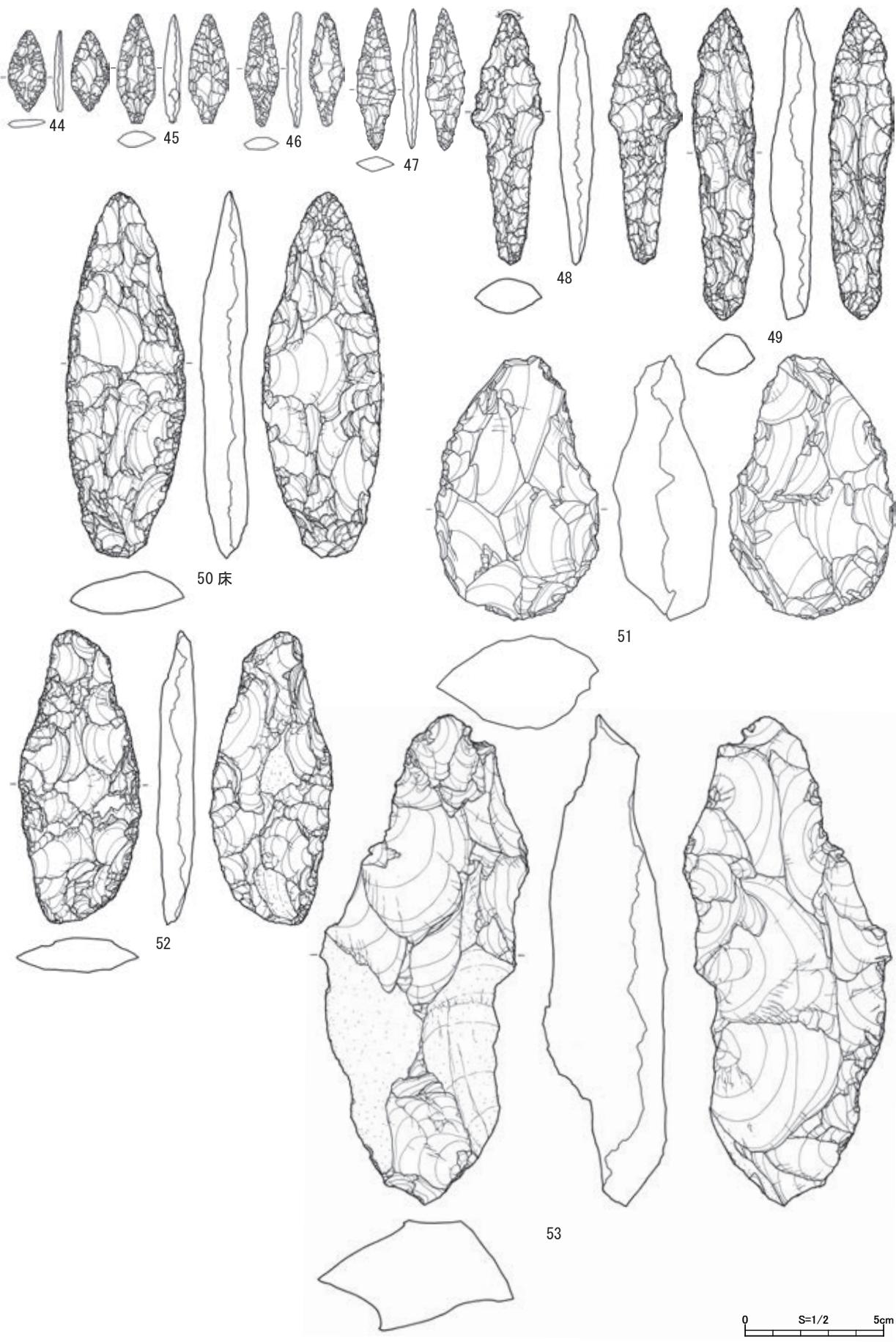


図VI-46 竪穴住居跡 (45) H-5(7)

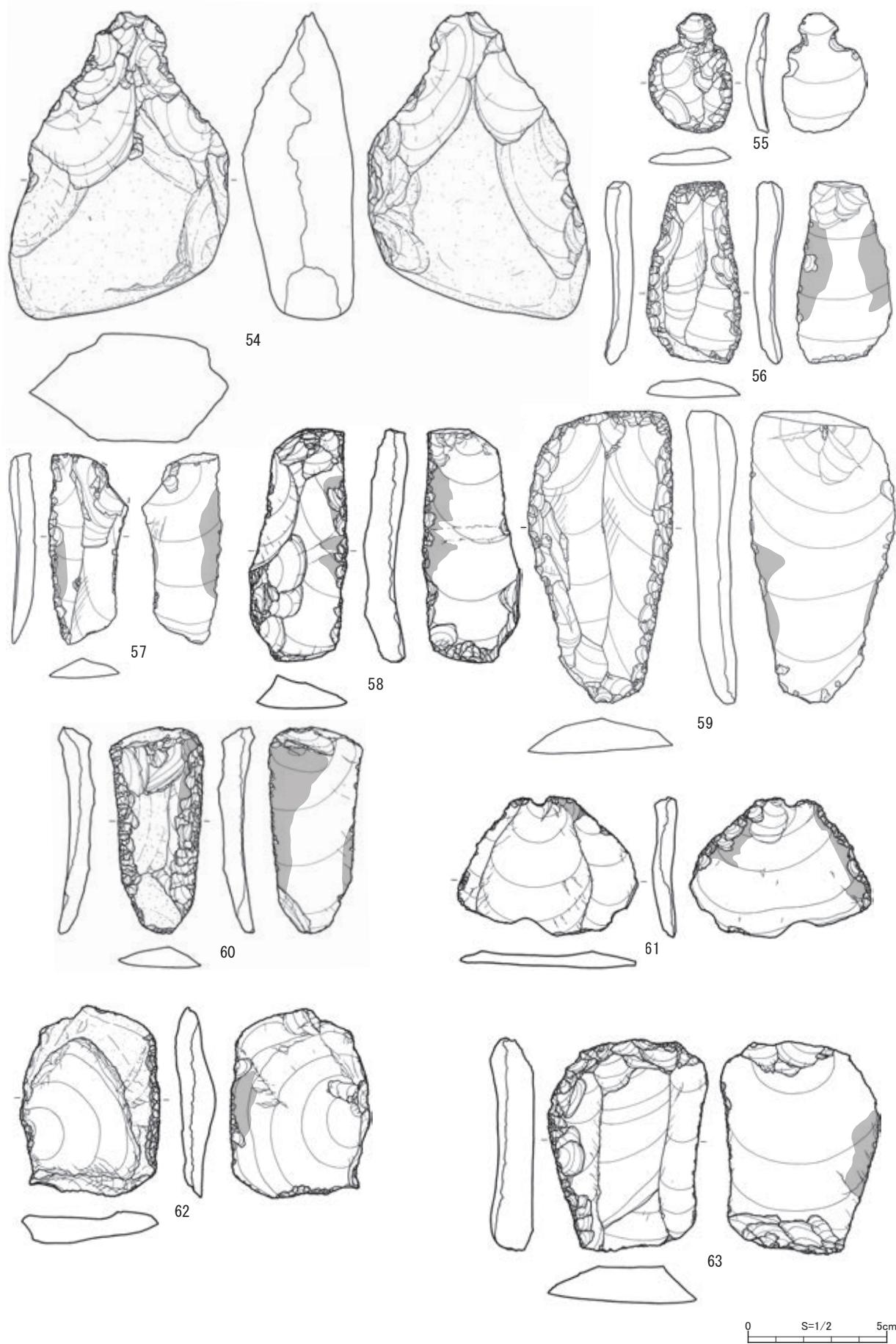


図VI-47 竪穴住居跡(46) H-5(8)

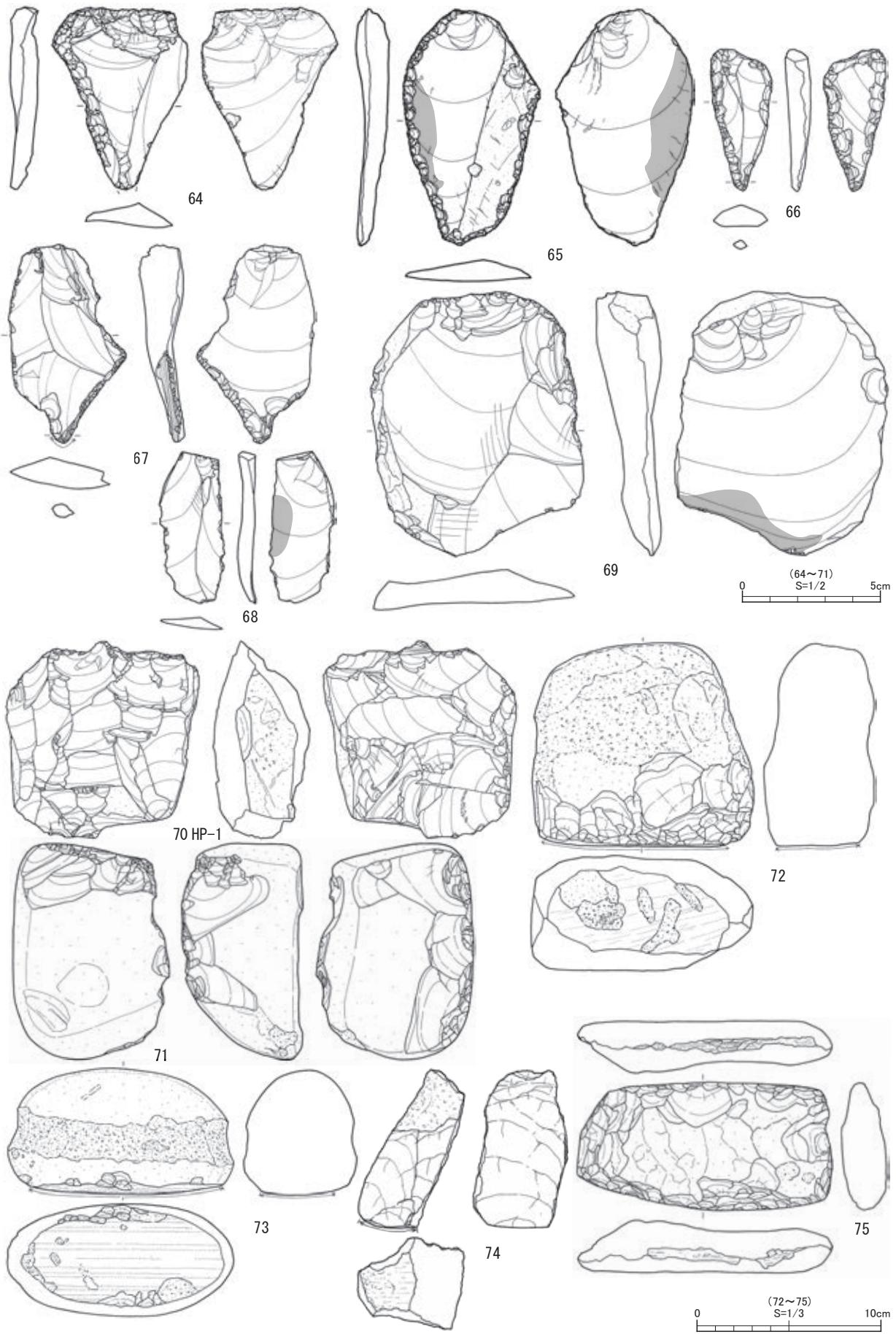
石器。51の加工は粗く、厚い。52は薄手で、平坦剥離に覆われる。53は角礫、54は転礫素材で、両者とも粗割り段階で遺棄される。55はつまみ付きナイフで、反りのある幅広の剥片素材である。56～65はスクレイパー。56～59はI a類、60はI b類、61～63はIV類、64・65はVI類である。素材は反りが少なく、58は腹面に末端部の反りを除去する加工がある。61・62は幅広の剥片素材であるが、61は側縁の短辺、62は末端の長辺に光沢があり、素材の使い方が異なる。63は先端部を切り取る加工が見られる。66・67は石錐で、機能部に摩耗が観察できる。66は斜軸の剥片素材、67は左側縁に軽度の光沢があり、スクレイパーと共に用いられている。68はUフレイク。右側縁に刃こぼれ状の微細剥離と光沢がある。69は厚手で大型の剥片。先端側に光沢がある。70・71は石核。70はI b類。71はVII類で、数回剥離されたのみである。72～74は北海道式石冠。72は左側面などを除いてほぼ全面敲打で整形され、下面に接する正・裏面には剥落が連続する。73は小型で、溝部のみ敲打整形され、それ以外は素材面が残る。縄文時代中期に相当するとみられる。74は破片で、本体側縁が使用（石皿への敲き）による衝撃で破損したと考えられる。75・76は扁平打製石器。75はIV類で、素材形状を大きく変えずに加工される。上下縁辺に敲打による細い平坦面が残る。76はIII類。77～81はすり石。77～79はI類、80はIII類、81はIV類。78は右側の破片のみ赤変し、折損後に被熱したとみられる。79は上縁からの剥離で折損している。81は下縁部が折れ面を境に段差となり、折損後、左破片が継続して使用されたものである。82～84はたたき石。82はI a2類、83はI a3類、84は



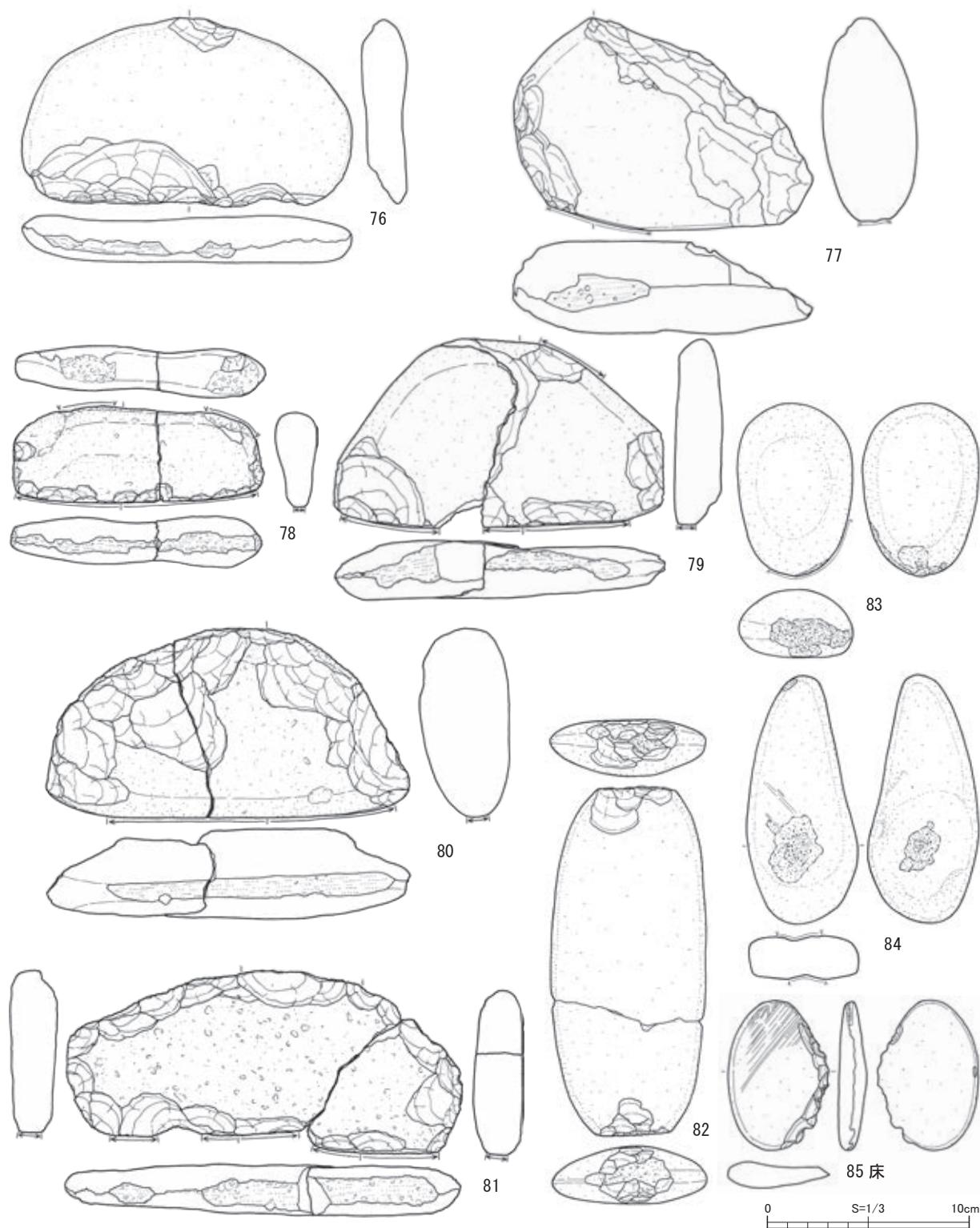
図VI-48 壇穴住居跡 (47) H-5(9)



図VI-49 積穴住居跡 (48) H-5 (10)



図VI-50 竪穴住居跡 (49) H-5 (11)



図VI-51 竪穴住居跡 (50) H-5 (12)

II b 類である。85 は加工痕のある礫。小型の楕円扁平礫の正面右側縁が鋸歯状に加工される。

(鈴木)

竪穴住居跡 6 (H-6) (図VI-52～57、表VI-2、図版44～46・51)

確認・調査：調査区中央部の標高 24.0m 付近、斜面部から低位部への移行部に位置する。N ラインメインセクションの N79 区土層断面観察で竪穴状の掘り込みを確認したため、MN78・79 区に遺構の存

在を想定し、便宜的に79ラインに沿ってA-Bの土層観察用ベルトを設定してトレンチ掘削を先行した。結果、明瞭な竪穴断面を確認したことからMN78・79区を慎重にⅢ下層まで掘り進め、同層中に暗褐色～黄褐色のM層と覆土の落ち込みを検出して遺構の平面形状を把握し、長軸方向にC-Dのベルトを設けた。竪穴上位のⅢ層からM層上面までを掘削する過程では、Ⅲ上2層でⅢ群b類土器のまとまりとHF-5を検出した。継続して覆土を掘削し床面と壁を検出した後、土層堆積状況を観察・記録した。その後ベルト除去と床面精査を行ない、付属遺構を検出・調査した。竪穴住居跡の平面形は隅丸方形もしくは橢円形、長軸は南西～北東方向、大きさは長軸4.8×短軸4.3mである。

土層：覆土は大きく上・中・下に分けられ、上部は自然堆積層のⅢ上1・2層、中部はM層、下部は流入土とみられる1・2・8～8'層および屋根土の崩落とみられる3～7層で構成される。Ⅲ層下部ではⅢ群b類土器がまとまって出土しており、下位のM層は中期後半以前の堆積と捉えられる。またM層は屋根土3～7層との間に10cmほどの自然堆積（1・2層）を挟むため、住居廃絶後一定期間を置いてM層が堆積したと考えられる。M層は埋没過程の竪穴の窪みを埋めるように堆積し、厚い箇所では40cm近い。流入土のうち8層は床面直上壁際に堆積するややしまりの弱い土で、住居廃絶直後に流入したとみられる。屋根土の3～7層はV層の黄褐色土を主体とし、床面直上を全体的に覆うように認められた。

全体の堆積過程を復元すると、①竪穴を構築し掘り上げ土を屋根土に利用する、②住居廃絶後に若干の流入土の堆積を挟んで屋根土が床面直上に崩落する、③流入土が一定期間自然堆積する、④竪穴の窪みを埋めるように盛土（M層）が形成される、⑤上部にⅢ層の黒色土の堆積が発達する、の推移が考えられる。

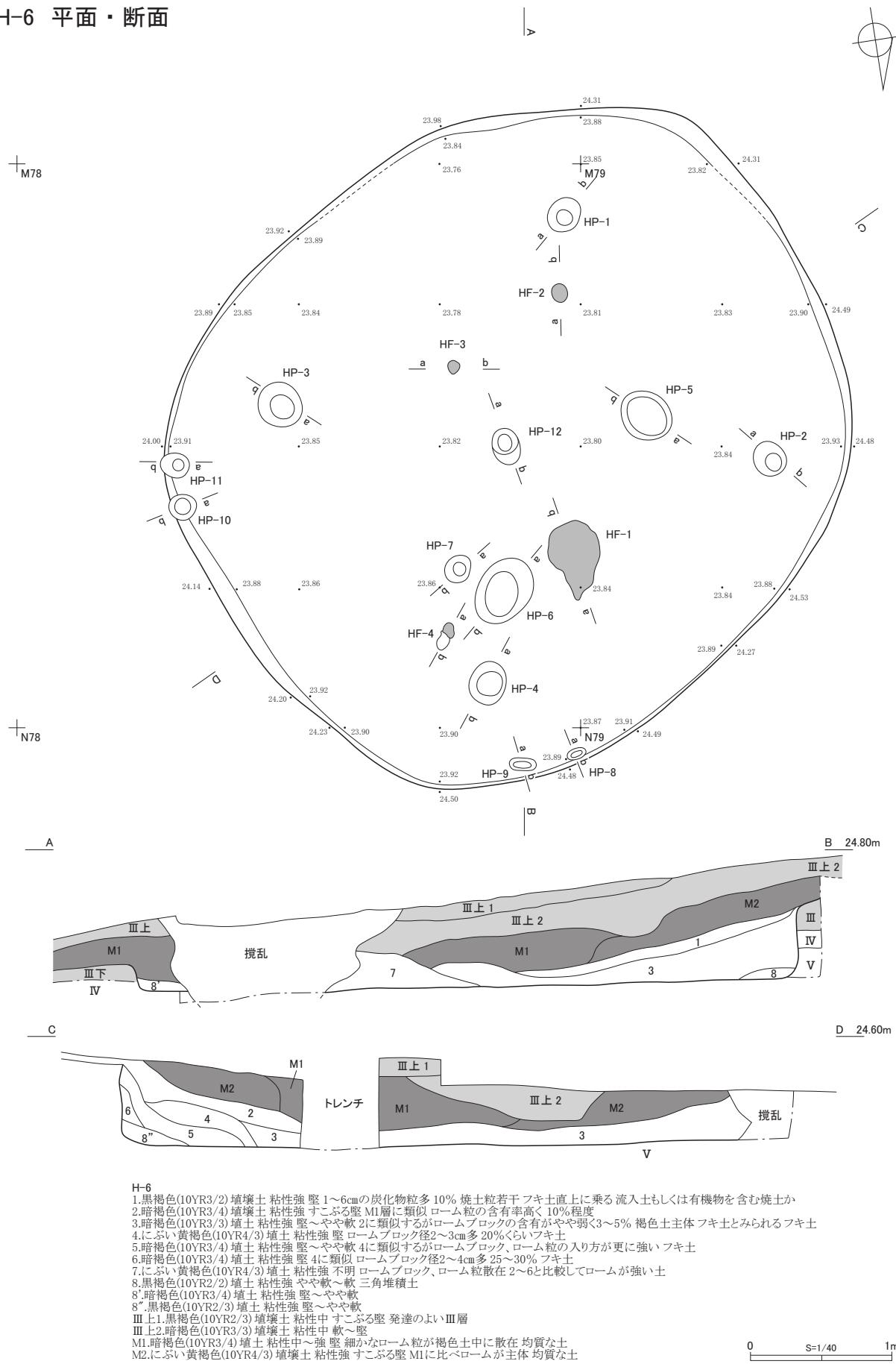
床面・壁：床面は概ね水平に構築されるが、壁付近で若干高くなる様子がみられる。壁は急角度で直角に近い立ち上がりである。また壁は北から東の高い箇所で0.5m前後、南から西の低い箇所では0.2mほどである。

付属遺構：付属遺構には主柱穴、壁柱穴、浅鉢状土坑、炉跡などがある。主柱穴は5基（HP-1～4・12）で、規模は径25～30cm、深さ40～60cmが主体だが、HP-1のみは深さ15cmで浅い。HP-2～4の掘り込みは漏斗状に近いが底面を持ち、やや内傾気味である。HP-1～4は長軸を対称軸に1辺約2.5mの正方形に配置され、HP-12がその中央に位置する。壁柱穴は4基（HP-8～11）で、東壁の南北隅に2基1対で配置されている。深さはHP-10・11が10cm、HP-8・9が5cm未満で、後者は非常に浅い。主柱穴で区画された内側には炉跡HF-1～4、浅鉢状土坑HP-5・6がある。炉跡はHF-1が長軸60cmと大型、HF-2～4が15cm未満の小型で、竪穴長軸から外れた箇所に散在するが、HF-1・3は概ね短軸上に位置している。浅鉢状土坑は深さ5cm程度で2基が長軸北側に配置されている。HP-6にはHF-1・4、柱穴状土坑HP-7が近接している。

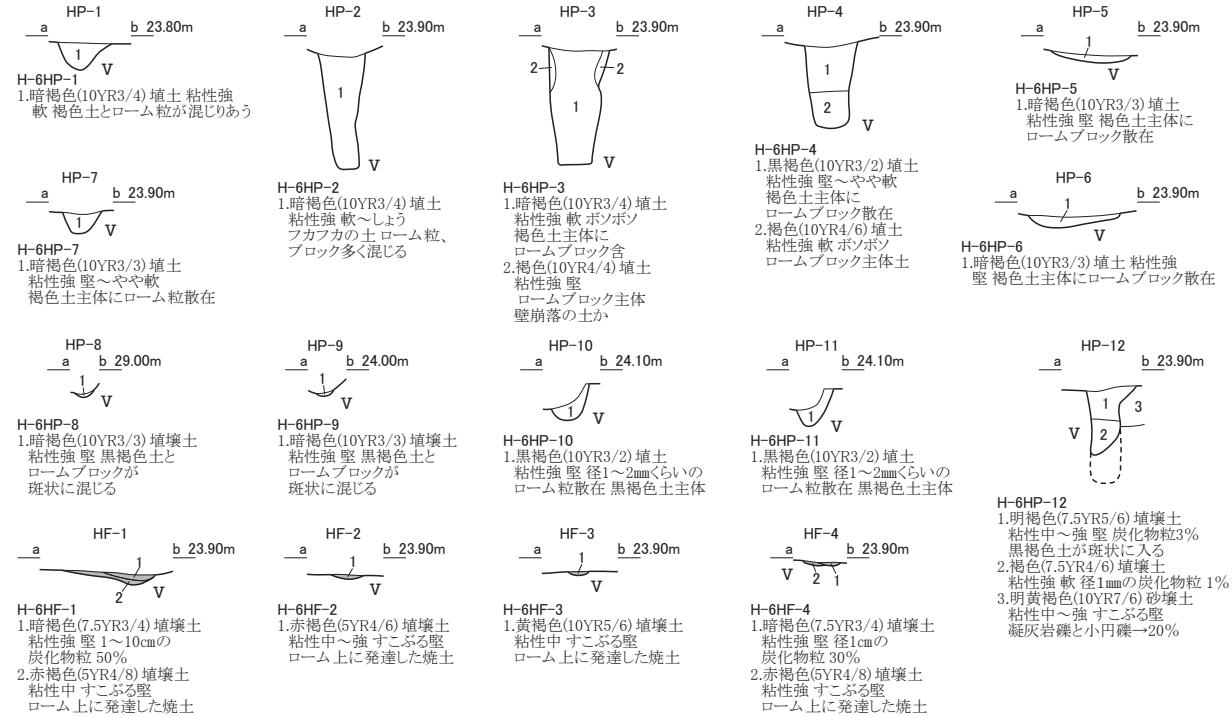
遺物出土状況：出土遺物の総数は1,405点で、土器等が306点、石器等が1,099点である。土器等はⅡ群b類137点、Ⅲ群a類1点、Ⅲ群b類164点、時期不明4点が、石器等は石鏃2点、石槍2点、両面調整石器10点、つまみ付きナイフ1点、スクレイパー8点、Rフレイク14点、Uフレイク1点、剥片911点、石核10点、石斧1点、石のみ1点、扁平打製石器5点、すり石3点、たたき石1点、くぼみ石1点、原石2点、礫126点が出土した。M層上位のⅢ層からはⅢ群b類土器がまとまって出土している。対してM層下位の覆土と床面の出土土器はⅡ群b類に限定される。

時期：床面からⅡ群b類土器が27点出土しており、細分されたものではⅡ群b-4類が2点ある。また床面検出のHF-1の燃焼材とみられる炭化物から4,660±30yrBP（K04-D9）、同じく床面検出のHF-4の燃焼材とみられる炭化物からは4,680±30yrBP（K04-D10）の年代測定値が得られている。遺

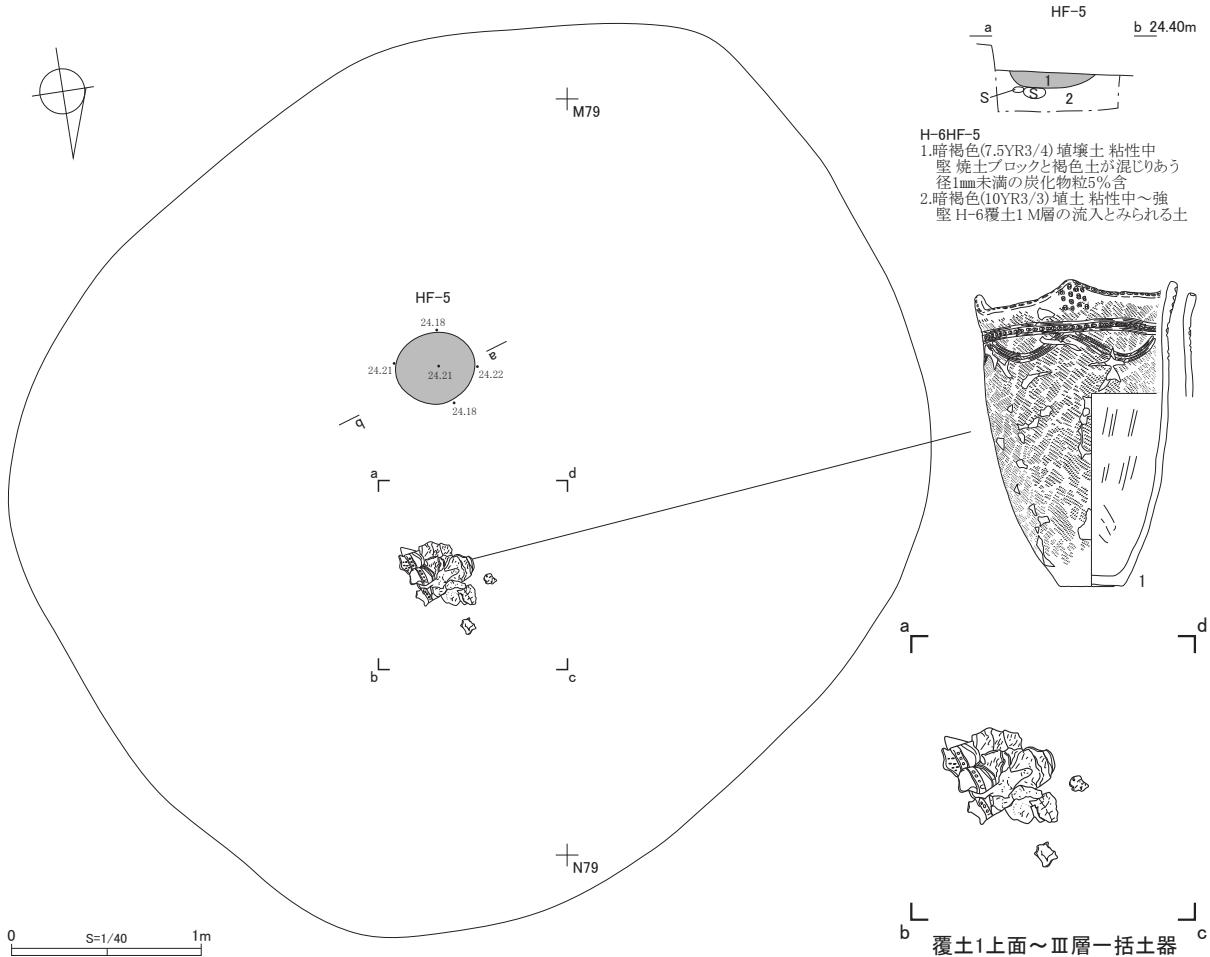
H-6 平面・断面



H-6 HP 断面

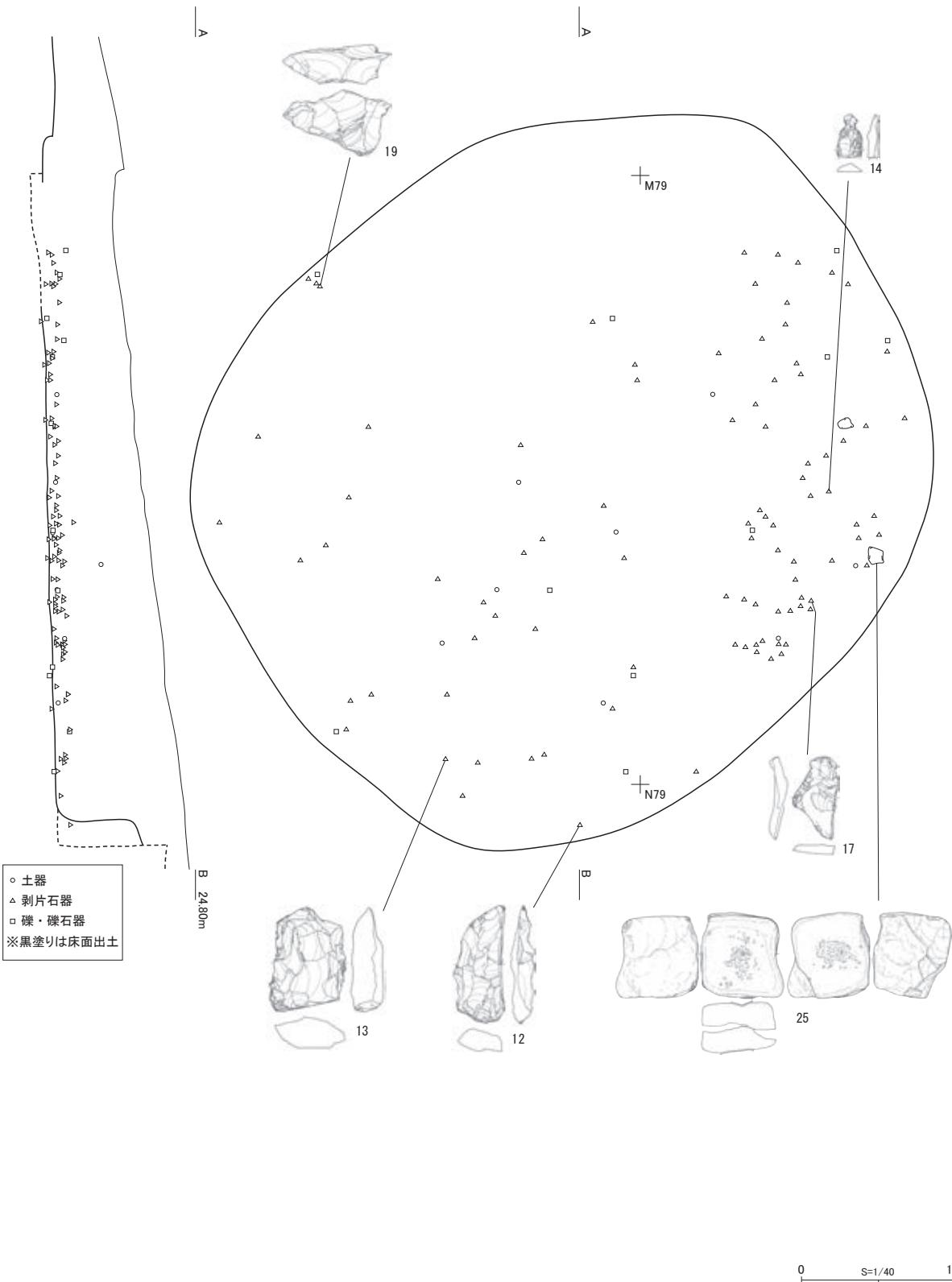


HF-5 平面・断面、覆土 1上面～Ⅲ層一括土器



図VI-53 壇穴住居跡(52) H-6(2)

H-6 遺物分布 【床面直上】



図VI-54 積穴住居跡 (53) H-6 (3)

H-6 遺物分布 【床面】



0 S=1/40 1m

図VI-55 壇穴住居跡 (54) H-6 (4)

物・年代測定値から縄文時代前期後半円筒下層 d1 式期と考えられる。 (坂本)

掲載出土遺物 : (図VI-56-1 ~ 図VI-57-25、図版 183)

土器 : 2 ~ 8 は II 群 b 類。2 は円筒下層 b1 ~ b2 式。不整綾絡文のある口縁部。3 ~ 5 は円筒下層 c ~ d1 式。3 は口縁部に貝殻条痕文が横方向に、胴部に単軸絡条体 1 類が縦に施文される。4 ~ 5 は自縄自巻 L 縦回転の胴部片で、5 には結束第 2 種回転縄文が加わる。6 は円筒下層 d1 式?。貝殻条痕の下地に単軸絡条体が縦回転で上書きされる。8 は円筒下層 d1 または d2 式の底部。多軸絡条体が施文される。

1 ~ 9 は III 群 b 類。1 は底部から斜めに立ち上がり、胴が膨らみ、少しくびれて口縁部は軽く外反する。4 か所の山形突起の下には 4 列の押引き状の刺突列が縦に施され、くびれ部には刺突列を挟んだ 2 本の沈線が横環し、その下には 2 本単位の連弧文が描かれる。口唇部にも押引き状の刺突文が見られる。地文は LR 縄文の縦回転により施文される。胎土に砂礫を含み、重量感がある。9 は 3 本の弧状の沈線があり、地文は LR 縦回転である。

石器 : 10 ~ 11 は I b 類の石鏃。10 は裏面に素材面が残る。産地分析の結果、「赤井川」産と判定された (K04-X4)。12 ~ 13 は両面調整石器。両者とも粗い剥離のみである。14 はつまみ付きナイフ。球顆が列状に混入する黒曜石製で、産地分析の結果、「赤井川」産と判定された (K04-X3)。15 ~ 17 はスクレイパー。15 は I a 類、16 は II 類、17 は VII 類。18 ~ 19 は石核で、18 は II a 類、19 は VII 類。19 は風化度合の異なる剥離面があり、古い石核が再利用された可能性がある。20 は III 類、21 は IV 類の扁平打製石器。どちらも下縁のみ剥離が見られる。22 ~ 23 は II 類のすり石。24 は I c 類のたたき石。25 はくぼみ石で、厚みのある四角い礫の正面中央に敲打による窪みがあり、裏面中央にも敲打の痕が残る。層理面で分割された後、下面側の層理面で剥離が行われる。 (鈴木)

豎穴住居跡 7 (H-7) (図VI-58 ~ 64、表VI-2、図版 47 ~ 50・90)

確認・調査 : C 地区中央の標高 24m 前後の斜面部から低位部への変換点に位置する。南西側は平成 27 年度、北東側は平成 28 年度の調査区となる。

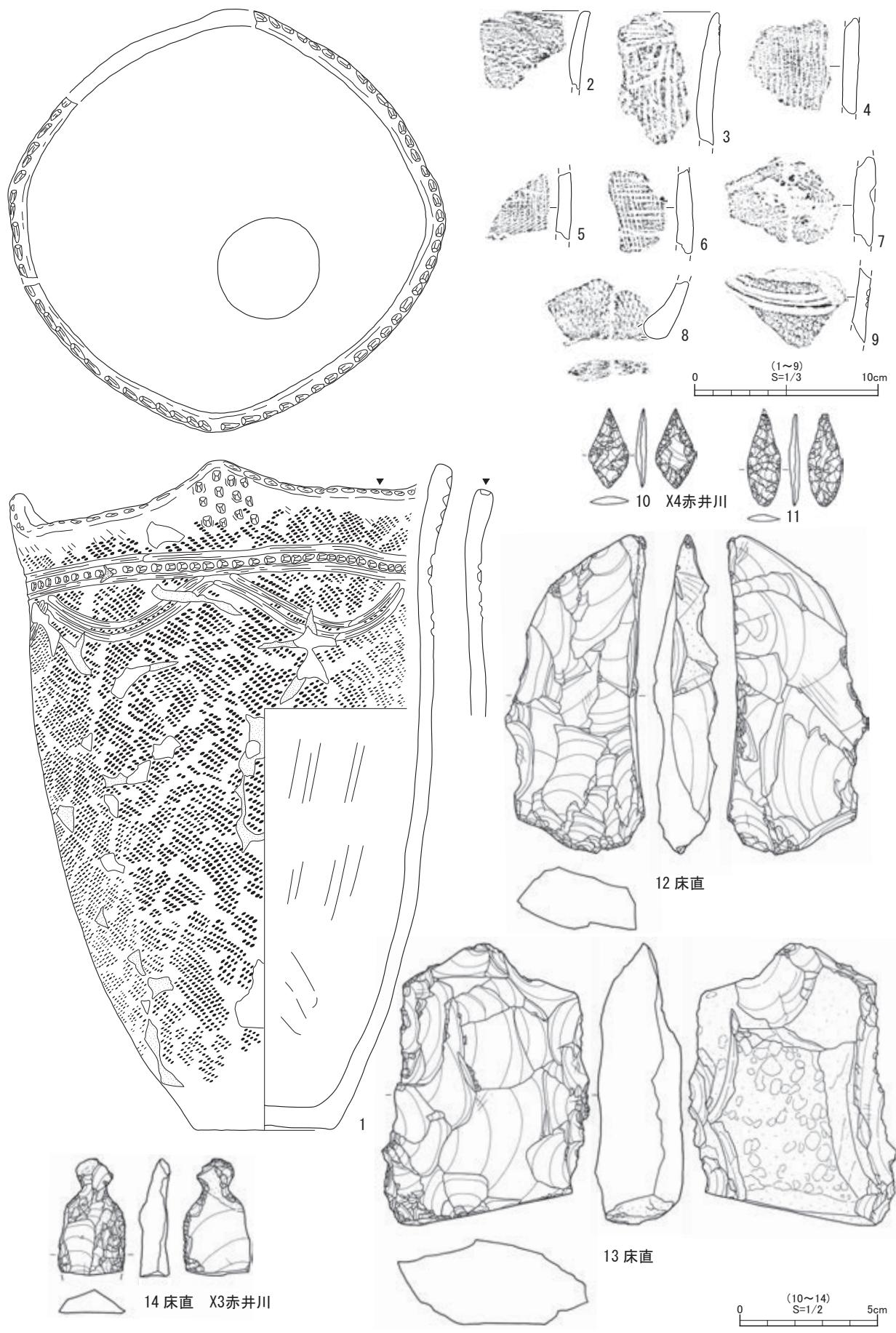
平成 27 年度は II 層を除去後、III 下層で半円形の暗褐色土の広がりを確認した。同方向の土層観察用の短いベルトを 2 本設定し、調査を行った。北西 - 南東方向の土層観察は調査区境界の壁面を利用した。暗褐色土範囲の掘削により床面・壁面を確認したことから、豎穴住居と判断した。

平成 28 年度は II 層を除去後、昨年の住居の続きの位置に半円形に広がる III 上層のくぼんだ範囲が確認できた。前年の土層観察用ベルトの延長線上の東西にトレーナーを設定し、III 上層から調査を行った。断面を確認したところ、覆土 3 層の下部に遺物の集中が認められたため、埋没過程の窪みを利用した住居を想定し、この面で精査して遺物の分布を記録し、付属遺構の検出に努めた。その後、トレーナーにより確認済みの床面・壁面から平面形を想定し豎穴内の調査を開始した。

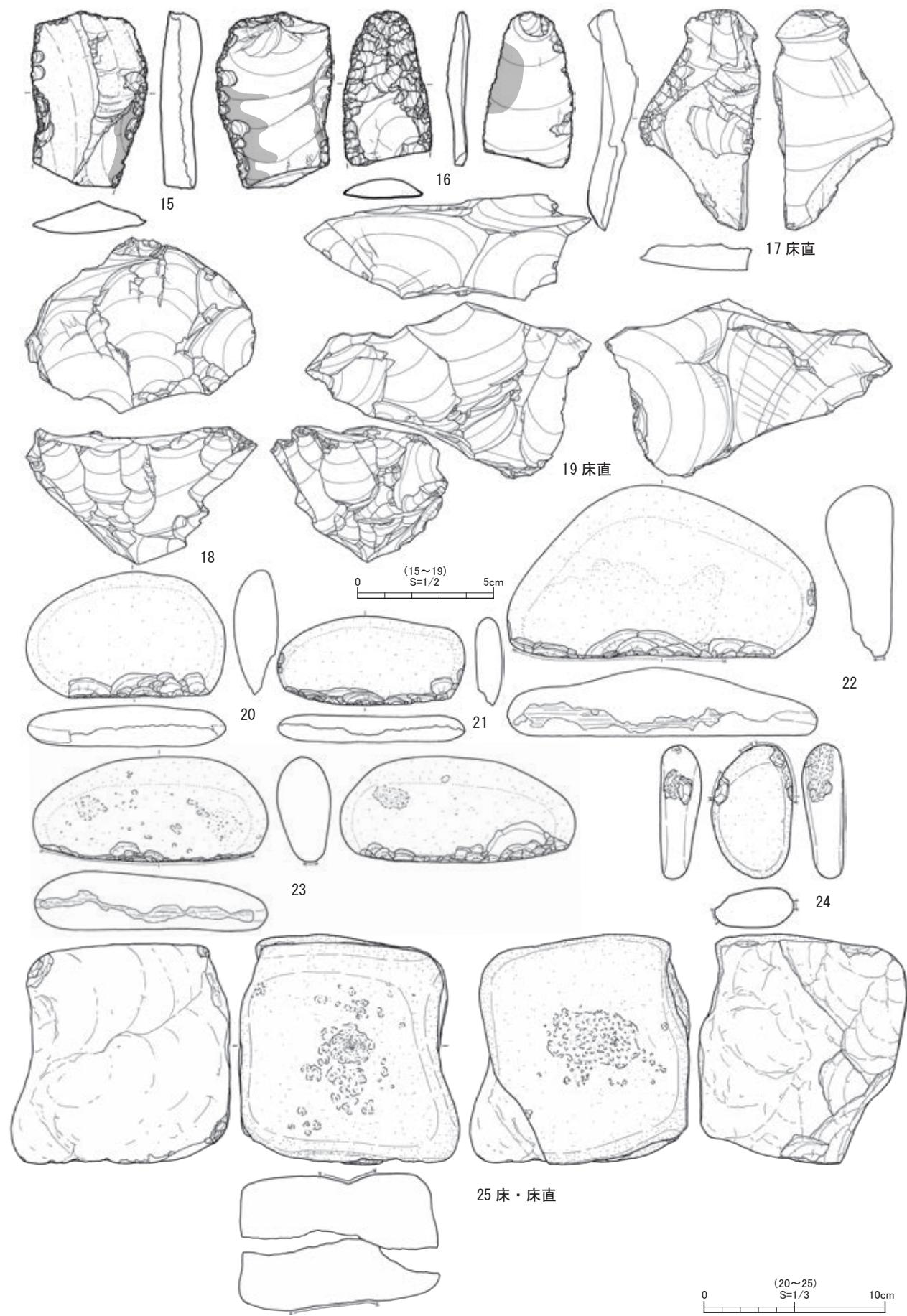
土層 : 覆土は床面に広く暗褐色土 (覆土 5)、南西側の床面から壁際に暗褐色土 (覆土 6)、褐色土 (覆土 6')、黒褐色土 (覆土 7) が堆積している。それらの上位には北半を中心とし黒褐色土 (覆土 3・4) が広くみられ、北壁の上部に崩落に伴う黒褐色土 (覆土 1・2) が部分的に堆積している。また、北部の床面からは住居の構造材の一部とみられる炭化材の集中が検出された。なお、これら覆土の上位に III 下層や M 層が堆積している。

床面・壁 : 床面は平坦で壁は垂直に立ち上がり、一部北側がオーバーハングしている。緩斜面の縁にあるため、北側の壁は 90 cm 程度と比較的深く、南側の壁は薄く 10 cm 前後となっている。

付属遺構 : 付属遺構は HP-1 ~ 8 と貼り床である。主柱穴は HP-1 ~ 5 の五本柱で、径 20 cm、深さ 30 ~ 45 cm と同規模の HP がほぼ均等な間隔で五角形に配置されている。壁際には壁柱穴とみられる径 12 cm 程度の HP-6 が斜めに検出された。中央やや北寄りに 1.5m 程の不整な範囲に貼り床が広がり、

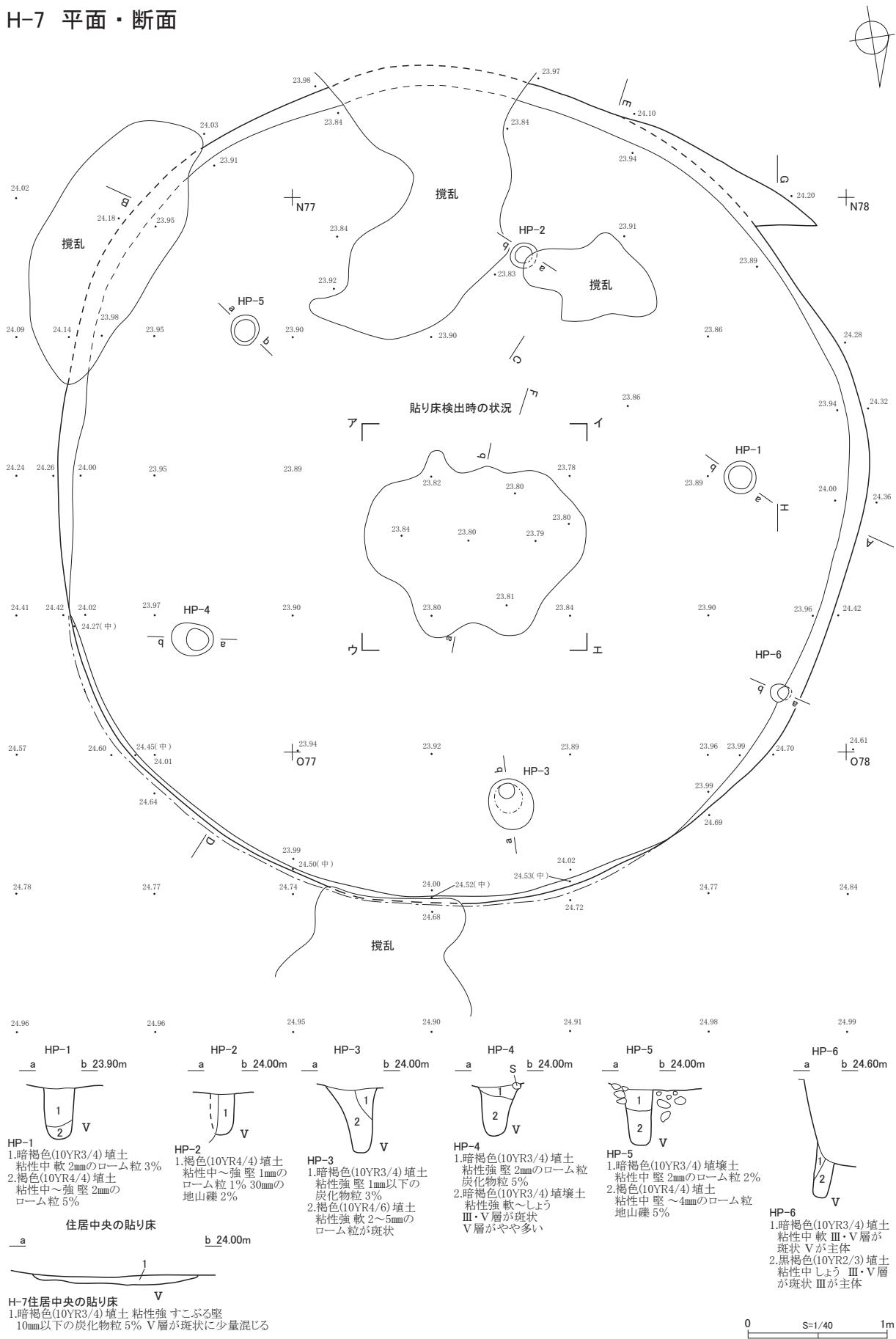


図VI-56 竪穴住居跡 (55) H-6 (5)



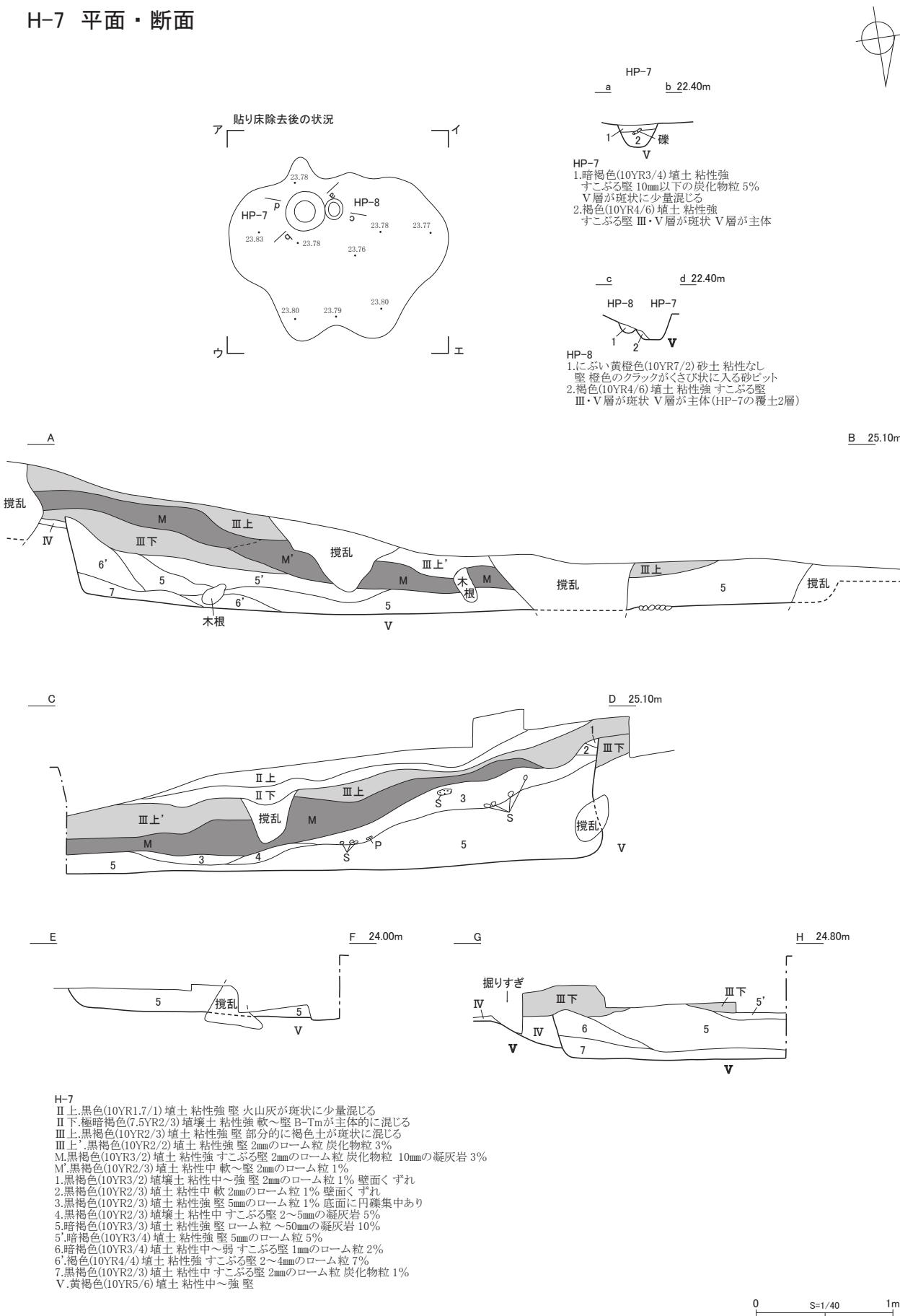
図VI-57 竪穴住居跡 (56) H-6 (6)

H-7 平面・断面



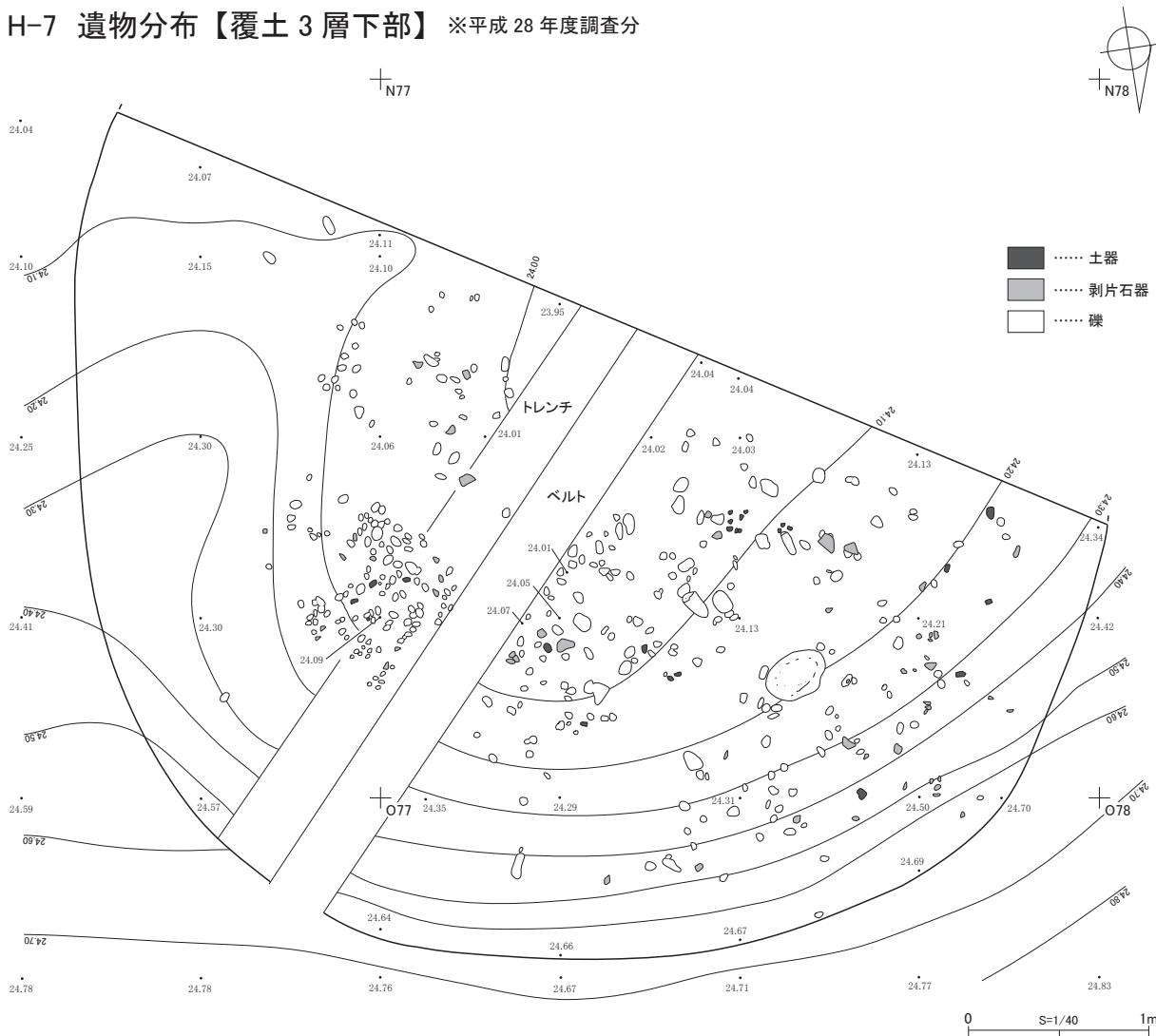
図VI-58 壁穴住居跡(57) H-7(1)

H-7 平面・断面



図VI-59 積穴住居跡(58) H-7(2)

H-7 遺物分布【覆土3層下部】※平成28年度調査分



図VI-60 壁穴住居跡(59) H-7(3)

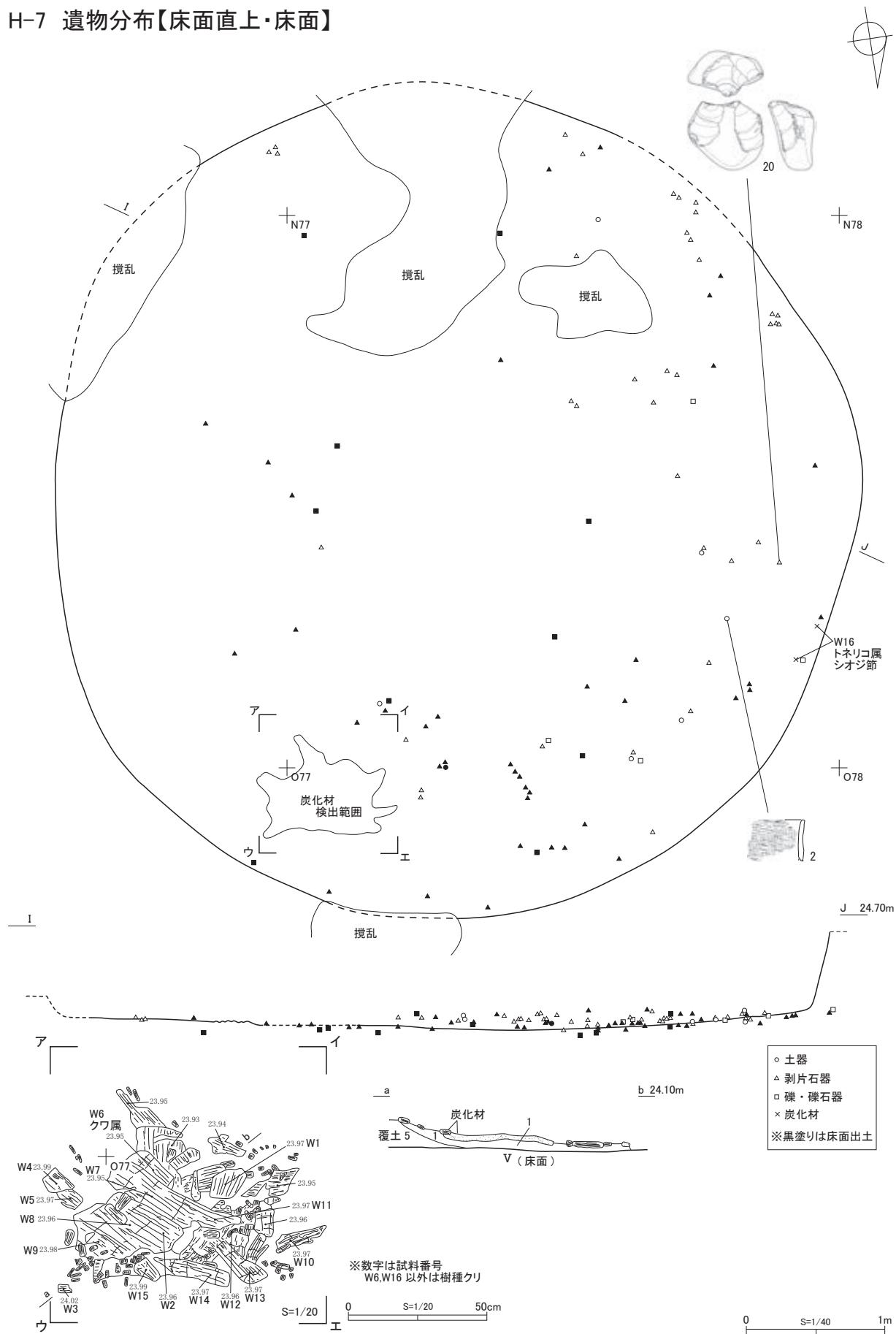
その下位に炭化物粒を多く含むHP-7や砂ピット(HP-8)がみられた。HP-8内でサンプリングした砂は粒度・重軽鉱物組成分析を行っている(VIII章6)。

遺物出土状況：出土遺物の総数は6,235点で、土器等が634点、石器等が5,601点である。土器等はII群b類479点、III群a類2点、III群b類144点、時期不明9点が、石器等は石鏃3点、石槍2点、両面調整石器12点、つまみ付きナイフ2点、スクレイパー21点、Rフレイク18点、Uフレイク6点、剥片3,218点、石核25点、北海道式石冠1点、扁平打製石器5点、すり石1点、石鋸2点、たたき石2点、台石4点、石皿1点、原石17点、石錘1点、加工痕のある礫3点、礫2,254点、垂飾2点、線刻礫1点が出土した。覆土中では3層下部に礫を中心とする多くの遺物がまとまって出土している(図VI-60)。また、構造材と考えられる16点の炭化物について樹種同定を行い、クワ属(1)、クリ(14)、トネリコ属シオジ節(1)と判定された。クワ属、クリは炭化材が集中する範囲のもので、後者が大半を占める。クワ属が幅5cm前後の炭化材、クリは幅3cm程の細材から幅25cm程の大型の炭化材まで多様であった。トネリコ属は北西側の壁際から出土したもので、壁柱に関連する可能性がある。

時期：貼り床の炭化物は $4,810 \pm 30$ yrBP(K04-D11)、床面出土の炭化材は $4,780 \pm 30$ yrBP(K04-D12)の年代値が得られている。これらの年代測定値や床面出土遺物、M層よりも古い検出状況から縄文時代前期後半円筒下層d1式期と考えられる。

(直江)

H-7 遺物分布【床面直上・床面】



図VI-61 積穴住居跡 (60) H-7 (4)

掲載出土遺物：(図VI-62-1～図VI-64-27、図版184・185)

土器：1～6はII群b類。1は円筒下層b1式。隆帯による区画上に不整綾絡文が施文される。2は円筒下層b1～c式。単軸絡条体のある口縁部。3・4は円筒下層d1式。口縁部には2条の縄線と結束第1種羽状縄文が見られる。5・6は円筒下層d2式。5は上下を縄線で区画された内部に斜めの縄線が施文され、口唇部は縄の側面圧痕が見られる。6は絡条体圧痕が横方向に、口唇部には同原体側面が押捺される。

7～12はIII群b類。7は胴が膨らみ、頸部がくびれて、口縁部がわずかに斜めに立ち上がる深鉢。太いLR縄文が口縁部では縦方向、胴部では斜め方向に施文される。8a～cは同一個体。胴が膨らみ、頸部がくびれて波状の口縁部は外反する。押引き文が口唇部・口縁部・くびれ下部にそれぞれ1・2・3条施される。9はくびれ部に刺突を伴う隆帯があり、その上下に沿うように縄線が押捺される。地文はLR縦回転である。10は波状の口縁部で、LR縄文が横方向に回転される。11a・bは条痕文のあるもので、底部から斜めに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。12は底部で、内底面の断面は丸く、外底面は角がある。単軸絡条体1類が縦に施文される。

石器：13はIIb類の石鏃。両面に素材面が残る。14は両面調整石器。幅広で、平坦剥離により加工される。15～18はスクレイパー。15はIa類、16はII類、17はIII類、18はVI類。17は石核の下端を取り込む素材である。19はUフレイク。微細剥離のある右側縁に光沢がある。20はIIb類の石核。10cm程の転礫素材で、数回剥離される。21はIII類の扁平打製石器で、下縁からの衝撃で正面が大きく剥落する。22aはVI類のすり石の接合資料。22b・dは下縁からの、22cは右側縁からの剥離である。剥離順はb→c→dで、右側縁下部が下縁部の敲きによって剥落(22b)した後、右側縁が両面への剥離(22c)により整形され、下縁部の敲き(による剥落(22d))が行われる。22dと本体22eの下縁部のラインは段差があり、22d剥落以降、敲きが継続され、その後下縁部がすり減って器高が減少している。22b～dの剥片3点はH-13床面から出土しており、H-13での使用後、経緯は不明だが、H-7覆土に廃棄されている。23はたたき石Ia2類。24は石皿。両面に平滑面があるが、溝状には発達していない。25は石錘。長辺の中央に内湾する打ち欠きがある。26は線刻礫。正面に剥片による傷が縦横に全体に残る。27は垂飾。先端が籠状に広がる左右非対称の四角形で、薄い素材の四辺は両面研磨により面取りされ、刻みが施される。上部には両面からの穿孔がある。

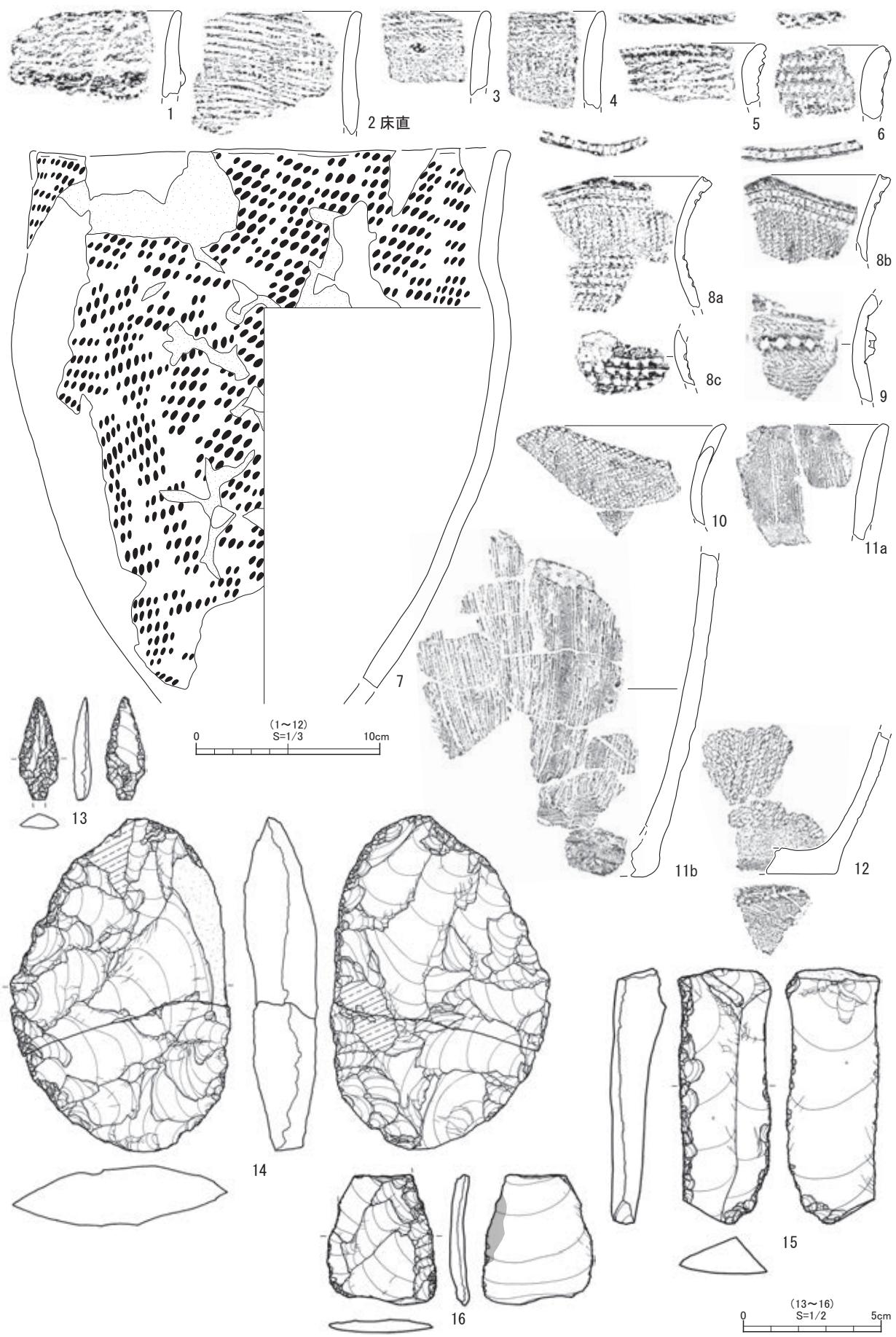
(鈴木)

豊穴住居跡8a・b (H-8a・b) (図VI-65～75、表VI-2、図版51～58)

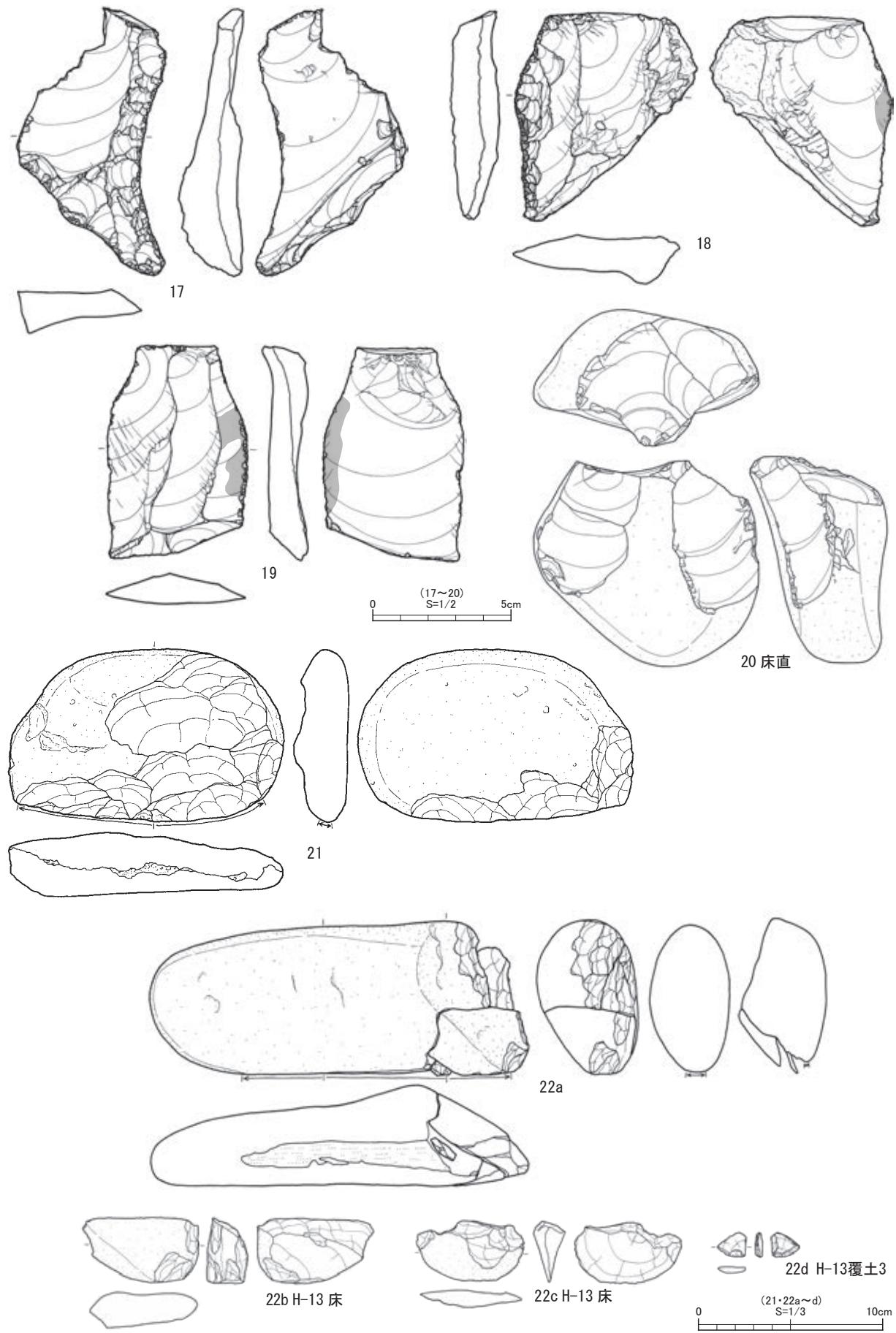
確認・調査：調査区中央南側の標高22.4m付近の低位部に位置する。III層掘り下げ中にKo-dとみられる白色の火山灰とその周辺に黒色土の広がりを確認した。住居跡の可能性を想定し、その中心に直交するように土層観察用ベルトを設定し、また、Kラインセクションベルトを残し、六分割して内部を掘り下げ、Kラインの土層を記録後、そのベルトを除去した。黒色土(覆土上層)を下げるにM層直上に石組炉(HF-1)が検出され、その面を床面とする住居をH-8a、覆土下層の下面を床面とする住居をH-8bとした。遺物は床面の遺物のみ区別し、それ以外の覆土中のものはH-8として取り上げ、集計している。

土層：覆土は大きく上・中・下に三分でき、上部には斜面下側に自然堆積層のI～III上層、中部には斜面上側にM層(盛土1・2)が厚く、下部には内縁部を主体に屋根土の崩落土(覆土2～6)が全面的に堆積する。H-8b廃絶後、斜面上側に相当する西側にM層が流入または厚く堆積し、その後、窪みを利用して石組炉(HF-1)を備えた住居(H-8b)が作られている。

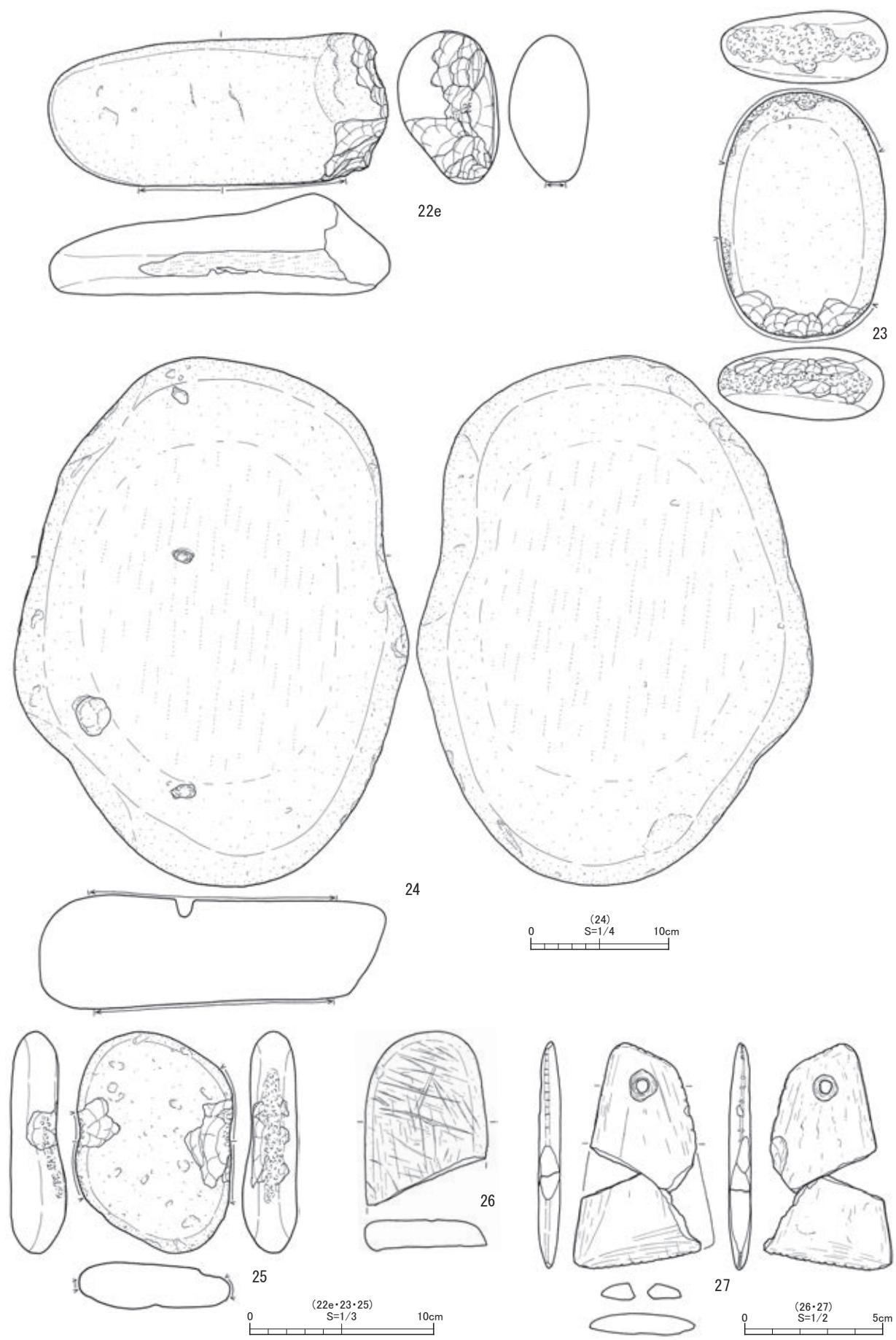
床面・壁：H-8aの床面はほぼ平坦で、M層の層厚が急に変化することから整地されている可能性がある。壁は斜めに立ち上がる。平面形は不整な四角形である。床面付近には石組炉(HF-1)のほか、HF-2



図VI-62 竪穴住居跡（61）H-7（5）



図VI-63 竪穴住居跡 (62) H-7 (6)



図VI-64 竪穴住居跡 (63) H-7(7)

～5や広い範囲に炭化物（HCC-1）や炭化材が分布している。H-8bの床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面のV層は部分的に凝灰岩が混じる。平面形は胴のやや張る隅丸長方形である。

付属遺構：H-8aの柱穴は床面調査段階では検出できなかったが、H-8bの床面調査で直径10～15cm前後の小型のもの（HP-10～17・27・32～34）がH-8aの範囲で円形に巡ることから付属する柱穴と判断した。

H-8bには主柱穴6基（HP-1～6）、浅い小ピット7基（HP-7～9・18・19・28・29）、小柱穴状のピット11基（HP-20～26・30・31・35・36）が伴う。主柱穴は4本で、HP-2・4は覆土上部に詰められた土があることからHP-2はHP-1、HP-4はHP-3に移設されている。両者とも床面中央より外側に移動しており、住居拡張の可能性がある。小柱穴状のピットには砂ピットが5か所（HP-20・30・31・35・36）検出された。砂ピットは直径10～20cm、深さ5～15cmで、オリーブ色の中粒砂がピット内または下部に詰まっている（図版58-7・9・11）。砂ピットを含め主柱穴以外のピットは主柱穴の内側に多い。床面中央には炉とみられるやや赤変した部分が検出された。

遺物出土状況：出土遺物の総数は8,626点で、土器等が846点、石器等が7,780点である。土器等はⅡ群b類430点、Ⅲ群a類1点、Ⅲ群b類32点、Ⅳ群a類383点が、石器等は石鏃9点、石槍2点、両面調整石器14点、籠状石器1点、スクレイパー18点、石錐1点、Rフレイク31点、Uフレイク7点、剥片5,458点、石核18点、石斧3点、石のみ1点、擦切残片1点、北海道式石冠3点、扁平打製石器25点、すり石7点、石鋸1点、たたき石11点、台石6点、原石20点、加工痕のある礫11点、礫2,132点が出土した。

H-8aの床面にはHP-1の北東部に一括土器が出土した。H-8bの覆土からは径5cm以下主体の礫集中（HSC-1）、床面近くからは径10～20cm主体の礫集中（HSC-2）が出土し、床面からは北側の壁際から土器や擦り切り痕のある緑色岩の素材が出土している。

土壤のフローテーション選別の結果、HF-1からオニグルミ核4点、HCC-1からオニグルミ核152点、オニグルミ核?1点、クリ果実基部2点、クリ果実4点、堅果類2点が検出された。

時期：H-8aの石組炉HF-1出土の燃焼材とみられる炭化材からは $3,780 \pm 30$ yrBP（K04-D13）、覆土下層検出のHCC-1出土の炭化材からは $4,610 \pm 30$ yrBP（K04-D14）の年代測定値が得られている。遺物・年代測定値からH-8aが縄文時代後期前葉天祐寺式期、H-8bが縄文時代前期後半円筒下層c式期と考えられる。

掲載出土遺物：（図VI-70-1～図VI-75-56、図版185～188）

土器：1・2はH-8a床面出土。天祐寺式新段階のⅣ群a類。1・2は器形・文様等共通点が多い。底部から斜めに立ち上がり胴部はわずかに内湾し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。無文の口縁部には低い隆帯が囲繞し、1は縦に、2は斜めに貼付が加わる。胴部にはLR縄文が縦回転、隆帶上は横回転で施文される。外面の炭化物の付着が目立つ。

7はH-8b床面出土。Ⅱ群b類の円筒下層c式。口縁～胴部と底部を図上で復元している。4か所の低い波状口縁の筒形の器形で、底部は上げ底。口縁上・下部、波頂部下部に縄線が施文される。地文は直前段反撲（RRL）の縦回転。

14～27はH-8a・b覆土出土。14～25はⅡ群b類。14a・bは円筒下層b2式。口縁部区画帶貼付後に地文の直前段反撲（LLR）が施文される。15は円筒下層b2～c式。地文は直前段反撲（LLR）。16は縦の綾絡文が見られる。17は円筒下層b1～c式の底部。上げ底で、底面にもLR縄文が施文される。18～24は円筒下層d1～d2式。18は縄線と結束第2種、19は縄線、20は貝殻条痕と結束第2種、21は単軸絡条体1類と結束第2種、22・23は縄線、24は多軸絡条体回転文が施され、19の内